說くの傍、溪に下るべきの路あるを指點し、わが爲めに導を爲さんことを乞ふ。即ち共に細徑を竹林の中に求め、石に縋り、岩に恁りて辛うじて溪に達す。

溪、直徑大凡七八町、岩石の奇なるものを屏風岩、硯岩、烏帽子岩、蓮華岩、浦島釣舟岩と爲し、其水の來るや、沈々として聲無く、其色の深碧にして急駛せる、座ろにわれの心を惹きぬ。岩石の中央に一小祠あり、稱して浦島太郎が綸を垂れたるの古蹟と爲す。

岩上に盤踞して四顧すること多時、興の盡くるを待ちて、來路をもとめ、再び木曾川の流に沿ふ。

上松驛は木曾山中福島に次ぐの都邑にして、其の繁華は中津川以西未だ曾て見ざるところ街區また甚だ整頓せり、而して駒ヶ嶽登臨の客は、多くはこの地よりするを以て、夏時は白衣の行者陸續として踵を接し、旅亭は人を以て塡めらるゝと聞く。

上松を過れば、一度遠く離れし木曾川は再び來りて路傍を洗ひ、激湍の水珠を飛ばし、奇岩の水中に横れる。更に昨日に倍せるを覺ゆ。兩岩の山また漸く迫り、棧橋に至りて、更に有名なる一大奇溪を現出し來る。

棧橋や命とからむ蔦かつら。芭蕉翁の過ぎし頃は、其路、其溪、果して如何の光景を呈したりけむ。名所圖會を繙きても、其頃は路嶮に、溪危く、少しく意を用ゐざれば、千尋の深谷に墮つるの憂ありしものゝ如くなるを、纔かに百餘年を隔てたる今日、棧橋の跡なく、溪またかく淺く平らかにならんとは、我はその變遷に驚かざる能はざりき。

されど風景としては、さして惡しゝと言ふにてもなく、見ん人の心々にて、寢覺などよりも勝れたりと思ふもあるなるべし。溪はその長さ二町ばかり、上流より弦形を爲して流れ來りたるが、その弦の中央に當りたらんとも覺しきあたり、最も深潭の趣に富み、溪樹の蓊鬱として其上に生ひ茂れる、また捨つべきものとしも覺えず、殊に、其の深潭に臨みて、瀟洒なる一軒の茶亭あり、名物あんころ餅は旅客の大方は憩ひて味ふところ、秋の紅葉の頃に至れば、來りて遊ぶもの踵を接し、欄干をめぐらしたる茶亭に酒を汲みて一日を暮すもの甚だ多し。

さはいへ、棧橋の名の甚だ高きに惑されて、その實の甚だ名に添はざりしを覺えしは、われに取りて實に少なからざる遺憾をいかにせん。

棧橋を出でゝ一二里、路は次第に高く高くなりて、王瀧川の來りて木曾川に會するあたりに至れば、其の岸の高さ、殆ど俯して水脈を窺ひ得るばかりなり。不圖見れば、王瀧川の上流遠く、雲の幾重ともなく重れる間より、髣髴としてあらはれ渡れる偉大なる山の半面。

折から過ぐる村童に、

『あはれ御嶽にや』と指して問ひぬ。

村童は只點頭くのみ。

あゝなつかしの御嶽、二三日來われはいかにその翠鬟の美しきとその姿の卓れたるとを指點したりけむ。群山の上に挺立すること數百尺、雲は斜にその半腹を帶のごとく卷きて、空の碧日のかゞやき、ある時は茶褐色の衣を著け、或時は濃紫の服をかさね、朝は黄金の寶冠を戴きて、來り朝する宇内の群山に接するの光景は、いかにわがあくがれ易き心を動かしたりけむ。今、これをこの群山の間に見る、髣髴と雖もわが心いかでかこれに向つて馳せざらんや。

雲は見るが中に次第に解けて、その見馴れたる山の絶巓は、明かにわが眼底に落ち來りぬ。

われは佇立時を移しつ。

これより山緩かに水舒びて、福島町に至る間、また一ところの激湍をも見ず。路も次第に下り下りて、その極まる處、遂に數百の瓦甍を認む。

わが友はこの福島町なる奇應丸の本舗高瀬なにがしの家に滯れりと聞くに、町に入るや否、とある家に就きて先づその家の所在を尋ねしに、朴訥なる一人の老爺わざゞ奥より店先まで來りて、

はこの町を右に曲りて、殆ど通抜けんとするところの右側の石垣のある家なりと親切に教へて呉れぬ。

細く暗くして古風の家屋のみ多き町を眞直に突當りつ、そりより右に、旅亭の三四戸連れる間を過れば、木曾川は路と共に大屈曲を爲して、其路の傍に一道の大橋を架したり。それをも顧みずに猶進めば、果して町の盡頭とも覺しき邊の右側に、高く石垣を築おきこしたる嚴しき門構の家屋あり。

これ、友の滯れる家なり。

石階を上らんとしてわれは少しく躊躇せざるを得ざりき。顧れば、われは身に一枚の薦席を纏ひ、しほたれたる白地の浴衣を著、脚には脚袢も穿たず、頭には帽子をも戴かず、背には下婢の宿下りとも言ひつべき丸き一箇の風呂敷包を十文字に背負ひて、その旅に瘦れたるさまはさながらあはれなる乞食ともまがふべきにあらずや。

勇氣を鼓して玄關に向ひぬ。

聲に應じて出で來りたるは、此家の下婢とも覺しき十七八歳の田舍女なるが、果してわれの姿の亂れたるに驚きたりと覺しく、其處に立ちたるまゝ、ぢつとわれの顔を訝り見ぬ。

『なにがし君は此方に居給ふにや』

『貴下は？』

東京より來れるなにがしと名乗りたれど、下婢は猶疑惑晴れざるもの、如く、じつとわれを打守りぬ。やがて其旨を奥へ報ずべく立ち行きしが、少時經ちて足音高く其處に立現はれたり、なつかしきわが友の姿。

『君か』

『やあ何うも……』

『誰かと思ひし』

霰の如き問投詞の互に交されたる後、灑ぎの水は汲まれ、草鞋は脱がれ、其儘奥の室に案内せられたるが、我等二人は先づ何を語るべきかを知らざりき。

友は先づわが衣の汚れたるを脱がしめ、わが旅の汗を風呂に流がさしめぬ。われはいかに喜びてその清き風呂に浴しその厚き待遇に接したりけん。殊に湯より上り來れば、虎の皮を敷き一閑張の大机を据ゑたる清洒なる一室には、丸谷焼の徳利を載せたる午餐の膳既に陳べられて、松竹の香はしき蒸氣はそこはかとなくあたりに満てるにあらずや。

盃を執りつゝ、われ等は何をか語りけむ。友は未だ世に公にせざる新しき詩を吟じてわれに聞かせ、われはわが旅のさまぐの興を語りて以て友を羨ましめぬ。友はいふ、君來らんとはまことに思ひ懸けざりき。またかゝる山中にて君に逢はんとは夢にも思ひ知らざりき。此處はわが姉の嫁げる家にて、さらに心置くべきもの一人もあらねば、長くとゞまりて、御嶽にも登り給へ、王瀧にも遊び給へ、殊に橋戸村は木曾山中屈指の勝と稱せらるゝところなれば、必ず行きて其景を探り給へ、否、君さへ其心あらば、おのれも共に行きて遊ばむと。

我はこの旅の意外に長くなりたるを語り、この山中に來りたるも、實に君に逢ひたしと思ひてなれば、君にすら逢はんには、最早それにて望は達しぬ。都にも爲残したる用事多きに明日はいかにしても此處を發たん。只一夜の宿りを……とのみ。

五

友の詩のかゞやけるも亦宜なりや。室は木曾の清溪に對して、其水聲は鏘々として枕に近く、前山後山の翠微は絶えずその搖曳せる嵐氣を送りて、雲のたゝずまひまた世の常ならず、まして尾後の花園には山ならでは見るを得られぬ珍しき草花咲き亂れて、苦吟の後は、必ずその花園を逍遙す

るを常と爲したりと、友は秋海棠の花の咲き後れたるを摘みつゝわれに語りぬ。友の眉には無限の愁思あり、友の胸には無限の琴線あり。われはこれに觸れんとして却つてわが情の純ならざるを悔いぬ。

午後は町を逍遙せずやといふ友の言葉に從ひて、家の若き主人と三人共に家を出づ、先づ、木曾川を渡りて、對岸なる興禪寺を訪ふ。寺は町の古寺にして、域内に木曾義仲の墳墓あり。境内また頗る廣く、盆踊の盛なるは殆ど町中第一なりといふ。それより町をめぐりて四時少し過る頃、家に歸りぬ。

夜、友と共に再び町を散歩す。美しき月は後山より出でゝ、其興の揚れる、また此宵に似るべくもあらず。われ等は詩を語り、人生を論じ、運命を言ひて、靜かに木曾川の橋上に立てば、滿天の風露冷かに衣を掠め、溪流に碎くる月の光の美しきは、殆ど譬ふるに言葉を知らず。

『盆踊見んとは思はずや』

と友の言ひしは、猶それより彼方此方を逍遙して、美しき月の光を充分に賞し盡したる後なりき。

『まだ、盆踊はあるにや』

『一月ほど前のものとは甚しく劣れど、今も踊れるものなきにあらず。行きて見んと思はゞ、作ひ行かん』

『行きて見ん』

とわれは應じつ。

町を少し左に曲れば、何ともなき廣き土地に、祭禮のごとく人集りて、その中央には手拭にて頬冠りしたる若き男女圈形をつくりつゝ、手を繋ぎ合せて頻りに踊れり。月は水の如くその廣場を照して、一場の光景さながら一幅の畫圖のごとくなるに、われは思はず興に入りてこれを見る。

友はわが爲めに說きていふ、この福島町に於ける盆踊の盛なるは到底此一場のさまなどにては想像にだも及ばぬことなり。毎年その盛期に達すれば、夜ごとに近鄕近村より集り來れる若き男女殆ど無數、皆この一場の廣場に集りて、徹宵踊り騷ぐを常となし、夜深に至るに從ひて、その踊の圈次第に大に、一時二時頃に及べば、その一圈の數七八十餘名の多きに達し、而してその圈の數もまた七八組に及ぶこと尠なからず。されば淫風從つて盛に、見るに忍びざるの醜體を演ずること往々にしてありと友は語る。

『君は其の光景を見たる事あるにや』

『幾度も見たり。幼き頃にもよくこの地に泊りに來ては、その賑かるさまを面白しと思ひぬ。さ

れど今年ほどよくその光景を觀察したる事なし。見給へ、今宵などは左程熱したるさまにも見えねど、かれ等の踊りて興に乘ずるや、殆ど周圍の見物人などは眼中に無く、その自己をすら全く忘れ果てたりと思はるゝ程にて、手の揃ひ足の亂れざる、人業にてはあらじと思はるゝばかりなり。かれ等はかくて終夜踊り、翌日は直に野に出でゝ烈しき勞働に從事するなるが、その根氣の強きはまことに驚かるゝばかりならずや』

『町の者も出づるにや』

『否、近在より來れる農夫多し。町にても下等社會には交りて踊るものあれど、中以上はこれを敢てするものなし』

われ等は盆踊より延いて人間に於ける動物的慾情の消長に及び、その根本的本能の性のいかに吾人人類の上に烈しく恐るべき勢力を有せるかを歎きぬ。

歸りて眠りしは十時過なりき。

六

あくる朝、友の強ひて留むるをさまざまに言ひ解きて程に上る。旅の衣を著け、草鞋を穿ち、蘭

席を被ればまた依然として昨日の乞食書生なり。友と若き主人とは少し送らばやとて後より追ひ來りぬ。美しく晴れたる日にて、路傍の草の露の繁き、思はず人をして秋の氣の胸に沁ずるごとくなるを覺えしむ。一二町にして友に別離を告げんことを望む。友諾せず。猶來ること數町、われより強ふる更に數次なるに及び、さらばとて立留りしは、町を既に遠く離れて、路の少しく右に曲りたる、一株の松樹の面白く立てる處なりき。

友は微笑みてわが旅の姿を見送れり。われは胸に限りなき旅の淋しさを覺えたれど、しかもそを強ひて押へつゝ一歩々々次第に其處を遠ざかり行きぬ。一町にして顧るに、友猶ほ其處に立てり。否、わが方を指點して頻りに何事をか語合へるものゝ如し、猶行くこと一町、顧るに友の姿は早既にあらず。

これより宮の越驛に至る、坦々砥の如き大路にして、木曾川は遠く開けたる左方の山の東麓を流れ、またその髣髴を得べからず。宮の越驛は木曾義仲の古蹟多きを以て世に聞えたるの地、その本城たりし山吹城の遺趾は今猶其の東端にありて、田圃蕭條の中仔細にその地形を指點すべく、傍に祀れる八幡宮の小祠は義仲が初めて元服を加へたるところと傳ふ。

驛を過れば、山影再び帽廂に近く、木曾川の流も亦その美しき景を眼前に展開し來る。一危橋あ

り、翠嵐搖曳するの間に架し、刈草を滿載して馬の徐ろに其間を過ぎ行く、また趣なしとせず。

路は溪と共に左に折れ又右に折れ遂に群山重疊せる間に沒却し去る。雲あり、輕羅のごとし。颯颯として高く揚り、日光に照されてさながら金烏のごとき光を發し。更に無限の秋風に吹かれて、次第に旗のごとく、帶のごとくその山巓を卷かんとす。かくて兩山相仄し、溪聲雷のごとき間を過ぐること一里餘、路は更に幾屈曲して、遂に萬山の窮るところ、蕭々たる數軒の人家の遙かに雲中に歷落たるを認む。

これ卽ち藪原驛なり。

一時間の後、われは鳥居峠の絕巓、御嶽神社遙拜所の華表の前なる、一帶の草地に蘭席を敷きて、峠を登り來りし勞を醫しながら、じつと眼下に展げられたる木曾の深谷の景を見やりぬ。

其景や甚だ大なるにあらず、其眺矚や甚だ廣濶なるにあらず、否、此處よりはその半腹を登り行く白衣の行者さへ見ゆと言ふなる御嶽の姿も、今日は麓の深谷より簇々と渦上する白雲の爲めに蔽はれて、その髣髴を辨ずる能はざれど、しかもわれはこの絕巓の眺望を限りなき激賞の念を以て見ざることを得ざりき。見よ、四面の連山のさながら波濤の起伏するがごとく、遠く高く連れるを、天下何れの處にかこのおもしろき一矚とこの深奥なる無數の山谷とを見ることを得む。また、何れの處にかこの秋のさびしさとこの山の靜けさとを味ふことを得む。況んや秋の日の光は美しく四山の白雲に掩映して、空の藍碧は透徹るばかりに黑く嶮しき山巓を包み、中に無限の秋の姿を藏したるをや。

われは茫然として時の移るをも知らざりき。

松山行

四月二日、午前九時半、われ等の搭ぜる汽船豐浦丸は、伊豫國高濱の埠頭を前にして、停船の汽笛を鳴らせり、寫眞班一行の中、柴田技師、瓦助手、下村清助及び予とは參陽新報後軍記者藤波一哉氏と共に、廣島滯留の無聊を慰めんが爲め、且つは面白き觀察の材料を得んが爲めに、松山市松山病院及び大林寺に收容せられたる露國俘虜を訪はんとは思ひ立ちたるなり。四國はわが始めて遊ぶの地、瀨戸內海の航海もわが未だ試みざるところなりしを以て拂曉、宇品の埠頭に出で、、吳の港より此地に達するの間、われは風光の明かなるに幾度激賞の聲を擧げたりけむ。ことに、淸盛が開鑿したりといふ音戸の瀨戸、其附近の光景は最も深くわが自然に渴する心を惹きて、殆ど双眼鏡をわが手より離さざりき。瀨戸の間、廣きこと三百米突に過ぎず、其右岸に連れる粉壁はさながら

畫くがごとく、海の瀨はこれより東に曲折して、其處にまともに朝日の光のかゞやけるを見たり。時恰も順風なりしかば、港口につどひし舟は皆帆を擧げて日に向ひて發し、その無數の帆の薄黑く相重なりたる光景の美しさは、わが未だ多く見ざる所、柴田技師もこの地の要塞地帶に屬して、撮影する能はざるを憾みぬ。かくて猶航すること二時間、伊豫の山は眉を掃ふがごとく眼前に落ち、遂に高濱の海岸に達せり。

高濱の海岸に立てる四十島の風情あるさまを賞しつゝ、埠頭に下れば、伊豫鐵道は既に準備を整へてわれ等を待てる。言ふ勿れ、狹軌の鐵道にして、速力未だ東京の電車に如かずと。猶われ等はこの汽車によりて、三津濱、伊豫小富士の好景を貪り見つゝ、三十分餘にして松山市の粉壁と、松山城の舊壘との日光のかゞやきわたるを見るを得たるなり。

廣島の俗惡なる市街に比して、われ等は松山市街のいかに淸潔にして且つ風趣に富みたるかを覺えたりしぞや。氣候また甚だ溫暖にして、到る處櫻花の爛開するを見、外套なきも猶ほ身に微汗の滲むを覺ゆるばかり、其心地よきこと譬ふるに物なし。まして、此日は天氣快晴、四面の山美しく霞みわたりて、中央に高く空を摩したる松山城の白堊は、さながら封建時代の面影を髣髴するに餘りあるに於てをや。

晝餐を市中第一の料理店梅の家に濟し、一行は直ちに松山病院に向ひぬ。病院は小唐人町の高臺にありて、白堊の洋館數棟より成れり。露國負傷兵を收容したるところは、裏門より入るべしとの敎へを得て、直ちに其處に赴けば、門には旭旗を交叉して、松山臨時救護所の札を揭げたるを見る。坂路を登る、數歩にして、一名の巡査の一行を誰何するに逢ふ。卽ち刺を通じ、來意を告げ、許されて、構內に入れば、先づ眼に映ずる新築の家屋二棟、その家を遶りて、やゝ盛を過ぎたる櫻花十數株。

救護所長を始めとして、書記、通譯諸氏のわれ等を歡迎されしは、われ等の最も感謝するところ。ことに書記某氏のわが博文館特派員なるを見て、三四日以前に撮影したりといふ露國負傷兵及び醫員看護婦事務員等の四ッ切寫眞、及び病院船博愛丸高濱上陸の光景を撮影したるものを示し、現に昨夜これを御館に送らんと相談し居りしに、今日御來訪とは何等の奇遇と言はれたるには、一同少なからざる感謝の念を感ぜざるを得ざりき。

通譯谷口淸氏われ等の爲めに語りて曰く、渠等負傷兵は二十三名にして、中、下士二名あり、孰れも無邪氣にして、よく赤十字社の厚遇に服し、今は敵國にあるごとき不安の情は少しだも有せず、全癒者及び輕病者は日毎に室內、庭內を散步し、或は談話遊戲に耽り、一意時節の來りて本國

に歸るを待つに餘念なし。重病者は二名ありて、其中一名は下士にして、ステパーノフと言ひ、腿部に負傷し、足を切斷するにあらざれは、恢復の見込なきものなりしも、切斷は本人の希望なくしてはとて仁川にても療治せざりしものなるが、松山に來りてより、愈々其苦悶に堪かね、當人自身覺悟を極め、切斷の希望を申出でしにより、牧師を呼びて遺言を聞き、その意思によりて、死後國に送るべき寫眞を撮影し、主任醫津下壽氏刀を取りて切斷の術を施行せしに、幸なるかな、其後經過甚だ良好に、今は恢復の見込十分につきたりと。

猶聞く所によれば、佛國公使代理、マルチニイ大尉及び佛國神戸領事ポサリユウ氏は通譯を伴ひて態々來訪し、不滿足の點あらば遠慮なく申出でよ、出來得る限り滿足を與へんと言ひしに、渠等は孰れも日本帝國赤十字社の厚き待遇と良好なる治療とに悅服し居れるこゝとて、更に不滿足の點なき而已ならず、日本帝國に對して大に感謝の意を表したり。只、平生無聊に堪ざるまゝ、四五册の書籍雜誌を寄贈せんことを乞ひたれば、公使代理は歸來直ちに十五册の書籍を寄送し來りしといふ。而して其書は多く、歷史傳記の類多しといふ。谷口氏更に言葉を繼ぎて曰く、渠等の無邪氣なるはまことに意想外にて、敵國の捕虜となりて、かくの如くしてあらんとは、吾人の想像する能はざる所、就中ヒヤウドロフ、ポ、ーフニスのごときは、性來の滑稽家にて、絕えず同輩を絕倒せしめ居れり。只、滿足なる教育を受けしものは一人もなく、稍々卓れたるものも、冬期學校（露國にては冬期のみ修學する農民學校ありといふ）を二年修學したる位なれば、手簡なども巧に書けるものは殆ど絕無と言ひても差支なしとかや。

かく語合ふ中に、警察署よりの許可をも得たれば、われ等は其儘伴はれて病室に行きぬ。

今少しく其病室の模樣を記せんに、地は高臺にありて、遠く松山の郊外よりそをめぐれる山嶺の翠微を望み、眺望のすぐれたる、多く得られざる趣あり。病室は二棟を長き廊下にて接續し、中庭には櫻花美しく亂れ咲けり。孰れの病室も晴々しく、明かなる硝子窓を透して露兵の横臥せるさま、さやかに見ゆ。先、病室に通ぜる木階を上ること數級、看護婦の此方を見つゝ二人三人佇立める廊下を行き盡せば、病院に特色なる沃度保留、石炭酸の臭氣ッと鼻を衝きて、カアテンの白き、毛布の白き、患者の衣、看護婦の衣の白き、そゞろに人をして心を動かさしむ。最初に進入りしは、疊八疊も敷かれつべきところにて、中央の半開の八重櫻を活けたる大なる花瓶を据ゑ、卓の兩側には全快せし露兵二名、特志看護婦會より昨日寄贈せられしといふ赤十字の徽號つきたる白き帽を冠りて、硝子窓を透し來れる美しき春の日影に照されながら、頻りに一風變れる珍らしき西洋將棋の盤（これは昨日佛國領事より寄送し來れるものゝよし）に向ひ居たりしが、われ等の入來れる

を見て、忽ち手を留めて、立上りてわれ等に向ひぬ。谷口氏露語にて、われ等の雜誌記者なることを告げ、態々遠く慰問せし由を語りしに、渠等は謹んで御禮を申すよしを答へ、悲しく頭を低れて禮を施しぬ。これを見て、われは心の動くを禁じ得ざりき。國を去る千里、萬里、渠等の思ひはスラブの霧深き野、林深き山に向ひて走りつゝあるならん。親を思ひ、妻を思ひ、子を思ひて、故國懷かしの情は片時も其胸を離るゝことは無きならん。われはトルストイ、ツルゲネフ、ゴルキー等露國諸文豪の小說によりて、かれ等の如何に無邪氣に如何に天眞に如何に自然なるかを知れり。またいかに意思薄弱に、いかに露骨なる天性を有せるかをも見たり。而してかれ等ムジック（百姓）が貴族の壓制の下に、悲しむべき束縛を受け、悲慘なる狀態に陷りつゝあることは、かの國の諸文豪と均しくわが平生最も同情の涙を惜まざりしところなり。今相見るから等皆ムジックにあらずや。敵國の兵たりと雖も、いかでか人類の爲めに同情の念なきを得べき。

一室また一室、かれ等は皆われ等一行の來訪に向ひて最敬禮を施さゞるなし。前の一棟を過ぎ盡せし時、柴田技師は長き廊下に佇立める負傷兵を撮影せんとせしに、最前將棋を圍み居たる二人の中の一人は出で來りつ。さてこのさまを見しが、忽ち室に走入りて鏡を持ち來り、笑ひながら、頻りに其顏を直し始めぬ。あゝ無邪氣なるムジックよ。

一人はわれ等の過ぐる時、特志看護婦會より寄贈せる帽子の上部を烏帽子形につまみ出しつゝ、他の二三人に向ひ頻りに何事をか笑ひ戲れ居たり。これを谷口氏に聞きて貰ひしに、其帽の形羅馬法皇の寶冠に似たるを以て、自から法皇なりと戲れ居たるなりき。

愈々無邪氣なるかれ等よ。

われ等は十箇の病室に收容せられたる負傷兵の光景を見て、今更ながらわが日本帝國赤十字社の行屆きたる待遇に感ぜざるを得ざりき。露兵の滿足せるも道理、無邪氣に遊び戲るゝも道理、――かくてこそまことの人道に背かずと言ふべきなれ。

言ふ、松山の氣候溫暖にして、渠等は附近の花の美しきと眺望のすぐれたるとを愛し、常に前庭に散步するを樂めりと。然り、かれ等の故鄕にはかゝる美しき花あらず、かゝる暖かなる日光あらず、野は深き霧、荒き風に包まれて、半年猶薄き日光をだに見ること能はざるところあるなり。今、この美しき國に來り、美しき風景に接し、美しき日の光に浴す。かれ等の樂めるも亦宜ならずや。浴せよ、爾等敵國無辜の民、わがこの日本帝國の暖かき日の光に、暖かき人の情に……

感慨無量にして病院を去り、其儘小町の大林寺に旅順收得の俘虜三名を訪ひぬ。病院にあるものは未だ宣戰布告以前なりしが爲め、まことの意味に於て俘虜と言ふ能はず、從つて其待遇も厚きに

過ぐるの趣あれども、此處に收容したるは、三月十日驅逐艇激戰の時、わが漣號がステレグスチー艦より獲たるものなれば、俘虜といふまことの意味に於ては、實にこの三名を以て今回の嚆矢と爲すとかや。さればその隷屬も軍隊これを司り、第十旅團司令部これを監督し、待遇も亦わが兵士と同等なりといふ。大林寺は舊松山藩主久松子爵歷代墳塋のあるところ、市中屈指の巨刹なりと稱せらる。街頭先づ巨大なる山門に聳ゆるを認め、近づくに從ひて、松山俘虜收容所と記されたる大札のかゝげられたるを見る。松樹の間を穿ちて中門に至れば、哨兵銃を立てゝこれを護衛し、門頭左の掲示を掲ぐ。

一、露國俘虜慰問は正午より午後二時迄とす

一、露國俘虜を慰問せんとするものは、豫め第十旅團司令部に至りて許可を受くべし

一、露國俘虜に慰問として物品を寄贈せんとするものは豫め許可を受け、その嗜好せるものを問ひて寄贈するを便とす。

而してわれ等の時計は既に午後三時半を指せり。旅團司令部は猶此處を去る五六町、四時までを官衙退出の制限とすれば、許可を得べき暇あることなし。卽ち哨兵に就き、われ等第二軍從軍記者なることを告げ、特別を以て慰問許可あらんことを乞ひぬ。上等兵出て、われ等の刺を上官に通じ、其旨上申に及びたれど、規則なればとて許されず。詮なく、明朝再びこれを訪問することゝ爲し、車を馳せて道後溫泉に至り、旅館三浦號に投ず。

翌三日、旅團司令部に就きて請ふところあり。其日恰も神武天皇祭なりしにも拘らず、一行の切なる願を納れて、露國俘虜慰問を許可せらる。衞兵長小笠原大尉先づ大林寺に至るべしといふを聞き、一行再び大林寺に向ふ。至れば、上等兵一行を導きて、事務室に入らしむ。

小笠原大尉はわれ等に對して、委しく語るところあり。三名の姓名族籍性行は一つとして洩す所なし。ワミリーニコライ、ノウエコフは二十四歲、アレキセー、アレニンは二十八歲、イワン、ヒーリンスキーは二十六歲なり。病院にありし負傷兵と均しく、此上もなく無邪氣にして、旅順の海戰に就きては曾つて知る所なく、只機關部にありて（三名は皆機關兵なり）砲聲の烈しきと悲鳴の凄じきとを聞きしのみ。甲板に上りし時は、既にわが漣艦の占領する處となりし後にて、その中の一人の負傷は其時海中に逃れんとして受けたる打撲傷なりといふ。

通譯某氏來りて、われ等を俘虜の室へと導きぬ。

重き障子を明くれば、中は二十五六疊敷の一室にして、天井高く、室内稍暗くして、長押には肖像閣と題せる金字の大額の古色蒼然たるを掲げ、中央に、兵士の使用せる杉板の大卓を据ゑ、同じ

く杉板の榻を横へ、傍なる大なる火鉢には、ブリキ製の大藥鑵一箇を懸けたるばかり、一室の中寂然として、他、一の粧飾あるなし。奥に偏して、白毛布を被けたる蒲團一つ布かれてあり。これ、一名の負傷兵の休養せるところなるべし。三名は火鉢に凭りて、今しも何事をか語り合へりしが、われ等の入り來たるを見て、病院に於ける負傷兵と均しく直立して敬禮を施せり。われ等は慰問のしるしとして、鷄卵二十箇を寄贈せしに、かれ等は限りなき感謝の情を表し、喜悅の情眉目の間に歴々たり。

ふとわが眼は取片附けられたる奥の位牌階の上に、基督の像らしきものゝ安置せられたるを見て、われは直ちに其傍へと歩み寄りぬ。果して基督の像！　右手に聖書を携へ、其の眼は高く天を望み、後景には美しき夕陽の光を見せたり。畫ける人は誰なるやを知らねど、其の表情、其の色彩、頗る妙境に達せるものあるを見る。通譯某氏は語りていふ、この像はアレキセー、アレニンが故國を出る時、慈母の手より記念にとて與へられたるもの、旅順の海戦にも肌身を離さず、かく生殘りてこの國に生存するを得たるも、全くこの聖像の御惠なりとて、朝夕跪拜を怠らず、と。見よ、かれ等はこの尊き聖像の額の周圍に、櫻花、菜花、紅桃の花を挿して、巧にこれを飾れるにあらずや。

この千里、萬里を隔てたる他鄕の地に、薄暗き、佛寺の位牌階の上に、この美しき花に圍まれたる救世主基督の像！　わが詩思の動けるも決して理なきにあらざるべし。

三名を佛閣の入口に立たせて、撮影したる後、われ等は遂に此處を辭しぬ。

歸途、高濱に至る間、山隈水涯、悉く紅桃の花を以て彩られざるなし。この好風景、この好氣候の地に收容せられたる渠等俘虜は幸福なるかな。謝せよ、わが日本帝國に。謝せよ、わが日本赤十字社に。

歸途、海滑かにして油の如し。

吳軍港に近くに及びて、わが眼前を壓して、俄かに一大汽船の烟を吐きて急駛せるを見る。これ、卽ち東洋汽船會社香港丸の武裝せるものにして、水兵が鼠色の服を著けて立働けるさま、船の左右に速射砲を備へて、全艦薄鼠色の鐵板を裝甲せるさま、手に取るばかり明かに見ゆ。ことに、その大烟突より騰上せる煤烟は斜にわが乘れる汽船を掠めて、遠く書くがごとき海上の蒼波の上に靡きわたりぬ。

吳には春日、日進の二艦碇泊し、日進艦には艦長旗、高く揚れり。

宇品港外に至れば、御用船の碇泊せるもの五十餘艘、常陸丸、信濃丸の諸船の舳をつらねて烟を

吐けるさまを望めば、やがて出發の時のさまも思はれて、座ろに胸の顫るを覺ゆ。車を倩うて廣島に歸れば、軍馬の嘶、劍鞘の光、活動更に加はること一層。

時正に二千五百六十四年の神武天皇祭當日。

老虎山

一

遼東の地、名山に乏し、山皆低く、色彩皆な貧しく、其形の劍拔壺立、仰いで神馳するを覺ゆるが如きもの寥々として晨星のごとし、これを以て、征途萬里、人行き車かへる、しかも遂に懷に忘るゝ能はざるが如き大景あるを見ず。

黃塵天日を蔽ひ、大空これが爲めに暗からんとする時、砲烟天に漲り、殺傷の聲地に遍ねからんとする時、猶山の望むべきあり、水の掬すべきあり、色彩の目を樂しましむべきあらば、人はこれによりて鄕國を憶ひ、平和を思ひ、靜けき夕を思ひ、悲哀懊惱の幾分を醫すことを得べけむ。されど、遼東には、さる美しきもの、卓れたるものあることなし。止むを得ずんば、唯それ一つ。何ぞや、老虎山卽ち是。

わが始めて此山を望みたるは、忘れもせず、五月五日、第二軍の船團鹽大澳の一角に集中して、先頭陸戰隊の旭日旗、高く臺山の絕巓に揭げられたる時なりき。眼下に展げられたるは荒れたる海、をり〳〵立てる波頭は赤く濁りて、大輸送の船は只是れ風に捲かれたる落葉のごとく、荒涼寂寞、實にわが胸はこれが爲めに痛むこと一方ならざりき。此時、西南に聳ゆる一山の影、其色の純紫なると、其形の絕奇なると、その高さの群山小嶺を拔けるとは、直ちにわが眼を惹きぬ。

なにがし大尉甲板にあり。指點してわれに語りていふ、『向うに山が見えるでせう、あれが老虎山、一名大和尙山と言つて、この遼東では先づ名高い山です。金州城は丁度あの山の西南麓になつて居て、あれに登ると、大連からダルニィ旅順方面の小さい山の重つて居るさまも明かに見えるです。何でも敵は金州方面に餘程出て居るやうですから、何うせ、其處までに一戰も二戰も遣ろでせうが、あの山を見ると、何となく懷かしいやうな氣が爲る』

『あの山の下あたりよく御存じですか。』

『えゝ、二十七八年の時に、其處等はもう縱橫に驅け廻つたですから。』と言ひしが、少時途絕えたる後言葉を續ぎ、『あの山に登つたのは……あれは……十月の何日でしたか……』

『登つたことが有るのですか』

『え、斥候の爲めに登つたです。自分と騎兵の軍曹と二人で登つたですが、其頃まだ味方は十三里臺の山を占領せんのでしたから、實に危險でした。けれど、其上に登ると、實によく見えるですナ。大連、旅順――ことに金州城などは丸で眼の下です。君も、暇が有つたら登つて見給へ』

『隨分嶮しいですか』

『さう……嶮いことは隨分嶮しい、丸で路が無いのですから。……それに山が中の峯と奥の峯とに分れて居て、奥の峯に行くのは隨分危險だ』

『社でもあるですか』

『いや、何もありません』

われは大尉より猶さまゞなることを聞きぬ。清國の騎兵に逢ひて慌てゝ岩角に隱れたること山の中腹に支那土民の村落ありて、其中の或家の老爺は烈しく抵抗したることなど、ことに好奇なる吾心を惹きしが、大尉の去りたる後も、われは猶深くその紫色したる山影に見入りぬ。其の山麓なる金州城はいかに、海を隔てし大連、ダルニィの粉壁の夕日に輝く光景はいかにと想ひ來れば、未だ見ぬ所もさながら眠に見ゆるが如く覺えらるゝなりき。――見下せば眼下の海は凄じく波立ち、前に碇泊せる孟買丸の右舷には、小船幾十隻となく集中して、今しも長梯を下り來れる陸續たる兵士、この活動をいかにして忘れむ。

日暮れて、其山猶明かなりき。

二

わが軍長驅して普蘭店に進み、東清鐵道の線を切斷し、五月十五日を以て總軍の前進を起せり。われ、第二軍司令部と偕にあり。其日大姚家屯を發して轉角房に向ふ。あゝ其の日の黄塵のいかに高く天に漲りたりけんよ。砲車、彈藥車、輜重車の列は、日に映ずる劍鋩風に嘶く軍馬の間を縫ひて、丘陵より丘陵の上へと進み行きたるなり。王家店西方高地に至りし時、われは思はず足を留めて快哉を叫びぬ。見よや、わが軍馬、わが劍鋩の陸續たる間、遙かに廣濶たる平原を開きて、右にはかのなつかしき虎老山、左には劍拔矗立せる小河山。

この壯大なる光景は遂に忘るゝことあらざるべし。地を捲きて起る百大、萬丈の黄塵。あゝその黄塵の日に映ずるの邊、見よや、その老虎山の晴色を。

わが祖國、山に富み、水に富み、雲烟に富み、色彩に富み、細緻は卽ち細緻、精巧は卽ち精巧なりと雖も、この荒涼、この索寞、此廣濶をそも何れの處にか求めん。山の大なるにありては、

老虎山、小河山遂にその部婁たるのみならんも、この前景後景の大陸的なるに至りては、到底これをわが國に見ること能はず。

況んやこの大兵、況んやこの軍馬。

われは無限の興を總身に覺えて、疾驅して轉角房に向ひぬ。

翌日は砲聲斷續、午後に至りて最も其激烈を極む、われは宿せる村舍の背後の山にありて、腕を扼してその砲聲にあくがれ渡りぬ。あはれ其砲聲はかの老虎山の山背に當りて崩るゝがごとく聞ゆるにあらずや。

老虎山一帶の地は、頗る遼東半島の要害を占め、金州旅順を防禦するに於て實に第一の最好陣地たり。されば、敵は此の山脈に七八千の兵を置き、砲十餘門を排列して、以て吾軍の進擊に備へしなり。されど、十六日の戰は全くこれを擊破し盡し、數日ならずしてこの險全くわが軍に歸しぬ。

前進せしは、其後數日、亮甲店を經て、衣家屯に至れば、丘陵漸く高く濶く、路は其の山腹を縫ひて山巔に達し、更にその山巔より絶大なる深谷の一端を涉り、天風蓬々として直ちに老虎山の翠色に迫る。近くに及びて、次第に其壯觀を增し來るは、蓋し此山に如くものなからん。山は二段の大削裂を爲し、其の前なるもの最も高く、半、突出したる岩石の奇々怪々たる、わが國妙義の靈峰も亦ほぼ三舍を避けんとするの趣あり。ことに、其日の雲の徂徠の盛なりしことよ、漆黑にして暗澹、さながら惡魔の双翼をひろげたらんとも覺しき雲は、中の峰の低所より蓬々然として騰上し、屹立せる岩石に遭ひて中斷せられつ。一は奥の峰の絶巔を掩はんとしてしかもその勢足らず、一は北部の一角を卷きて、直ちにわが前に開かれたる大谷へと奔り來る。あゝ其の雲の翼破れて、中よりさし渡りたる日影の美しかりしことよ。雲の背を透して大谷に流れ落る日の光は、さながら百道の征箭のごとく、閃々爍々、眼もこれが爲めに眩ずるを覺えき、否、更に壯觀なりしは、それより大谷の一端を涉り、鎭家店の人家を眼下に認めし時なりき。見よ、一瞬にして千變萬化する雲と山との美しさよ。一時間以前の暗澹たる影は漸く盡きて、更に描き出されたるは落日の光景、山は鐵色の衣をぬぎ棄てゝ、襞ごとにかゞやき渡る美しき晴衣を著けつ。暮靄は日に照る大江のごとく、直ちに東瀛の海に朝す。

左を指せば、島影黑く、大窰口の鼻の盡きたる邊、一隻、二隻、三隻までわが戰艦の駛るを見たり。

海には限りなきの潮光湧く。

三

一時軍司令部を置きたる劉家店は、老虎山の東麓、削られたる大谷の中にありて、山中仰ぎて山を見ず、雲影常に日光を蔽ふのところに位す。簇々たる幾楊樹、連亙せる幾丘陵、朝に夕に、われは老虎山の姿に憧れつゝ、いかに遠く谷より丘に渉りたりけむ。而してわが心は常にその絶巓に立たんことを願ひぬ。

此時、わが軍は十三里臺子より老虎山に亙れる線を占領し、斥候は常に石門子附近に出入したりき。劉家店に入りし三日目、我は山を思ふの情に堪へず、參謀部を訪うて、老虎山登攀の許可を請ひ、併せてその危險如何を問ひぬ。

參謀はいふ、わが軍已に老虎山の三面を占領したるを以て、危險と稱すべきものあらざるべし。されど金州方面は猶敵の斥候地たり、或は敵の騎兵の一二騎に邂逅することなしと保すべからず。されどわが心は決す。山に渴するの情は醫せざるべからず。

是に於て、同志を募るに、わが寫眞班員小笠原長政君、國際法顧問田中遜君、通譯西川光太郎君、皆偕に行かんことを望む。寺崎廣業君また意あり。

結束して宿舍を發せしは、五月廿四日。天よく晴れて、大空一點の雲翳を留めざりき。只時既に初夏に近く、流汗肌に遍ねからんことを恐るゝのみ。貔子窩街道を西南に進むこと里許、村あり、河口といふ。第一師團の倉庫あり。猶進むこと里許、又一村落を得。問へば答ふるに關家店を以てす。村頭、楊樹の梢に當りて、旭日旗の赤十字旗と相交叉せられたるを認む。言ふ、是れ野戰病院にして、十三里臺子の戰傷者を收容す、と。老虎山漸くこの附近に至りて眼中に落ち、其皺皺、其大谷、皆仔細に辨ずるを得るに至りぬ。初めわれ等のこの行を決するや、道路辨じ難きの故を以て、村童を得て、以て導と爲さんと欲せり。されど土人の愚なる、一村を盡して、未だ其山に蹬躋したるものなしと言ふ。止むなく地形を相して以てその易きに就かんとす。

小笠原君は自から地圖を視るの眼、地形を解するの經驗を有すと稱す。誇りて曰く、この小山何ぞ導を用ゆることを爲さん。近きに從ひ、易きに就き、以て其の絶巓に達すゝ、敢て難しとすべからず。嶮を恐るゝの諸公、乞ふわれに從ひ來れ、と。其意氣當るべからざるものあり。われ、亦、登山癖を以て自から誇るの身、これを聞きて、何ぞ敢て逡巡することを爲さん。相和し、相答へて、直ちに榛莽の間を穿つ。

山に戒むべきもの二。道路なきの地を過ぐる、是一つ。大澤に陷るを避くるこれ二つなり。しか

も小笠原君の執る所は、榛莽を横斷し、田圃を横斷し、直ちに大澤に向ふを以てその策と爲す。頗る危むべしと雖も、其勇氣と自信と、また大に心を強うするものあるを以て、われ等は唯氏に從ひて進む。

途中、君指點して語る、かの山皺に一澤あり。思ふに、必ず路あらん、と。かくてわれ等は或は楊樹の間、或は荆棘の間、或は溪流の潺湲たる間を過ぎて次第に其大澤の方向は進み行きしが、忽ちにして一小嶺の屹然として前に當れるに逢ふ。登攀するに、岩石磊塊殆ど歩を著け難し。之に加ふるに炎日漸く威力を逞うし、半ばにして氣息喘々、喉間虹を吐く。田中君の如きは、遂に全く登攀の勇氣を失ふ。

辛うじて越え盡せば、一嶺また顯はる。其坂路の急峻なる、宛然板を竪てたるがごとし。されどこれしきに氣を沮喪すべきにあらずと、相携へてこれをも越えつ。見返れば、山嶺重疊、遠く天末に大海の髣髴たるを認め、快言ふべからず。

山を下れば、村あり、これ所謂某大尉が頑爺の抵抗を蒙りし地、其爺猶健在なりや。この山間幽谷の村にして、十年兩度わが日本軍の來り侵すを見る、かれ等亦目を刮するなるべし。

楊樹の美しく蔭を成せるところに踞して、背負ひたる行厨を卸し、水筒の水を仰飲して以て餓を

醫す。後れたる田中氏を待てども、來らず。止むなく程に上る。

大澤既に近く、岩石の路に當つて横るもの甚だ多し。左支右吾、次第にこの大澤の中を行くに、一曲は一曲より深く、一歩は一歩より嶮しく、遂に全くその深奥に陷る。仰ぎ見れば碧落狹く頭上を壓して、白雲の飄揚する、頻なり。

四

是に至りて、われ等は危岩怪石を攀ぢざるべからざるの運に會せり。小笠原君、その易きに就きて、先づ其右路を登る。一町にして斷崖絶壁、飛鳥にあらずんば到底登るべからざるを認む。西川君其左路をたどるに、一町にして瀑布の落下したる跡あり。右に、大石突出し、其傍一徑を通ず。卽ち勇躍してこれに就く。嶮絶、峻絶、一歩を誤れば、身は粉齏し盡さんのみ。

されど一度著けたる踵は旋らすべからず。岩を抱き、石に縋り、草をたより一歩は一歩より進むに、危險始ど極りなし。われは靴を脱し、岩を繞り、辛うじて出後背に接踵し、氣息奄々として漸く一平地に達す、顧れば、小笠原君は猶大澤の中にあり。頻りに聲を發して前途如何を問ふ。西川君は勇氣百倍、更に新路を其の左に求め、岩石の重れる中に其身を沒し去りしが、少時して歸り來

りていふ、路絶ゆ、登るべからず。

此に及びて、われ等の進退は谷れり。下らんか、岩石鬆し易くして、危險甚だし。上らんか、右方の絶壁を外にして、進むべき路なし。

小笠原君、又問ふ。

われは來よとの相圖を爲しつ。

かくてわれ等は小笠原君の登り來る間、隱袋より煙草を出して、頻りに語りつゝ且つ吸ひぬ。

小笠原君は辛うじて登り來りしが、更に背後に重れる岩石の間を探りて、其處に一道の細徑あるを發見しつ。勇躍すること一方ならず。卽ちこれに就きて上る。

かくて千辛萬苦を經て、辛うじて其の中の峰の一角に取附きたるは、それより三十分程經ちたる後なりき。

前に展げられたるは、前の峰と奥の峰との互に相ひ抱きし長谷にして、其を隔てゝ遙かに蒼海の閃爍たる潮光を認めたり。かくてわれ等は其一角に踞して久しく勞れたる呼吸をやすめたるが、續きて起り來れるは、もしや敵の斥候騎兵に邂逅するやうなことはなきやとの杞憂。

『もし、邂逅したら何うする？』

『逃げられる丈け逃げるさ』

『けれど、今の路ぢや逃げるにも逃げられんぢやないか』

『その時は潔く覺悟するさ』

と小笠原君は言ひぬ。

西川君は此時ふと路傍に印せられたる馬蹄の痕に眼を注ぎつ。

『これは、敵のか、味方のか知らん』

『左樣さナ』

『敵からも、味方からも、何うせ此山の上には斥候を出したらうからナ、日本軍が上陸したと聞いたら、敵は屹度この好展望地に登つて其の運動を偵察したに相違ない』

『それは左樣だ』

『まア、そんな心配を爲たつて、爲方が無いサ。漸く登つたんだ、少しく見える所に行つて見やう』

かくと言へば、自から危地に入りたりと思へば、もしや岩陰より敵騎の跳り出ではせずやと絶えず思ひ亂るゝなりき。否、眼下に遊べる豚の群にさへ心を置きつ。

先づ、前の峰に行きて、前方の形勢を展望せばやと、岩を渉り、峰を越えて次第に其方面へ志しぬ。

前の峰は標高大約千二三百米、其形、恰も駱駝の背のごとく、路は東より西へと通じ、岩石の絶えたる處、をり〳〵金州平原の髣髴を認む。

其絶端の一角――踞して、背を丸くして展望したるわが眼にはあはれいかにすぐれたる光景ぞ映れる。金州の城壁は唯それ地圖を展げたらんがごとく、其西南に當りて起伏したる一少丘陵は、確かに敵の主力を置きたりと言はるゝ南山、扇子山らしく、それより遠く弓絃を曳きたるごとく横はれる金州灣の波打際には白き波絶えず碎けて、日を斜にしたる海波の閃爍。否、見よ、敵兵、敵營、一つとして遯影なきにあらずや。

われは覺えず快を叫びつ。

更に左方を展望すれば、瓢を括りたるごとき金州盆地の彼方には、楊柳の綠を點綴したる村落幾箇となく丘陵の間に散在し、その向うには、長方形に彎入したる碧なる海、見よ、一帆の影斜に欹ちて、夕日の眩ゆく輝きたる上に、無數の烟筒、無數の白堊、無數の瓦甍、さながら晴日の蜃氣樓かとばかりに。

ダルニイの市街。

猶仔細に瞳を凝せば、柳樹屯の鼻は三山島の翠螺と相對して、岸に打寄せられたる波濤の白さ。あゝ、この山、かの山、それより連綿と重り合へる翠微の中にこそ、かの旅順へと通ずる路はあるなれ。

雙眼鏡によれば、南山の敵の堡壘、またその一部を見るを得べく、山間盆地に築かれたる家屋一三、それより赤土の路はうね〳〵と山背を縫ひて、その盡きたる處、卽ち堡壘の築かれたるを見る。わが軍の占領せる地點はいかにと見れば、十三里臺子の山より懸けて、連りわたる松山、芝山、其背後は悉くわが兵、白きテント。

眼下の山背にも、わが兵士二三名集りて何事をか語れるを見たり。

われ等は餘りの美しき眺に、以前の恐ろしき念をも忘れて、一意只その展望に餘念なかりき。かくて大凡一時間をや經にやむ。奥の峰に渉りて見ばやと言ふ西川君の言落に、其儘其處を去りて、更に嶮絶峻絶たる崖邊の路を傳へぬ。

奥の峰は中の峰を距る大凡十七八町、路は比較的險しからざれど、前面平滑にして、遠く金州盆地に暴露せるを以て、敵の哨兵の目に觸るゝの虞あり。かくてわれ等は岩陰をのみ求めつゝたどり

ぬ。

奥の峰の絶巓の眺望は更に佳なり。大連、ダルニイ、金州方面は勿論、わが軍の連日進み來りし貔子窩街道はこれを掌に指すがごとく、上陸せし鹽大澳の尾角の海中に突出せる、また殆ど目睫の間にあるを覺ゆ。西川君いふ、此處にありて、戰爭を見ば、恰も蟻の相爭ふがごとくならん、と　眞に然り。

かくてこの絶巓にあること、一時間餘、再び中の峰に下り、更に新路を西方に求めて、下る。山の半腹に、兵士の群。問へば、これ第一師團十五聯隊附にして、前哨の線を張れるものなると語る。

岩角の間の一平地、傍には銃を組み、小甕に水を汲みて、一人は仰向に、一人は立ち、一人は横れり。日暖かに芝生に照りて、空には雲雀高く揚れり。

われ等の間には次の會話忽ちにして開かれつ。

『敵は時々來るですか』

『え……晝間は來ませんが、夜はよく遣つて來ます。昨夜も向うの松山に來たですが、何でも騎兵が二三名らしかつた。番に立つ奴が氣を付け！　と怒鳴ると、いきなり馬の山を驅け下りる音がして、續いて小銃の音が續けさまに二發。自分等が此處から慌てゝ飛出した時には、もう向うの山の陰に行つて居たです』

『此方から行くこともあるだらう？』

『え、よく行くです。向うに見える小高い山、あれが肖金山ですが、あの山が丁度敵味方斥候の衝突點になつて居るのです、一昨夜も山田大尉が彼處で遣られた――』

『隨分氣味の惡い事があるだらうね？』

『それァ、あるですけれど――爲方が無いです。もう二三日の中に愈々始まるといふですが、一番一つ旨く功名して遣り度いものだ』

『何うせ功名するか、死ぬかの二つサ』

と他の一人は言ふ。

『貴樣はよく死ぬ〳〵と言ふが、死ぬのが何だ』と快活らしき上等兵は前の上等兵に向ひて、

『死ねば――潔よく戰死が出來れや、それで本望ぢや無いか。この遼東の土に骨を埋めるなどは、普通では願つて出來やせんぜ』

『本當だ』

と他の一人は言ふ。

『何うも杉田は何時もくよ〳〵して好かん。そんなにくよ〳〵すると、明日本當に死ぬぞ！』

杉田と呼ばれたる上等兵は敢て答へずに、其儘、銃を携へて彼方に行きぬ。

われ等はこの無邪氣なる兵士と猶さこ〳〵のことを語り合ひしが、日やゝ傾き始めたるに驚き、急ぎ、山を走り下りて、貔子窩街道に出でしは、午後五時。

翌々日は金州南山の大攻撃。終日、砲烟天に漲り、叫喚の聲野に充ちぬ。われ、肖金山にありて、これを觀しが、あゝ、わが自然に渇する情の甚だしさよ。悲劇まさに終らんとして先、認めしは、老虎山上一輪の月。

五

老虎山は遼島に於てわが忘るべからざるもの、一つとなりぬ。屹立する其姿、千變萬化する其貌、山を隔て、海を隔てゝ、猶その面影の髣髴としてわれに迫るを覺ゆ。金州城外の宿舍、月明かなる夜毎、われはいかに其山を仰ぎて鄕國を懷ひたりけむ。大連、青泥窪の海岸、所謂アタ〳〵車を鞭ちつゝ、いかに其奇なる姿を見返りたりけむ。海行く人よ、頭を擧げよ。群山を率ひて立てるその偉大なる貌は、いかに荒涼寂寞たるこの支那海を彩りつゝあるか。

われ、これより北する百里、足跡遠く遼東の奥を極め、七盤、新開、尖の諸嶺の美しく日に映じ、雲に彩らるゝを見たり。されどわが思ひは常にこのなつかしき老虎山の傍に飛びぬ。

最後に其姿を失ひしは、九月十三日。備後丸はわれ等一行を載せて、刻一刻毎にこの遼東の地を離れつゝあり。暑き日の、空氣の鮮かに、渡頭の閃耀、海色の深碧、甲板の上には乘客皆涼しき風に袂を孕せつゝ、青泥窪の粉壁瓦甍を指し合へり。されどわれは獨りこれに背きて北を望めり。見よ、老虎山は微笑を含みてわれを送るに似たらずや。

尾角に至りて、其影遂に見えず。

征塵

▲常陸丸事件のあつた頃、一時輸送が充分で無かつた爲め、軍司令部に附いて居る者も、普通の米六合を四合に減ぜられたことがあつた。其時分は第一線に出て居る兵などはそれば酷いもので、何でも二合位しか渡らなかつた。けれど如何にしても二合では凌げぬので、多くは民家から粟を徵發して混ぜて煮いた。

▲自分は北大崗寨に居た時、ある用事があつて第四師團の第一線に出懸けて行つたが、其時その粟七分米三分の飯を御馳走に爲つた。粟は穀物としてそんな拙い者では無い、よく炊いて煮いたなら、麥飯などよりも數等旨いのであらうが、兵士などは砂を沈澱せしめる手數を煩はしとして、其儘炊くので、實に砂が齒に當つて食へぬ。粟飯ぢや無い、砂飯など、言つた事がある。

▲それでも前線の兵士などは、腹が減つて居るので、そんなことには頓着しない。粟結構、砂結構といふ具合で、どし〳〵飯盒に詰めて行く。それから、この飯盒と言ふもの、これは日清戰役の經驗から產み出した一種の辨當箱で、こればかりは兵士が實に重寶なもの、便利なものとして使用して居る。實はアルミニユウムで、下には三食分の飯が入れられるやうになつて居て、上に、菜を入れる所が出來て居る。それに、便利な事にはこれで完全に飯が煮けるので、兵士は大隊、中隊の厄介にもならず、各々勝手に、米を貰つて來て煮くのである。

▲即ち、朝一度これで煮いて置くと、終日飢饑を覺えずに濟む。それから、その菜を入れる上のものが湯を沸し得るやうになつて居て、一くべ高粱殼を燃すと、すぐ沸く。『實に、これは重寶だ、これを考へた人は餘程えらい人だ』と言ふ兵士の言葉を自分は幾度聞いたか知れぬ。

▲それから、アルミニユウム製の金椀、兵士は多くこれを持つて居て、出發する時などは、それが水筒に當つてかた〳〵と鳴るのであるが、これは水を呑むには好いが、湯には熱くつて持てぬので少なからず閉口する。敵の携へて居る水呑は、多くは紫色した瀨戸引の奴で、南山の戰場には拾ひ切れぬほど落ちて居つた。水筒も敵のは中々大きくつて岩疊に出來て居る。兵士の携へて居るのは、比較的丈夫で、火に懸つて湯を沸すことが出來るが、それでも少さくつて、分量の餘計に入らぬのには困る。敵のは七合から一升入るが、味方のは何んな大きくつても五合より以上は難しい。

▲靴も敵の方が確かに好い。それは、中には隨分酷いのを穿いて居るのもあるが、戰死者、捕虜のは多くは立派で、皮はロシヤ皮のりうとしたのを使つて居るのが多い。且つ、短靴といふものは用ゐぬと見えて、歩兵も皆深い長靴。

▲戰利品には外套が多い。寒くつて爲方が無い、一戰すれば好いナアなど、は六月頃猶聞いた言葉で、遼陽の戰などにも、血のついた敵の外套を被て居る負傷兵もあつた。今は冬の嚴しい寒氣、嘸ぞ一戰するのを待つて居ることであらう。戰地では、血と汗と泥とは普通のことである。

▲敵の彈丸は砲のも小銃のも共に味方のより餘程大きい、ことに、榴散彈などは味方の三倍位あつて、それの空中を鳴つて通るのに凄じい。それから、敵の砲も頗る良好である。けれど彈藥に至つては、我に及ばざるや遠しで、その破壞力は到底比較にならぬ。敵の捕虜曰く、『實に、曳火彈

の破裂するのが恐ろしい。丸で粉微塵になつて飛んで來るのだからナ』と。また、小銃の彈丸の小さいのも、頗る意味あることで、打つ數にかけては、それが爲めに味方が非常に多い相だ。

▲一つ特色は敵に榴彈が無いことである。敵はその代りに著發彈を用ゐて居るけれど、何うも榴散彈ではその爆發力、破壞力が乏しい。味方の砲は榴彈があるので、よく敵の砲を破壞し得るのである。

▲砲車の運搬、これが實に困難なものである。內地のやうな立派な路でも、山坂を登るには隨分困難であるのに、支那は路が非常に惡く、砂路でなければ凸凹路、ところ〴〵に車の輪が二尺も入るやうな處があつて、雨が二三時間も降ると忽ち深い深い泥澤になつて了ふ。鞍山站の戰、敵は砲を泥澤の中に曳込んで、其八門を鹵獲せられたが、敗軍にでもなれば、それは尤で、これを完全に運搬して退却するといふことは至難である。

▲砲車を曳く馬匹を見ても解るので、上陸地附近では、肥えた立派な馬であつた奴が、南山を經、得利寺を經、大石橋を經、海上附近に至ると、丸で見違へるやうに、痩せこけて了つて、あれが以前の砲兵旅團の馬かと思はるゝのである。吾班の一人曰く、『馬でさへあの通りだ。我々のやつれるのも當り前のことだ』と。

▲實際、海上あたりまで行くと、流石衝天の意氣があつた自分等も甚しく悄氣て了つたので、鏡に映る顏は丸で見違へる程瘦れ切つて了つた。それも其筈、食ふ米と言つたら、黴だらけ、福神漬、牛罐も惡臭く、軍用エキス、粉味噌の苦さ！　それに、自分等の一番弱つたのは蠅。

▲あゝ今思つてもぞッとする。あの黑い奴が旋毛の毛髮のやうに食物に集つて追うと、ワンと言ふ聲を立てゝ逃げる。實に、それを見ると氣が惡くなつて了ふので、『あゝ、この蠅ぢやとても堪らん、これぢや病氣になるよ、屹度病氣になるよ』と吾々はよく言つた。それに、この蠅が追へば追ふ程遣つて來るので、千、二千、五千、萬、殺しても、後からどし〳〵遣つて來る。

▲今は嚴冬、寒いには相違ないが、この蠅の居ないのが餘程助かるであらうと思ふ。それに、滿洲は乾き切つて、水蒸氣の少い處であるから、內地のやうな雪に酷められることはなく、風は吹いても毎日快晴で、心地は夏よりも却つて爽然しいであらう。殊に、支那民家の炕、これが嚴寒の爲めに造られてあるので、下に火を焚きさへすれば、西洋の暖爐などよりも數等心地が好いに相違ない。哨兵、斥候などは酷いが、宿營して居るものは却つて冬の方が好いかも知れぬ。

▲けれど、燃料には嘸ぞ不自由して居るであらう。高粱殼は秋の收穫後とて隨分少くはあるまいけれど、十五六萬の兵士が燃すのには到底充分なる譯には行くまい。自分等が林家屯（普蘭店の東一

里）に居た時、同じく燃料が無くつて困つたが、支那人は利に敏く、幾年前に毀つた家屋の棟木や塀などを取つて置いたのを、丹精に鋸で引いて、一斤三銖錢（三十錢）で自分等に賣つた。一斤！かれ等の一斤は何を標準に爲たのか、それが飯を煑いたり、菜を煑たりすると一日で烟に爲つて了うのであつた。わが兵士はさぞこの高價なる燃料に困つて居るであらう。

▲唯々豚はさぞ旨からうと思ふ。支那では牛は硬くつて拙くつてとても食ふに堪へぬが、本場だけに豚は旨い。この寒い日、民家の大釜に子豚の一疋も入れて、熱い汁を造つて食ふ位が、此頃の陣中の快樂であらうと想像する。

▲上陸地點から金州、金州から熊岳城、蓋平、此附近を進軍する頃には、如何にも物質が乏しくつて、煙草の一服、酒の一滴にも不自由する位であつたが、大石橋で勝つて、營口が我手に入つてからは、さま〴〵の物資はそれは〳〵豐かになつて、麥酒でも、ブランディでも、日本酒でも、煙草でも、錢さへあればいくらでも買へる。否、軍の糧餉にも實に便利を與へたので、わが後方勤務は始めて此處でほつと呼吸を吐いたと言つて宜しい。現に、馬などの補充も大分此處でついたので、遼西から滿洲に產する蒙古馬の一種は、その勞力に耐ゆる點といひ、性質が比較的從順なることいひ、本國から態々面倒な思ひをして伴れて來るより、餘程好いといふ事である。そして其價も

至極低廉である相な。

▲殊に、今では鐵道が著々成功して、青泥窪から遼陽までは唯一飛び、列車も日に數回往復するとの事であるから、本國から送る物資も嘸ぞ豐かになつたことであらう。今やわが軍は後顧の憂なく充分に戰ふことが出來るのである。

▲糧食輸送と言へば、始めはそれは難儀したもので、鐵道の完成せぬ中は、多く支那の馬車、騾車、牛車を使用した。この各種の車は路が惡いので、孰れも一輛、三頭或は四五頭の馬、牛、騾をつけるのであるが、一車に二斗入の米俵二十も載せると、それでもう動けぬので、そして一車一日の價が七圓から九圓。何うです、一時は此車が殆ど三十里程も連續したのだ。

▲それから、得利寺の戰爭が濟んだ頃から、漸く敵の棄て去つた鐵道貨車を利用することになつて、所謂、汽車の綱曳といふ奇景を到る處に描き出した。各方面より集めた清苦力、それを二十五人づゝ、一貨車の兩側につけて、開路々々と言ふ聲の下に押出すので、これでも騾車を使用するよりは何れ程經濟であるか知れぬのであつた。この貨車には、自分も隨分御厄介になつたが、勾配の下り坂になつて居る處に懸ると、丸で本物の汽關車をつけた汽車も跳足といふ程の早さであるが、上り坂に懸らうものなら、それこそ御難！　うん〳〵言つて曳いても一時間　十町位、蟻の這ふ

とは實にこのこと。

▲それに、これに乘つて行くと、何の事は無い。支那苦力の野糞を遣るのを見物して行くやうなもので、貨車の兩側に取附いた何百人の清苦力、それが交る交る、殆ど絶間なく野糞を遣りに行く。渠等は殆ど糞の後の尻を拭はぬので手などは勿論洗はうとは爲ない。實に不潔極る動物である。

▲動物！　西洋人は支那人を目するに動物視するが、實際動物！　下等動物と言ふ感を起さずには居られぬので、かれ等は生理的に人類といふ資格を失つて居る。想像して御覽なさい。かれ等は水溜の水、泥色なせる澤の水、馬蹄の痕に溜れる水を飲んで、そして平氣で居るでは無いか。

▲かういふ風に、何處の泥水を飲んでも、觸らぬやうに腸を持つて居るので、井などは甚しく必要が無いのであらう、一村に二ヶ所位あるか無いかで、それが又何年と無く井浚ひなどをしたことが無い。水が腐つてバチルスなどの發生するのも道理である。けれど其バチルスにも恐れぬ支那人の腸、實に羨ましい腸と言はなければならぬ。

▲で、この貨車苦力は一日七十錢の賃銀であるが、晴天ならば隨分澤山集つて來るが、雨天になると、丸で遣つて來ない。止むを得ず輜重輸卒が（支那人はこれを日本苦力と呼ぶ）うんうん言つて曳くのである。

▲この雨天に遣つて來ぬといふこと、これにも理由がある。渠等の雨を恐れるのは雨具を有して居ぬからで、この遼東半島の人民ほど雨に對して防具を備へて居らぬ人種はあるまい。渠等は雨が土砂降りに降つたからとて、傘を用ゆるではなし、下駄を穿くではなし、只一箇の饅頭笠を被つて、びしよ〳〵出懸て行くのである。だから、雨中の仕事には全く無能力である。

▲これもつまりは此地方が雨が少ないからで、滿洲の雨期とか何とか、內地では甚しく大袈裟に言ふが、實は、ある時の少時日を限つて、三日とか四日とか續いて降ることがあるばかり、あとは大概晴天が長い間續く。現に自分等は上陸してから得利寺戰後あたりまで、殆ど二箇月間一度も雨に邂逅したことが無いと言つて好いので、內地では雨の多い六月でも快晴が毎日續いた。これと言ふのも、野に樹木少く、水蒸氣に乏しいのも其一因であらう、實際、滿洲には曇天と言ふことが實に尠い。

▲從つて、住民等は雨に左程苦勞して居らぬので、傘が無くとも、下駄が無くとも、平生の用は辨じて行くのである。

▲遼東の野には殆ど楊樹の他に木が無いと言つて宜しい。山は無論、岩山の、兀山の、植えたら隨分育つのであらうが、更にさる經營を試みるものが無い。自分が熊岳城附近で、正紅旗の村夫子に

其理由を問ひ、何故に殖林に從はざるかと聞くと、渠はかう書いて自分に示した。

清國從來習俗皆從民性、而兼山皆官山、雖有致志者、亦無可如何、

▲つまり山は皆官山で、住民は何うすることも出來ぬとのことである。支那政府もまた國事多端で、容易に殖林などに手を附けて居る暇が無い。であるから、遼東は瘦地だとか何とか言ふが少し經營すれば、立派な國になることは明かである。

▲唯々嘗蘭店以東以南は非常に瘦地であるらしい。粟、高粱などの出來榮も蓋平海城附近に比べると、丸で雲泥の差があるし、土民もまた甚だ不開化のものが多い。露國は地形上この地方を租借したが、實に蓋平以北が地味が最も豊饒である。ことに、蓋平の麻、營口の豆などは實に盛だ。

▲で、樹木は楊樹の他無いと言つても好いが、それも林を爲して茂つて居るのは少いので、多くは村の所在を示す爲めに植ゑられてある。其他、林檎、梨、棗、梅、杏などがあるが、これは各民家の庭園に菓樹として植ゑられてあるばかり、數にも入らぬ位。

▲花は桃の花、梨の花、これとて日本のやうに何町も續いて咲くといふやうな奇觀は見度いにも見られぬのであるが、春五六月頃、荒涼たる赤土のところ〴〵、楊樹の綠に交つて咲いて居る具合は中々詩趣に富んで居る。殊に、軍馬兵士、糧食車などをそれに點綴すると、鳥渡スケッチ位には充分なる。

▲野の花では、菫。自分は荒涼たる滿洲の野に、一つ二つあはれ氣に瘦せて咲いて居るのを見て、實に涙が滴れるやうな氣が爲た。これを譬ふれば、太古の時代に生れたあはれなる詩人のやうなもので、これの匂を嗅ぐ美しい鳥もなく、只、徒に咲いて徒に散るばかりである。次に、菖蒲。と言つて內地のやうな大きなものではないが、これは金州の平野に澤山咲いて居つて、戰死者の血汐に染られたのを多く路傍に見た。この悲慘なる戰後の場に、この美しい花。自分は寺崎廣業畫伯と幾度指して其配合の妙を語つたか知れぬ。それから、撫子も少しはあつた。秋の草花では、唯、薄が風に靡くばかり、萩桔梗は愚か、無名の草花さへ一つもない。實に淋しいのは遼東の野である。

▲だから、戰死者の新墳にも手向ける花と花ふものが無い。生殘つた戰友の其墓前に据ゑた牛罐の花立にも、楊の枝か薄の穗位のもの、中には、蕎麥の花、高粱の穗などを挿してあつたのを見た。

▲今回の奉天の會戰中、烈風砂塵を捲いて、天もこれが爲めに暗く、五百米以內の敵の陣地も分明と見えなかつたことが記されてある。北淸地方の砂塵烈風！　これは實際日本のやうな山國に生れた者の想像することの出來ぬもので、其の佗しさ、其の辛さ、却つて嚴寒將軍などよりも烈しか

らうと私は思ふ。一望千里、野も山も畑も村も唯この黄ろい塵に包まれて、天地は只是れ渾沌なる太古の昔に歸つたかのやう。それに、礫が交つて飛ぶので、顔などは向けられない。

▲この砂塵を侵しての奮戰突擊、想像しても其時の光景が見えるやうな。敵、味方の砲が互にすぐ鼻の先で破裂しても、敵が何ういふ風に陣形を布いて、何ういふ風に作戰を計畫して居るか更に分らん。斥候を出して探つて、探つて、探り拔いても容易に解らん。爲方が無い、敵を全滅させるか、味方が全滅するかの覺悟で盲進する。わが滿洲軍の勝敗の危機は實にこの一日に懸つて居つた。

▲それにしても、この砂塵の中の戰爭を見なかつたのは、自分に取つて、ことに遺憾に感ずる。何故、今まで軍に從屬して、この壯觀を見なかつたらうと後悔するのである。それは實際、其場に臨むと、一寸先は辨ぜぬので、却つて興味が無かつたかも知れぬけれど、兩軍今が決勝點と言ふ時に、この天然の大景、奉天の大戰は實にこの砂塵を以て其の後景を塗つたのである。

▲從つて、敵が大敗して奉天を退却した當日の光景が思ひ遣られる。奉天停車場を發した最後の列車、それには貨物が五六十臺も續いて、滿載されたのは病兵、負傷兵、車内は蒸し殺されるやうに人が詰つて、入口にも、足掛にも、屋根にも兵士が蟻のやうに集つて居る。西から南に懸けては、我大軍が潮のやうに孤線を畫いて押寄せて居るので、渠等はもう氣が氣でなく、さながら死の神に追ひ懸けらるゝかのやうに、汽車の速力をもまどろしく思つたに相違ない。

▲ことに、わが最左翼軍が一段旨く高飛車に出て、鐵路附近の鐵道線路を脅威したので、其最後の汽車は殆どわが軍の彈著距離に暴露して全速力で退却したとのこと。其刹那、卽ちわが砲彈を浴びながら、傍目も觸らず退却した一瞬間の光景はさぞ奇觀であつたらうと思ふ。けれど此時の光景を充分に味はうとするには、日本軍に從軍して居ては駄目だ。露軍、ことに、其最後の列車に便乘して居らなければ駄目だ。

▲もし、其列車に乘つて居つたら、何う……。恐らく其時に於てこそ、死の神の恐るべきを最も痛切に味はうことが出來たであらう。蜈蚣のごとく蜿蜒と走つて行く車。窓からは、砂塵を透して、日本軍の前進して來るさまが微かに見え、砲彈はしつきりなしに三四間也至五六間の畑地に落ちて凄じく破裂する。いや、其一發は糧秣を載せた貨車に當つて、其瞬時は、汽車が丁度何か大きな物體に觸れでも爲たかのやうに、横に傾く。もう、誰も彼も恐怖の念に驅られて口を開くものも無い。機關手は唯一心に、殆ど夢中で、全速力を出して駛る。あゝ其一刹那！　誰でも其時のさまを胸に描いたなら、一種の壯觀を感ぜずには居られまい。

▲兎に角、後方を脅威したのは、今回の戰爭の大成功で、鹵獲品の多いのも蓋しそれが爲めであ

る。私は、南山に、得利寺に大石橋に、敵が汽車を利用して巧に退却するのを常に小面憎く思つて居たので、遼陽の戰に、かの分捕大砲で敵の停車場を打つたのを、實に此上もなく愉快に思つたが、今度は更に其上を行つて、敵の約一箇師團を其の大網の中に入れて了つたのは、愉快の極である。

▲其の大網の目を洩れて、隨分遁げた奴も遁げたが、先づ今回位なら、大獵と言はなければならぬ。第二軍の管理部に付いて居る某將校から言つて寄越したには、『今回の漁獵には、隨分種々なものが取れたが、中に鳥やら魚やら、雌やら雄やら解らぬものがある。此奴等は胸の處に赤十字の徽章を著けて、大きい乳を爲て居るが、自分等は大切にこれを保育して、再び君が戰地に御出の時を待つて御目に懸ける積りである。只、此奴等が著しい麵麭食ひで、僕等管理部の役員は終日麵麭燒に齷齪して居る仕末でめる』と。

▲無論、これは看護婦であるが、成程女氣の無い、號令嚴肅なるわが軍隊には少し不釣合であるかも知れぬ。それにつけても上陸前、鎭南浦の海上で、『旅順が取れたら、僕がうんと好いのを取持つよ』と言つて笑つた某參謀次長の言葉が思ひ出されて、微笑まずには居られぬ。

▲其手紙の中に、また、大越少佐（兼吉）の戰死せしことが記されてある。少佐は自分の從軍中、橘中佐の副官を爲て居つたので、よく世話になつたものだ。橘中佐は嚴肅なる軍人肌でいざと

言ふと、よく小言を言ふのが常であつたが、大越少佐は決して吾々を叱り飛ばしたことなどなく、何かに就けて、よく親切に世話をして呉れた。殊に、少佐は頗る勤勉なる事務家で、何事に就けても何時も綿密なる注意を拂ふのが例であつた。橘部長は海城で野戰隊に屬して首山の役で、壯烈なる戰死を遂げられたが、當時の大越副官がまた今回の役に、それにも劣らぬ戰死を遂げやうとは！　實に思ひ來ると、涙である。

▲少佐は李官堡の村落で敵の大軍の包圍に遭ひ、聯隊長傷き、大隊長中隊長以下枕を並べて戰死するのを見るに忍びず、聯隊長と合議の上、救を旅團に求める爲めに、單身重圍を衝いて出たが、途中、敵の砲彈に重傷を蒙り、全く進退の自由を失ひたるを以て、捕虜のうき目を見んよりはと、自から拳銃を以て潔き最期を遂げられたのである。其の述懷書の一指亂れざる、自分は彷彿として大和魂の身に迫るのを覺ゆるのである。

▲それにしても、橘中佐といひ、大越少佐といひ、私はこのやうな忠烈無双の將校の下に、少くとも半年の月日を過したのは、此上ない私の名譽と言はなければならぬ。あゝ、二君の靈、幸に安かれ。吾祖國は忠勇武烈なる諸氏の功績の下に、絶大なる發展を爲しつゝあるのである。

▲それから、多くの從軍記の中に、確に最右翼軍に跟隨した記者の筆と覺えて居るが、とある山の

上から、眼下に展げられたる滿洲の森林を兵士が見て、あゝ日本が見えた！　と絶叫したことを記したものがあつた。これを讀んだ私の胸は動いた。實際、この言葉は活動して居る。荒涼落寞たる滿洲の地、上陸地點から百幾十里、行つても行つても、赤土と兀山と柳の疎らな林ばかり、夏になれば木蔭は無く、雪が降れば滿目一白、風が吹けば砂塵滿天、佗しいと言つても此位佗しい厭な土地は無いのに、ゆくりなく前に展けられたのは松の森林。其時、故郷が見えたといふやうな氣が爲たのも、理である。いや、私も木蔭の無い、燒けるやうな赤土に苦んで、遙かに滿洲の森林を夢想した一人である。奉天から以北、鐵嶺近くに行くと、段々樹木が多くなつて、哈爾賓附近ことに、吉林に寄つた方には何百年斧斤を入れぬ森林があるといふのを聞いて、熱帶の鳥が北海に憧れるやうに、頻にそれを思つたのである。その森林がもうすぐ先、高い山から指さゝれると聞いては、私は何だか興が湧いて、今一度行つて見たいやうな心が爲る。

▲毎朝見る新聞紙、死傷者の姓名には、私は殊に注意を拂つて見て居た。或日、見て行くと、ふと、負傷の部に横山宗熊君の名が記されてあるのを發見した。横山宗熊君は步兵第十八聯隊、自分の懇意に爲つたのは海城兵站病院の傳染室で、私が流行性腸胃熱で入院すると、君はすぐ私の隣りに赤痢を病んで寢て居つた。もう、十日以上も就褥して居る相で、大分衰弱して居られたが、しかも其の元氣は中々盛で、遼陽の戰に加はることの出來ぬのを慣慨せらるゝばかりか、是非一刻も早く治つて、戰線に加はり度いと口癖のやうに言つて居た。私は、君が隊から携へて來た梅干、それは牛罐の古罐の中に入れられてあるのであるが、それを分配して貰つた恩惠をいまだに忘れぬので、あの時湯粥の旨く吸へたのは、實に、君の賜であると感謝して居る。その人が負傷——自分は心からその傷痍の淺からんことを祈るのである。

▲『私の隣の兵隊さんの鼻は、銃丸がドンと來りや若後家ぢや』これは、兵士の無邪氣の心で、何に氣なく常に唄つて居る唄である。けれど、何うであらう、これが垂死の負傷兵——自から既に精神を失つて居るにも拘らず、平生の口癖で頻りに得々とこれを唄つて居るのを聞いたならば！　實に、戰線に近い患者收容所は悲慘極まるものである。重傷であるから、充分の手當を爲て遣り度いと思つても、患者は續々遣つて來し、砲彈は凄じい音して鳴つて來るので、いかに度胸の据つた軍醫でも、落付いて、これを介抱して遣つて居る暇は無い。まして、黑溝臺の役などでは、この後方が幾度となく敵の騎兵の爲めに襲擊せられて、衞生隊などが全く包圍されて了つたのであるものを。それにしても悲しいのは其俗謠ではないか。私の隣の兵隊さんの鼻と唄ひたるもの、今は既に重傷の床に倒れて、其命旦夕に迫つて居る。しかも其鄕國には、若後家たるべき運命の既に迫りつゝある

のも知らずに、深夜、夢覺めて、夫の遠征を思ふ可憐の妻があるかと思ふと、ぢつとして其唄の悲痛の調を聞いて居るに忍びぬ。あゝ、私は其の俗謠を聞いて幾度耳を塞いだであらう。

▲私の二階の書齋の硝子窓、それから榎町の通の一角が少しばかり見えて、其處を行くのは、學生の帽、小官吏のインバネス、職人の勇肌、時には美しい廂髪や、菫色の袴なども眼に入るが、朝七時頃と夕の六時頃とに、銃を擔ひ背嚢を負つた軍隊がぞろ〳〵と屹度通る。

▲これは、新兵又は後備兵が射撃演習の爲めに戸山の原に通ふのであるが、夕暮近く、豆腐屋の聲もやゝ途絶えた頃、疲勞をやすめ、元氣を恢復する爲めの軍歌が巷の夕暮を搖かして聞えて、銃劍の尖と赤い軍帽とが一列を爲して並んで過ぎて行くのを見ると、一種悲壯な感が烈しく胸に迫つて、讀書して居れば書を伏せ、筆を執つて居れば筆を捨てゝ、少時、種々なる考に耽らずには居られぬ。否、天氣が佗しく曇つて、打渡す目白の森の彼方、灰色の雲の暮が絶望したかのやうに垂れ下つてゞも居ると、それとはなしに、涙をさへ催すのだ。

▲すぐ思ひ出されるのは、滿洲軍の有樣。今頃は何うして居るであらう、野營を張つて、各自に燃料を集めて。例の飯盒で夕飯を炊いて居ることであらう。戰地に行くと、飯を食ふことゝ、寢ることと、死ぬことゝより他は何物をも考へぬので、誰れもれ彼も皆無邪氣に、太古の昔にでも歸つたやうになつて、豚の股の肉の一片を得たと言つては喜び、醬油エキスの一罐を得たと言つては喜び、丸で小兒にでも爲つたかのやう。

▲夕暮近く、とある村落に近づいたと思つて御覽なさい。滿洲の荒涼たる平原、洪積層の赤味がかつた土は灰色に暮れて、淺緑の楊柳の影も黑く、五六軒散在する土民の家屋、壁の白いのが際立つて眼につく、いや、それよりも先に其楊柳の陰、または丘の背後などに、白い、薄汚れた小さいものが墓のやうに幾箇となく並んで居るのを認めるであらう。これは、卽ち露營のテントで、其附近に無數の兵士、或は銃劍を磨き、或は豚を追ひ廻し、或は飯盒で飯を炊く等、實に混雜を極めて居る。ことに、飯を炊く火がところ〴〵に赤く燃えて居て、其の烟の薄く靡いて暮れて行くさまは、まさに一幅の畫圖である。

▲それに、其頃は屹度鵲の聲が騷がしく森に聞えて居る。この鵲の鳴く聲、これがまた頗る趣味あるもので、內地の烏などゝは丸で御話にならぬ。譬へて言はうなら、丁度古鈴でも振つたやうで、何となく身に沁み渡る。ある兵士の曰く『厭に、悲しい鳴聲だナア、今度の戰爭には惡くすると死ぬぜ』

▲その露營の附近を通り越して、家屋近くに行くと、路の角に、哨兵が立つて居て誰何する。家屋

の重なるものは大抵聯隊本部、大隊本部、中隊本部になつて居て、聯隊長も大隊長も中隊長も、さして甲乙の無い例の土民の汚い房の中に燻つて居る。此房がまた烏渡趣味がある。四面全く荒壁、其の外部に面した處に、四角な小さな窓があつて、其處から何うやら彼うやら日光を納れて居るのであるが、それが不充分なので、甚しく暗い。荒壁には、拙い支那劇の畫が大きく張つてあつて、其の周圍の扉やら戸やら一面に、赤い紙も目眩しい位。そしてそれには擡頭見喜とか、福壽平安とか、種々ら慾張つた句がだらしなく書かれてある。私と同行した青年畫家は、曾て、其宿舍の荒壁に、何處から探したか、芍藥の美しいのを水筒に挿して懸けて居たことがあつたが、其の花の色といひ、荒壁の鼠色した具合といひ、水筒に挿した樣子といひ、それが既に立派な畫で、充分今回の戰役の趣味を顯すことが出來るなどゝ語つたことである。

▲此房の廣さは大抵六疊から八疊、根太は土製の炕になつて居て、高粱殼で編んだアンペラを一枚敷いたのみであるから、其の居心が非常に惡い。毛布を二枚に折つて其上に寢ても、肩が痛くて爲方が無い。それにこの房には南京蟲が非常に居るんで、私等は後には、其處に寢ることをやめて、扉を外して、地に敷いて、其上に寢た。

▲軍隊が入ると、土民は孰れの家でも悉く婦人を隱くして了つて、ことに、妙齡の處女などは見

ることが稀である。そして、大抵の家は其家の主人でなければ、其家の子息が、絶えず其の附近を彷徨して見張つて居る。もしや、道具や何かを盜まれはせぬかと心配になるものと見える。

▲村によつては、――軍隊が不意に入り込んで、婦人を隱す隙が無かつたりすると、何處か村の中で一軒、懸隔れた家屋をその隱蔽所にして、そこに村中の若い女を押籠めて置く。あれは、何處であつたか、村の奴等の女を隱して居る家屋が解つたから、行つて見やう……と注進した好奇者があつたので、散歩旁々出懸けて行つたことがあつた。村の西の盡頭、壁などの破れた汚い家屋、それが卽ちさうとかで、自分等はこつそり其後へと廻つた。これは、もし見付からうものなら、到底十分なる觀察をすることが出來んと思つたからで。で、出來る丈、こつそり、樹やら垣やらに隱れて、其傍に近寄つた。幸ひ、其處に石垣の潰れた跡があつて、其處に柳の樹が低く靡いて居るので、それをたよりに、こつそり覗くと、何うです、何んなさまが私の眼に映つたと思ふ？若い十八九の處女が十人ばかり一かたまりになつて、身動も出來ぬやうに、押籠められて、互に何事をか低く語り合つて居る樣子。

▲此方に向いた丸顏、烏渡綺麗だ……と思つたより早く、私等の覗いて居るのが解つたと見えて、あッ言ふ聲がして、いきなり其入口の扉が開められて了つた。

▲『君はいかんよ、折角見えたのに見付けられて了つた……』『駄目だナア、本當に……』『僕はまだ一眼も見やせんのに……』など、、頻りに滴して居ると、其處を通り懸つたのは、若い二十七八歳の支那青年。

▲自分等を見ると、『不足本、不足本』と早口に叫んで、早く彼方に行け、そんなものを見てはいかんと言ふ手眞似をする。自分等は笑つて、これに應ぜずに居ると、渠は、いきなり私等の立つて居る處に來て、袂を引張つて伴れて行かうとする。それでも默つて居ると、恐しい權幕をして、日本大人に訴へるから左樣思へと言ふ。

▲成程彼奴の戀人も其中にあるかも知れぬのだと思ふと、可哀相にもなり、可笑しくもあつて、私等は其儘其處を立去つたのであるが、實際、支那人は婦人を可愛がることはそれは非常で、日本人の眼から見ては、殆ど不可思議としか思へぬのである。

▲支那は隨分淫風の盛な國で、卑猥な書籍なども甚だ多いが、しかも渠等は婦人のことを語るのが此上なく嫌ひで、女のことを言ふと、すぐ眉を蹙めて、不足本を絶叫するのが常である。とある宿舍で、ある將校の退屈凌ぎに、其家の十四位になる娘を指して、己は今に妻が無いが、何うだあれを呉れぬかと主人に戯れた。すると、主人は非常に厭な顔をして、――日本なら旨く洒落れる處だが――あれはまだ、年が弱くつて駄目だから……と拜むやうにして斷つた。また、憲兵部などにも、何うも自分の家に宿して居る大人が女を呉れろ〳〵と……言つて、仕方が無いからと言つて、訴へて來るものがあるやうに聞いたが、これなども戯談を本氣にして、眞面目に遣つて來るのであらう。支那人は婦人に懸けては實に餘裕が無い人種だと私は思つた。

▲それから、新聞などでは、支那人は無神經で、無意味で、自分さへ利益を得れば、國などは何うなつても好いとのみ思つて居るやうによく書いてあるが、皆な左樣と言ふ譯でも無い。中には、剛骨な、負け嫌ひな、自分の國をかう暴されるのを非常に殘念に思つて居る奴も少しはある。海城の箭樓子に宿つた時のことだが、自分は野村曹長からこの話を聞いた。曹長は掌舍係なので、先づ其村に入るといきなり、各民家を巡廻して、各部々々の宿舍を定めやうとしたが、其中の一人、産は中流以上の主人であつたが、これが何うしても宿舍を貸すといふことを承知しない。嫌したり、なだめたり、種々して見たが、何うしても聞かぬ。爲方が無いから、威嚇して無理遣りに言ふことを聞かせやうとすると、渠は終にはおい〳〵と泣き出して、果ては家を飛び出さうとする。餘儀なく、これを捕へて、司令部に連れて行くことに爲た。で、その村の盡頭に小さい池があるが、其傍に來ると、いきなり、捕へられた手を振放して、渠は其池の中に飛び込んだ。大方、死なうと

思つたのであらう。ところが、其池が淺くつて沈むことが出來ぬので、又おい〳〵泣出した相だ。自分は此話を聞いて、一種無限の感に撲れ、轉た支那政府の無能の爲めに、無辜の人民の苦められるのを此上なく可哀想に思つた。そしてもしすぐれた筆があるならば、これに由つて、立派な一篇の小說が構へられるであらうと思つた。

▲否、其後、軍醫部（丁度其家が軍醫部に宛てられたのである）に行つて、私は其の男を見た。二十九か三十位で、丈の高い、顏の四角な、いかにも苦々しさうな樣子を爲て、何かと言つては、よく從卒などと喧嘩をする相であつた。其顏は未だに私の記憶に刻まれてある。

▲支那苦力は錢が欲しいので、隨分戰線まで出て行くことを恐れぬが、それでも、彈丸の中までは流石に行くを敢てせぬ。ところが、私等はよく第一線までも出ることがあるので、苦力に就いては隨分苦勞を爲た。大石橋の時など、終日頭上に、砲彈の御見舞を受けたので、苦力先生一日ですつかり閉口して了ひ、何うか許して歸して呉れと拜むやうにして賴むのである。けれど、私達の方でも、今、この戰爭中で苦力に離れられては、何うすることも出來ぬ。是非とも明日まで引留めて使はなければならぬ。で、無理に抑へて置いたが、先生、ともすると、賃錢も何も棒に振つて、隙を見て逃げて行かうとするので、私等は其夜一夜更る更る起きて、その番を爲て居たことがあつた。

▲それにしても、もう滿洲もそろ〳〵暖くなる頃であらう。昨年の今頃は、鎭南浦から鹽大澳に來て、始めてかの遼東半島の赤い土を見た頃であるが、最初の宿營地勇家屯ではもう楊柳の芽が青く、家の周圍には、桃の花が紅に咲き亂れて居た。支那土民は長い冬の籠居から目覺めて、漸く畠を耕して、高粱を播き始めるといふ好時節で、天地には實に限りなき希望が滿ち渡つて居た。あゝ、わが軍の神速なる、今日にして、これほどの成績があらうとは、其當時は實に夢にも思はなかつたので、軍司令官なども、寧ろ意外の感があるかも知れぬ。

▲かう思ふと、其時の航海のさまが眼につく。一夜走つた二十何隻の運送船、黃海の波は黃ろく光つて、打渡す渺茫幾百里、誰とて孤懸の軍の上を心細く感じなかつたものはあるまい。朝起きて見ると、臺山の上の國旗、これを見て先づ萬歲を三唱したので、其聲は今猶滿洲の野を席捲しつゝあるのである。實に喜ばしい限りである。

▲これから五月一杯は烈風砂塵、六月は比較的好い月で、雨もなく風も絕え、炎暑も左程烈しくは無い、蒼蠅い蠅の出るのは七月の初め頃、これが出ると、滿洲の生活は實に堪へ難いものになるので、そろ〳〵咽喉が乾くので、水を食む。滿洲の水は質の好いものが無いでは無いが、井など何年となく替へたことが無いので、バチルスなどが多く、從つて赤痢や腸窒扶斯が流行する。八月に至

ると大暑、日中は到底内地では想像されぬほどの暑さである。遠征の將士の苦を思はずには居られぬ。

歸航記

一

備後丸の二等室、空氣窓から吹入る風は夏を忘るゝばかり、碧なる水の堆積には、日影遠く照り輝きて、處々にそゞろ立つ白き波の幾畝々、そを打見やりながら、此身は終日長く絶えず祖國の美しき青螺にと憧がれ渡つた。

海上にてのゆくりなき奇禍、支那車に引かれたる脚の傷は猶ほ痛みて、石炭酸のわる臭き濕布繃帶も佗しく、甲板の上に出たならば嘸ぞな面白き、珍しき、すぐれたる興もあらんとは知りながらも、杖に凭らねばならぬ不自由と、狹く細き階梯を登らねばならぬ危險さに氣怯れがして多くは室内の藁蒲團の上の横臥。をり〳〵馳する空想には、半年が間苦み惱みたる行軍、宿營、戰場の光景、砲の音、砲の烟、突貫の聲は惡魔の叫喚かとばかり、地には血汐に塗れたる繃帶、汗紗、手巾、ことに、かの堡壘の上に重り合ひて斃れたる死屍。ふと、思ひ出したのは、昨日辛うじて甲板に昇つた時のこと。ラープや、機械や、帆檣や、鐵欄干や、綱索などの雜然と亂れ合つた處々には、二三の榻が置かれてあつて、其處に腰を掛けて居るのは多くは赤十字の白い汚れた衣服を著けた傷病兵、或は右の腕を胸の邊に繃帶で吊して居るのもあれば、杖に凭つて辛うじて歩いて居るのもある。脚氣患者らしい腫氣を帶びた蒼い顏、其隣には元氣よく饒舌る軍曹の服を著けた二十八九歳の男があつて、これは公用を帶びて一寸廣島まで歸つて來るとの話。此船は青泥窪の埠頭から出帆したので、旅順方面の戰士が多く、絶えず語らるゝのは第三軍の悲壯なる戰爭談。某師團の殆ど全滅の厄難に逢つたさまなども詳しく明かに其話頭に上るので、自分は涼しい風に吹かれながら、榻に腰を息めて、じつと此物語に聞惚れた。

『何うも兵士には豪いのがあるよ。銃丸などは屁とも思はず、先へ先へと進んで行くが、何處か撃れたと見えて、ふつと倒れて、そしてまた起上る。繃帶か何か探して、そして少時もぢもぢして居ると思ふと、また、痛手にも弱らず進んで行く。實に、銃丸が霰のやうに來るのだ！』

『實に、あの時は面白いも面白いが、凄じいも凄じい』

『貴樣は、何うだッた、初めて戰場に出た時は、恐しかッたらう』

『恐ろしい！　實際、恐ろしい。始めて銃丸がヒユー〳〵と遣つて來る時には、何うもいくら押へ

ても押へても胴震ひが爲て、こんな事では爲方が無いと思つても、何うすることも出來ん』

『本當に、恐ろしい者だ』

『けど、それも少しの間だ、二十分も經つと、もうすつかり度胸が据つて了つて、只、進まう、擊たうと言ふより外に考が無くなつて了ふ。彈丸をかう腰の箱から探つて、それを籠めて打放す時は、愉快だナ』

『それが、――味方が優勢になつた時は、猶ほ愉快だ』

『あの味は遣つた者でなけりや、解らん』

『けれど、自分の隣の奴が倒れると、厭な者だ』

當時の光景が思ひ出されるのであらう、渠等ば猶ほさま〴〵のことを語合ふのであつた。自分は來る時の船の上と、今とを比較べて、實に面白い反映を感せずには居られぬ。來る時は誰も彼も皆な意氣天を衝くといふ有樣で、戰場、戰死などは更に眼中に置かぬのであるのに……。

船員に聞くと、傷病兵は、脚氣患者が多い相で　此船にも、少くとも三分の二は夫であるとのこと。ことに、前航海の際、少し重い患者をも乘せて來たが、これが多く故郷近くで死んで了ふので、今度は成べく輕いのでなければ乘せぬやうに爲て來たと話した。そして語を續いで言ふのには、『九州の山が見える　やれ〳〵もう此處まで來たから、大丈夫だ……と氣が緩めると見えて、重くない奴もすぐ衝心して了ふですが、あれは、實に氣の毒です』

故郷の山、故郷の海、――半歲、荒涼たる茶褐色にのみ見飽きた眼には、それが何んな　美しく、何んなに嬉しく見えるであらう。食と言つては、軍用釜の拙い半熟飯、惡臭い牛罐、福神漬罐、砲聲、砲烟、死の影の恐ろしく迫る一方には、飢餓も亦烈しく押寄せ來て、人間として最も悲慘な境遇に陷るのが常であつたのに、兎に角、今はそれをも離れて、平和なる故郷の山、故郷の水、健かなる身でさへ、嬉しさに涙組まるゝであらうものを、それが爲めに却つて激せられて、餓かに病に斃るゝとは！

戰死よりも一層の悲慘。

自分は仰向けに倒れながら、深く其悲哀に思ひ入つた。

美しき日影、碧なる海、――船は唯行く。

二

午後五時。

先づ見えたる祖國の青螺。

見よ、わが船の右舷に當りて、次第に近寄つゝあつた山影は、漸く其脈、其形、其姿を明かにしたので、午後の日影の、海は愈々深碧に、山は濃き鼠色を帶びて、其低い脈の上に一片の白雲。それが丁度吹流しの旗のやうで、見て居ると、段々細く、小く三十分程も經つ中には、いつか煙のやうになつて消えて了ふ。聞くと、此山は肥前の西端に當つて居て、あの脈の低い處から少し屈曲した邊が、佐世保軍港であるといふ。自分は脚の痛いのにも拘らず、餘程甲板に出て見やうと思つたが、何うも一通の盡力では行けさうにもないので、斷念して、其儘、小さい空氣窓に凭るやうにして、其のなつかしい青螺に見入つた。ふと、窓の前に横つたのは、島、風情ある島、潮風に吹曝された松の低く這つて居る上には、一ところ赤く兀げた痕があつて、何といふ鳥か知らぬが、白い腹をした、羽の黑い、鷗位大きい鳥が幾羽となく群を爲して、其中の五六は低い蒼波の上に舞つて居るのが認められる。西より來て、先づ、第一の島。これが何んなに自分の胸を動かしたであらうか、わが祖國の西の絶端　小さい島であるので、無論、人間も住んで居らんし、船のかゝるやうな處も無し、從つて望樓、燈臺なども認められぬ。恐らく、此島は太古から、曾て一度も人の足跡を印せぬのであらう。此時不圖、北の絶海の畔の望樓のことが胸に上つて來た。自分は曾て聞いたことがある。千島擇捉の附近、乃至は宗谷海峽に至る間のところ〳〵、其處には幾箇ともなき望樓が設けられてあつて、それが皆な村落を距ること、十里十五里。否その村と言つても、思ひ切つた僻地の、アイヌなどの同住せる、十五六軒の人家があるばかりで、何の淋しさを慰めることも出來ぬ。唯、其望樓には、電信だけは通じて居るので、もし、其前を敵艦とか怪しい外國船とかゞ通れば、其れを本國に通知して、或は追躡し、捕獲することが出來るやうになつて居る。そして其望樓には望樓手が三四名、一月とか二月とかの食糧を携へて、冬籠か何ぞのやうに淋しい生活を送つて居る。內地からは、その淋しい生活が氣の毒だと言ふので、時々、電信で、無事で居るかとか何とか言つて聞いて遣る。新聞も無論行かぬので、丸連城大捷とか、南山陷落とか喜ばしいことがあると、知らせて遣る。すると、非常に喜んでこれを唯一の樂みにして居る相だ。何たる詩趣ある話であらう、普通の人の世に居ては、到底想像も何も出來ぬと自分は一方ならず興がつたことが、今この太古其儘らしい島影を見て、ゆくりなく此を思ひ出したのであつた。

わが船は其島との距離大凡二百メイトル位の處を殆ど掠めるやうにして過き去つたが、その後は、三千米ばかりの處に、面白い形の小島を認めたばかり、肥前の山影も次第に西に盡きて、同じく碧なる海、白き波。

夕日は次第に西に傾いた。

夕餐は午後六時半、食堂の一角の鐘が鳴ると、二等室の乗客は皆な其一室へと集るのであるが、自分もこの食事の時だけは、不自由ながらも、杖をつきながら、其食堂へと出懸けて行く。食堂に集るのは纔かに七八名、肥つた特務曹長と、丈の高い軍醫と莞爾〳〵と常に愉快さうな軍曹と、其他はわが寫眞班の諸君であるが、この食堂の旨い飯は何んなに我々をして喝采の聲を擧げしめたであらうか。兵站司令部の宛がひ扶持、菜はいつも福神漬の臭い罐、梅干を一粒食ひ度いにも容易にも得られぬ境遇から、兎に角に、茶椀に飯を盛つて食ふことが出來るばかりか、魚類も何かしら一皿はあつて、漬物は澤庵、味噌漬の旨いもの、實際始めてこれに向つた時は、『あゝこれでもう本國に歸つたも同じだ』と叫ばしめたので、自分等は實に蘇生したやうな氣が爲たのであつた。

其卓の上での話。

『また、本國が見えたので、一人衝心した相ですな』

軍醫はこれに答へて、

『え、軍曹が一人逝きました。まだ、二人ほど重いのがありますがね、……何うも、ほッと安心すると見えて、氣の毒ですよ』

『何うも此處まで來て、死んでは可哀想ですナ』

『實に、氣の毒ですよ』

『せめてね、宇品までゞも行つて、日本の陸地を一歩でも好いから踏んでなら、またあきらめも付きますが、此處で死んでは實に殘念だ。とても浮ばれんですナ』

『本當に』

『それにしても、死骸は何うします』

『陸地が遠ければ、例の水葬を遣るのだ相ですけれど、もう、明日は宇品へ入るですから、上陸してから處分するのでせう』と軍醫は言つたが、更に言葉を續いで、『此前、來た時などはそれは酷かつたです。勿論、何うかと思ふやうな奴も載せて來たですが、此近所から門司近くに行くと、どしどし斃れて了つて、實に氣味が惡いやうでした』

我は深く其事を思つた。

話頭は一轉した。

『露艦は大丈夫でせうナ』

『大丈夫と分明言ふことは出來ん相ですけれど、航路を陸地近く、近くと取つて居るですから、い

ざと言へば、すぐ陸に乗上げるさうです』

『壹岐水道を廻るのでせう？』

『え、さうでせう、今夜の十時頃、壹岐の南に出て十二時には六連島に着く相ですが、夜はあの狹い海峽を入ることが出來ませんから、朝まで其處に假泊するといふことです。お互に、明日はもう宇品、――何んなことでも出來ますぜ！』

と特務曹長は笑つた。

『上陸して第一に先づ何を食ひます』

かう訊ねたのは、軍曹。

或は鮪の刺身で一杯遣り度しと言ひ、或は鰻を食ひたしと言ひ、或は鮨、或は天麩羅、或は汁粉、我々の無邪氣さ加減は、後で考へると、微笑まずには居られぬのであつた。夜になると、滿船皆な燈火を禁じ、空氣窓も閉ぢて了ふので、其の蒸暑さは實に言ふばかりでない。けれど、これを高粱の上の一夜に比べたなら、贅澤も贅澤、そんなことを言へたものではない。

三

朝、眼覺ると、果して船が停つて居る。

六連島から門司の海口に來たに相違ないと思ふと、じつとして室内に留つて居られない。で、自分は强ひて室を出て、跛足を引きながら、一等室に通じる中甲板を通り抜け、それから上甲板へと懸けられてある階梯を上つてつた。

鐵欄干に凭つて見ると、果して門司の海峽。六連島の青螺はずつと後になつて、前には九州の連れる山、今朝は曇つて、空は灰色の、霧が薄いなりにも茫と棚曳き渡つて居るので、物象が何となく分明とせぬけれど、それでも美しいのはわが祖國の山、色彩の多いのはわが祖國の海。

曾つて聞いて居た、西洋から日本へ入る船客は、長崎或は門司に來て、實にその樹木の多く、色彩の美しく、水蒸氣の深いのに驚いて、これ程好き景色を有てる國がこの極東にあらうとは想像しなかつたと言ふのが常である相である。否、佛の文豪、ピエル・ロチの文にも、英の文豪ルドヤード・キップリングの文にも、其時の感じが如何にも事々しく、記されてあるのを見て、それほどまでにこの日本の風景が好いか知らん……と實は少し首を傾けて居つたのであるが。成程、今にして、新に其感を味うことが出來た。碇を卷いて、船が次第に其の狹い海峽に入つて行くと、兩岸の美しい色彩。美しい海、美しい市街、それが何んなに自分に眼新しい感を與へたであらうか。丘陵に凭つ

た馬關の市街は、白堊翠嵐、唯是れ蜃氣樓であるかのやうで、碧なる海に鷺の舞うたやうな遠い白帆、鼠、灰、茶褐色などの復雜なる影を作つて居る空には眼の覺めるやうな朝日の光が瞬く間光つて、そしてまた夢のやうに消えて了ふ。田、畑、――これがまた言ひ知れぬ感を人に與へるので、その整然たる區劃。その鬱蒼たる五穀、何たる美術國ぞやとの感は直ちに湧くがごとく胸を衝く。

けれどこれも自分が遼東のやうな、色彩に乏しい風景に乏しい、感興に乏しい、砂漠のやうな處から來なかつたなら、左程烈しく眼新しく思はなかつたであらう。それにしても思ひ出さるゝのは、遼東の荒涼、遼東の寂寞、其處には山といふ山、皆な赤兀げの岩石ばかり、日の落ちる時には、空氣と光線の加減によつて、少しは紫がかつた色を著けることがあるが、それと言つてもほんの纔かの間。それに、山の形に變化が無い。日本ならば、或は妙義のやうな奇々怪々、或は富嶽のやうな正々堂々、或は將帥が百萬の兵を率ゆるがごとき群山亂峰の間に聳立する信、甲の山、或は佳人の愁思に耽るがごとき平野の中に特立せる筑波の山、その形の複雜なる、實に形容することが出來ぬ程であるのに、彼の地では、山と言へば、唯突兀たる連峰ばかり、少しも詩人の心を惹くに値ひするものは無い。それに樹木の乏しいこと、楊樹より他には一樹も無いので、從つて、色彩と言つては、赤褐色に綠ばかり。雨も乏しく、水蒸氣も無いので、霧とか靄とか言ふものゝ懸るのも極めて稀である。

たゞ、荒涼。

サハラの砂漠も思ひ遣らるゝのである。

半歲の間、眼に觸れるものと言つては、唯それ。であるから、平生、自然に觸れずに居られぬ此身に取つては、どれ程苦痛であつたか知れぬ。實に、自分ながら詩興も失せ、追懷も亡つたかと思ふ程であつたが今、俄かに、この水蒸氣、この色彩、この美しい海山。

快を叫んだのも無理はあるまい。

船は徐かに、徐かに、さながらこの美しいパノラマの間を心なく早く過ぎて行くに忍びぬと言ふやうに、次第に內海へと進んで行つたが、左には門司の港、要塞の砲臺、望樓から懸けて、林のごとく立てる帆檣、白堊の市街は浮き出るやうに見えて、其彼方には、蜿蜒たる鎭西の山、山脈の半は鼠色の雲が蔽ひ懸つて、何とも言へぬ趣を呈して居る。海には白い帆、鼠色の帆などが幾つとなく前後を往來して、伊軋たる櫓の音が朝の空氣を破つて面白く聞える。否、櫓を操つる船頭がをり〳〵手を留めて烟草を吸つて居るのも認められる。

右岸の馬關の町は次第に盡きて、海は囊のごとく漸く南北に延び、船は普通の速力を出し始め

た。

自分は久しく欄干を離れなかつた。

四

追想すると、實に夢のやうである。自分等が乘つて居た第二軍の船舶、それが何處に行くか、何處に上陸するか、そんなことは何も知らず、只、戰爭に臨まれるのが此上もなく嬉しく、宇品から此處に來た時には、實に何とも言ひやうの無い胸の皷動を覺えたのである。海峽を出づれば、玄海灘、怒濤の掀翻する間に勇しく進んだ時の將士の心、その胸には何のやうな感慨が湧いたであらうか。勇しい、悲しい、しかも世をかけ離れたやうな氣が篤て、殆ど感慨に堪なかつたであらうが、今は其將士の戰死するもの相踵ぎ、自分の識つて居る人でも、双の指を折る程の數である。

否、自分もかうして、不慮の禍を蒙つて傷病兵の群と一緒に、この海峽を過ぎやうとは、更に夢にも思はなかつた。あゝ、人の生の解すべからざる、自分は悵然たらざるを得ぬのである。

『おい、君、何うした！』

と後から肩を叩いた者がある。

驚いて顧ると、遼陽から同行して來た從軍記者の一人で、此人は中々同情に富んだ面白い性質だ。

『もう、好いかい』

『うむ、大分好い』

『こんなにして歩いて來て好いのか』

『まだ、少し痛むけれど、門司を室の中に籠つても通れないから出て來たところサ。實に好いね』

『本當だ、中國不足本、日本好々的』

と、うろ覺えの清語を遣ふ。

『それにしても』と少時してから、渠は言葉を續いで、『海城で、あの君が車から落ちて轢かれた時には、僕は冷りとしたぜ。僕等の車は君のすぐ後だッたから、よく見えてたが、そら落ちたと思ふと、確かに左の足の尖の處を車の輪がぐるりと轢いたから、はッと思つて、もう、君はあの儘立てまいと思つた。ところが君はすぐ立上つて、轢かれた、轢かれた、轢かれた！足を轢かれた！と絶叫して、そして二三歩跛足を曳きながら歩くから、それで、餘程安心したね……大丈夫だらう、時が經てば治るだらう』

『それァ、治る』

『それにしても、君は何うする、途中で何處かに寄るか』

『イヤ、まだ定めんけれど、廣島では是非一夜宿つて行く心算だ』

『僕は大阪に寄つて行かうと思ふ。それから、京都にも一寸』

『到る處好記念が有るんだらう』

『イヤ、左樣言ふ譯ぢやないけれど……』

と言つて笑つた。

一等室から續々と集つて來た從軍記者の一群、此人達は遼陽の戰記を一刻も早く社に送り度いと、只それにのみ熱中して居るので、青泥窪からこの船に乘船して以來、皆其室々に閉籠つて、片時も筆を離さぬのであつた。けれど今は漸く書き終つて、其の手敏い一人二人は船員から人に托して、門司で、電報を打つたり、郵便を出したりして貰つたのさへもある。兎も角、誰も彼も皆な其業を終つて了つたので、これからは樂しいわが祖國。何のやうな面白いことも何のやうな樂しい眞似も出來ると思ふと、實に愉快で、愉快で堪らぬのであつた。見よ、人々の顏！　誰も皆な恙なき歸國を喜ばぬものはないのである。

船は次第に東へ東へと駛つて、周防灘に來ると、もう正午近い。なつかしい鎭西の山を漸く微かに、左には德山の市街が指點せらるゝなどゝ人々語り合ふ。見ると、此時空は益々曇つて、絲のやうな雨が斜めに甲板に吹込んで來る。

宇品はもう半日程。

嚴島の山を右に見て、刻一刻毎に、向宇品の山に近寄りつゝあつたのは、其日の午後七時十分。雨は次第に大降りなつて、午後二時頃からは、深い霧の爲めに、十間前も分明と見えぬ位であつたが、其頃には、稍それが晴れ模樣になつて、西を見ると、夕陽の山際は少し明かに、雲が稍透いて見えて居る。宇品の向山、其山を廻りさへすれば、其港の全景が見えるといふ處へ來て、船は俄かに進行を留めたが、此時、我々の心を痛めたのは、今夜一夜此船に置かれはせぬかとの憂である。もう宇品まで來たのであるから、今日上陸が叶はぬまでも、明日は嫌應なしに上げて呉れるに限つて居る。船の中の一夜位、別に苦にする程のことでも無いが、それでも可笑いのは人情である。宇品、廣島を前に控へて、そして上陸することの出來ぬとなると、却つて一刻も早く上陸が爲たくなつて、終には居ても立つても居られぬやうな氣がする。船員は君達丈でも成たけ上陸させて上げると色々骨を折つて呉れたが、檢疫やら何やら、ごたゝして容易に要領を得ぬ。で、自分等は荷物

を出したり、藏つたりして、まご〳〵して居たが、もう日が暮れやうとする頃、船員が來て、それでは檢疫を濟まして上陸させて上げるとのこと。

檢疫所は一等室の上甲板、其上にずらりと並んだのは、將校五六名、從軍記者十餘名、其他軍曹、酒保などであるが、誰の顏にも喜ばしさうな、嬉しさうな色が漲り渡つて、面白い洒落などが口を衝いて出る。雨はまた大降りになり出したが、待つても待つても、檢疫官は容易に遣つて來ない。何うしたんだ！　この雨で來られんのかナなど、苦情を出して居たが、漸く遣つて來たのは海軍の軍醫、一々脈を檢し、顏を見て、それでずつと行き過ぎて了ふのであつた。

船はこれが濟むと徐かに進行を始めて、向宇品の山をぐるりと一廻、出征の時萬歲を唱へた邊まで來ると、宇品の町には、燦爛たる燈火、かゝれる船からも燈火が洩れて、瀧縞のやうに降頻る雨が、をり〳〵それに反映して美しく光る。一時間程して、やがて小蒸氣が碇を下した船の右舷にと遣つて來たが、自分はこれに乘移るのに、實に一方ならぬ困難を覺えた。わが寫眞班の一行、種板やら、寫眞機械やら、荷物が多いので、さらぬだに手が足りぬのに、荷物を手傳つて運ぶべき此身が却つて荷物として運ばれなければならぬので、一行は到る處で、一方ならざる苦辛を嘗め、ことに、金州大房身の停車場では既のこと汽車に置去にせらるゝ處であつた。けれど、荷物の苦勞もも

うこれ切り、埠頭に上陸しさへすれば、俥もあれば人足もある。今一奮發と諸君は骨を折つて運んで呉れるし、自分も何うやら斯うやら、人の肩をも借りずに、其の小蒸汽に來り移ることが出來た。

五分の後、小蒸汽は本船を離れて、埠頭へと向つた。あゝ其の水を截る音の勇ましさ！　自分は今迄これ程愉快なことはなかつた。

埠頭には硝子燈の光雨に濕れて、長い石の棧橋には寂として人の影も無い。けれど、上陸！　上陸！

一行は思はず萬歲を三唱した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

東上の汽車、二等室の中央、旅客は汗と泥とに塗みれたるカーキー色の夏服を着、顏の色は印度の土人かとばかり日に燒けて、生えたる髭の深く黑き五六名の男の頻りに淸語交りの片語を饒舌りつゝあるのに驚いたであらう。これは卽ち自分等一行。

淀川づたひ

▲冬、京都に遊んだのは今回が初めてゞ、常に榮ゆる春の驕、色づく秋に夕照をのみ見た身には、實に譬へやうも無い寂しさと寒さと哀れさとを感じた。『京は春のことでおます』と比叡おろしに戰慄しながら、寒さうに呟いた車夫の言葉も、それとなく身に沁み渡るので。

▲實際、京は春のことである。春ならば、打向う愛宕、斜に比叡、大山小山の上には薄い被衣を著た樣に霞がたなびき渡つて、峯から尾へと白い一半は雲、一半は花、そゞろに氣が浮き立つであらうものを。祇園八坂のにぎはひ、夜櫻の艶白う、ちやら〳〵と鳴る雪駄の音にもこの都のあでなる昔の偲ばるゝものを、比叡山には雪白く、北山おろし巷に荒みて、智恩院の鐘、徒らに鴨川の水に落つるその淋しさ。

▲四面皆山、昔は琵琶湖の水この低き一帶の地に及びたらんとは學者の說、そは幾百萬の年月を閱したるかは知らぬが、多い長い歷史を有てるこの舊い都に來て、更にその以前の地形を考へるのも興の多いことである。上古は琵琶の水、瀨多に落ちず、宇治に流れずして、京都一面の低い地を浸し、伏見以南の亘掠地附近よりずつと木津附近に及んで居つたとのこと。

▲京都の歷史と言へば隨分舊い。豐臣、織田、足利、南北朝、鎌倉、保元、平治と段々たどつて行つても飽々するほど長い。そしてその歷史の遺蹟は今の洛中洛外に夥しくその面影を殘して居る。けれどこの長い舊い歷史、これも地形の上から考へると唯々瞬間、――ほんの瞬きする程にも無いのである。儚ないのは人の世、人の身、人の事業。

▲けれど不朽不變と思つた地形すら夥しく變つて了ふのであるから爲方が無い。歷史以降は成程琵琶湖は今の儘であつた。二千年來はあまり大した變化をば來して居らなかつた。けれど地理的變化から考へて見ると、今の淀川の水源地なる瀨多南鄕附近の地質が崩れずに屹として聳えて居つた頃には、無論京都は琵琶湖の一部になつてたので、其末流は奈良の方へと向つて流れて居たと思はれる。そして今日の琵琶湖が段々埋まつて、第二の京都のやうな盆地を作り出さうとして居るのは爭はれぬ事實。

▲が、京都見物にこんな事を深く考へるには當らぬかも知れぬ。人間は人間相應に短い一生のことに齷齪して、音なく香なく死んで了ふ方が好いのか知れぬ。生中、いろ〳〵な空想を馳せると、默に鐘の音を聞いて無常を感じたり何かしていかぬ。いつそこんな考は止めて了はうか。

▲かう考へて自分は淸水の舞臺の上から、ぢつと眼下に展げられた瓦甍十萬家に視入つたのであ

る。寒い、寒い日で、日は照つて居りながら、我から胴震を禁ずることが出來なかつた。日を帶びて居るのは兩本願寺の瓦甍、それから少し左に離れて、屹として聳えて居る東寺の塔。それから西南に開けた盆地、其間に線香ほどの煙を立てゝ走つて行く汽車の行方を、見送つて居たが、ふと眼に附いたのは、其盆地の中央に城壁の形を爲した一帶の丘陵。

▲聞くと、それは男山八幡宮である相な。男山八幡、それでは淀川は丁度その間を横流して、南から來る木津川を併せ、遠く枚方町の方へ流れて行くのであらうと想像すると、豫て其附近に憧れて居た身の、直にでも行つて見度いやうな心地が爲た。

▲この淀川沿岸、趣味深いのは實にこの川添一帶の地である。伏見から、淀、この川筋をかの昔の三十石の船が通つたと想像して御覽なさい。只それ丈けでも、行つて見たいとは誰でも思ふ。まして其沿岸には何なに種々の古蹟が殘されてあるであらうか。

▲此附近の村落に、白壁の土藏の多いことは誰でも知つて居やう。京都から大阪、其間を汽車で通つた人は、向日町、山崎、高槻などの停車場に連續して、面白い風情ある田舍の小都邑のあるのを見落すことは無からう。夕日の沈まうとする頃、または朝日の美しく輝き渡つた頃、窓から見ると、美しい蝙蝠傘を翳した少女の一人二人、畑には畑打つ老爺の姿も見えて、向うに連る河内の翠

微、其麓が歴代の歌集によく出る交野であるのを知つたならば、詩人でなくとも心を動かさずには居られまい。で、いろ〳〵空想に耽つて居ると、忽ち車窓を掠めて行く竹藪の幾層々々。秋である と、汽車の停つた前に、丁度烏瓜の赤く晩秋に色づいたのが見えて、竹藪の陰の農家には、煙が細く美しく靡き渡つて、赤兒の啼聲が高く聞える。

▲自分は汽車で此間を通る度に、よくさま〴〵のことを考へたものだ。此處等で汽車を下りて、風情あるこの田舍町の一つに一夜を過して見たいと、何時も胸に描く希望で、もし此附近に親しい友人でも居て、秋の晴れた日に五六日滯在し得たならば、それこそ何んなに面白からうとはよく思つた。其時は自分は丘から丘、峰から峰へと夕日を帶びながら逍遙ひ歩いて何んなにさま〴〵の事を考へるであらう。傍に、友があつたならば勿論——否語る人が無くとも、道傍の老爺を捉へて、常に似ぬ饒舌を逞うしたであらう。で、夕日は次第に暮れる、暗い林の路を辿つて、とある丘の一角に出る、下を望むと平和な野、平和な村、平和な夕、平和な人——其一帶の平地には蒼然たる暮色が限なく行渡つて、淀川の流を下る白い帆も、風が無いので、低く〳〵、丸でほかしの中の景色を見るやう、屹度、其時は自分は低い聲で詩を吟ずるに相違ない。そして其詩はどんな詩だと想像する。唐詩、宋詩、イヤそんな者では無い。では、思ひ切つて新しい新體詩！　否、否、萬葉の

古歌が尤も適して居るであらう。

▲もし、自分が好奇に其の田舎町に一夜のやどりを取つたと假定したら何うであらう。京都が近く、もう餘程開けて居るので、旅亭も立派、室も立派、給仕を爲る女もイヤに取濟して、別に面白い趣味も無いかも知れぬ。けれど自分には何うもさうは思へぬ。では、何う……？　例の君の想像で、美しい其家の娘か何かゞ給仕に出て、詩的材料を與へると言ふのかと自分の友人は笑つて冷かすかも知れぬ。けれど自分だとて、まさかに、そんな小說的のことばかり考へては居ぬ。まア僕の想像を言はせて見給へ。まア、夜八時過、汽車を下りて、其町へ入るとする。例の好奇から、停車場前の旅店も面白く無いと言ふので、重い鞄を下げながら、たぢ〳〵と歩いて行く。まだ八時だけれども、田舎の町はもうすつかり戸を閉ぢて、燈火の洩れて居るのは、曉の星かとばかり。あたりがしんとして、靜まり返つて居る。不圖、黑い影が向うから歩いて來るので、立留つて、此町に旅店は無いかと聞く。ある段では無い。すぐ其處が好い旅亭だと敎へて呉れる。何だか其聲がいやに笑つたやうな……と思つたが、頓着せずに、敎へられた家へと入つて行つた。

▲入ると、昔風の旅店。帳場には若い八字髭の主人が坐つて居て、其前の廣い空地には、俵やら叭やら、四斗桶やら菰冠やらが置かれてあつて、上には鮪の半身の削いだのやら、牛肉の股の所やら

が吊されてある。俄かに耳に入つたのは人の醉しれた喧しい聲、續いて拙い三味線の絃が自暴に鳴つて、あやしげな女の騷ぐ聲がけたゝましく聞える。其時、自分はこれは惡い處に泊り合せたものだ。いつそ引返さうかと思ふ。けれどもうかうなつては遲い。旅店の主人の一命令の下に、同じく怪しげな女が出て來て、ひつたくるやうに無理遣りに、自分の鞄を取つて、奥の一室へと通して了ふ。

▲理想と實際との相違、いや、自分があまり空想に耽るからかういふ眼に逢ふので、田舎の古風の旅亭などゝ言ふものは多くはもうかういふ風に爲つて居るのが多い。で、其一夜の事を猶想像して見やうなら、隣の室あたりで、寢ることも出來ぬほど馬鹿騷に騷ぎ散される。そしてもし運が惡いと、恐ろしく若く美しい田舎訛の娘が、白粉をべつたりと附けて、飯の給仕に遣つて來る。

▲京から大阪への汽車では、自分はよくこんな事を空想して通つたが、今回は始めてその淀川の沿岸を俥で走らせて見た。京から伏見までは電車、それから段々淀に向つて進むと、風景が果して好い。淀川が宇治から流れた來て、淀町のすぐ側で、京の加茂川、桂川を合せて、それから眞直に西を指す具合は頗る愉快である。帆が三つ四つ重り合つて、其の向うに淀町の幾白堊、昔の名所圖會の挿畫が思ひ出されずには置かれぬ。

▲男山八幡、これも中々眺望に富んで居る。木津川は丁度其下で淀川に沿うて居るし、八幡の町も一寸富貴さうな小都邑である。で、自分はそれから川を渡つて、山崎に行つて、所謂有名な櫻井驛の古蹟を見た。

▲これは汽車の中からでも見えるので、旅客は山崎驛に着いたら、注意なさい。そしてその長い山崎町の村の盡頭に來た時、その左の方を御覽なさい。山崎街道の傍に、小さい自然石の建石があつて、そこに松の大木の枯れたのが根ばかりになつて殘つて居る。そこが卽ち楠公子別れの場。

▲其處で少時古を追懷して、鵜殿から高槻町の西を過ぎ、大塚の堤防の上に行くと、枚方町の粉壁が川を隔て、明かに指點せられる。都名所圖會を見ると、この川のほとりに一軒二階屋の料理店兼旅店があつて、其二階では旅客が頻りに田舍藝妓を揚げて馬鹿騷ぎを遣つて居る挿畫がある。そして門外には蘆荻、帆檣。ことに面白いのは、其傍に、枚方町には常住の飯盛十五六人ありと小さく記されてあることである。昔は淀の三十石の船着場があるので、それは頗る異彩ある光景を呈したに相違ない。否、この一葉の挿畫が自分にある興味を與へて、この枚方を訪ふの念を起させたのは、確かなる事實である。けれど、今はそんな樣子は少しも無い。川を控へて居るので、多少の風情は無いではないが、左程風景の好い處でも無いのには、絶望した。

▲それから思ふと、好いのは宇治だ。自分が宇治を訪うたのは、もう七八年前で、記憶も大分薄らいでは居るが、それでもまだ忘られぬのはその川、其碧なる流。平等院の庭には櫻の花が繪卷でも見るやうに散つて、千年來の古い建物が意味深く聳えて居るさへあるのに、其間を通り拔けて、堤に上ると、碧なる流は、今、山から世間に出たと言ふかのやうに、美しく凄じく流れて、其色彩の深さと言つたら――まして對岸には黃蘗の寺院が樹間から。

▲餘り突飛であると言ふのを止め給へ。自分は枚方から俥を走らせながら、頻りに淀川の上流を想像したのである。淀の上流――宇治より上流であるのは勿論で、卽ち宇治川と呼ばるゝ流域である。

▲琵琶湖に出て未だ幾許ならず宇治川は忽ち萬山の中に陷つて了ふのである。琵琶湖の水が地質の弱所を破つて海に流れ出る基點、南鄕から宇治まで其間大約五里、これが頗る自分の空想を惹く。京都から山を越ゆれば三四里、それ程深山と言ふのでは無いが、それでも此間は甚しく人寰に遠ざかつて、宇治川の兩岸は山高く絶壁を爲し、容易に人の近づくことが出來ぬやうになつて居るとのことである。例の想像を逞うすると、山から山、そのすぐ下に淸い美しい水が流れて居て、もし巨人の嘯くやうな凄じい瀨鳴りの音が手に取るばかり聞えて居ても、その水の尾の髣髴を認めること

は何うしても出來ぬ。何うかして見やうと思つて、岩に縋り、石に取附き、木の根に帶を結んで、辛うじて底を覗くと、右から左へと曲つた水が奎涌激越して、或は水沫を飛ばし或は急湍をつくりつゝ幾屈曲して流れて行くさまが微かに微かに……。もし此時此の河の瀨に笛の音のやうな玲瓏たる河鹿の聲が聞えたら、何うであらう。山櫻の世の塵知らぬ美しいのが咲いて居つたら、何うであらう。

▲かと思ふと、一ところ絶壁の途絶えたところがあつて、其處には此方の岸から彼方の村に通ずる風情ある舟渡がある。其渡舟を守る老爺は桃源の住民のごとく、附近には桃やら櫻やらの點綴した人家が五六軒――あゝ塵の世に住んで居ては、到底さる光景を想像する暇さへ無いのである。

▲否、わが車はそのやうな夢より甚しい空想を載せながら、一歩は一歩より俗の俗たる大阪の市街に近づきつゝあるではないか。絶えず添へる淀川の水も曾て一度さる美しい山間の地を流れたとは見えぬやうに、濁りつゝ淀みつゝ流れ流れて居るではないか。見よ、彼處には大阪の市街、百萬の人民の波打てる氣吹はどことなく天地に漲り渡りて、煙筒の煤煙は黑く、黑く……。

▲史を繙くと、神武天皇の舟師は先づ津の國の浪速に至り、山城河（淀川）の白肩（枚方）に上陸し給ひしことを記して居る。其頃はこの今の大阪の市街は全く蒼波の中に沒却されてあつて、其の西部の丘陵の上にかの仁德天皇の高津の宮は建てられたといふことである。そして、その海中には島嶼が幾箇となく散在して、却々風情のすぐれた處であつたさうな、否萬葉集などを繙いて見ると、此の灣口の風光明媚であつたことが能く分る。或は「難波潟雄島をかけて」といひ、或は「津の國の美し磯に」と言ひ、歷代の歌人が詠じた國風は、實に數へ切れぬほどある。

▲それが、今は市街、大都會、萬丈の俗塵、百條の煤煙。

旅すがた

若狭道

一

馬場の驛、大津の市街、をりから夕陽は燬くが如き閃耀を湖水に漲らして、比叡連峰の上、焰の餘波とも見ゆる雲、美しくふわ〳〵と靡き渡りぬ。湖の西岸を渡り行く汽船の出帆は午後八時、今津に着するは今宵十二時頃なるべしといふに、舊曆十七日の月の美しさを想像して、漁興湧くが如く、湖に臨める旗亭の一室、名産の鮒のあらひに獨り低誦の酒に醉ひぬ。

蒼然たる暮色、湖の夕陽は消えて、紫なせる山の幾連亙、不圖山際に一點の燈火の見え始めたるに驚きて首を擧れば、水の如く晴れ渡れる暗碧なる空に、星光其處此處と聰しげにかゞやきて、汀に打寄する漣の音の微かなるに、名利の念頓に失せて、轉た物外の境に心を馳する時、ゆくりなく響き渡れるは汽笛の長吼なり。

あたふたと旗亭を出でゝ、埠頭に驅け着ればゝ日は既に全く暮れて、闇に白き湖水の茫々、此方の岸に繫がれたる八十噸ばかりの小蒸汽には、赤、青の洋燈の光處々に明かに、顧れば沿岸の

水多くは家々の燈光を長く落せり。

汽船は少時して出帆しつ。

水を截る音凄じく、大津の市街をもいつか離れて、薄暗き闇の中を次第に西へ西へと進みぬ。われは獨り微醉の顔を水風に吹かせつゝ、狹き甲板の上に立ちて、今、別れし方の燈影、家影を見送りぬ。比叡の最高峰に殘りし夕陽も既に全く消えて痕なく、さびしく靡ける雲の影も微かに、二三日來の暴風雨の後は空は拭ふが如く、めづらしき好晴やと船長も語りぬ。

いかなればこの湖水を西に渡るぞと問ふ勿れ、われはこれより西江州を經て、彼の若狹の海岸に出て、それより越前、加賀、能登へと遊ばんずる身、ことに、若狹はわが久戀の地、其の海岸には美しき小濱の港市、大門小門など、稱する奇勝もありて、容易に人の至らざる絕海の畔、その別天地の風景はいかにわが眼に映ずべきかと思へば、今更に、湧くや、興、波立つや、胸。

遺憾は竹生島、この西琵琶湖の一勝地を徒らに過ぎ去らんとすることなり。今日米原より長濱、其處より和船にてかの島に渡らんとせしものを。今宵十七日の月夜は、其の湖中の一孤島、辨天の古祠の巖上に嘯きて、かの經正が古琵琶の遺音を松聲に聞かんと樂みしものを。暴風雨の名殘は未だ止まず、其顏は水の泡となりしこそ口惜しけれ。

汽船は堅田を過ぎ、和迹を過ぎ、猶西へ西へと航しぬ。われは十七日の月の出を待ち詫びつ、少時室内に下りて、横に倒れしが、終日乘り勞れし汽車の長途の疲勞は直ちに睡を誘ひて、間もなく華胥の國に遊びぬ。かくて一時間をや眠りけむ。ふと眼覺れば、東の空氣窓明かに、微かに射し入るは、まさしく月の光！

急ぎて甲板に上れば、果して月は既に三竿の高きに登り、堅田附近より左右に開けし湖水は渺茫として海の如く、瀲灩たる月光の彼方、鼠色したる山はさながら夢の如く長く靡き渡りぬ。

船長に問へば、そは奥島の長命寺山にして、伊吹山は常に、此あたりに見ゆれど、今宵は少し雲ありて……と、更に其左の方を指し示して語りぬ。

あゝ湖上の月夜、われはこれに對して、いかに胸を躍せしぞや。船は西岸に添ひて走れるを以て、東方は渺茫又渺茫、思ひは遠く千里を馳せて、いかにして湖水とは思はれぬばかりの廣濶。言ふ勿れ、人生苦多しと。この興、この樂。われは甲板の上に踞して、深くあたりの風景に見入りぬ。

大溝の風情ある埠頭に寄りしは、夜の十時過なりけん。汽船は長き埠頭に横付に、埠頭には人の騷ぐ聲、提燈の光、甲板より乘降する客のあわたゞしげなるも面白く、陸にほの見ゆる田舍の町の

燈光もそゞろおのが心を惹きぬ。深けたる夜の湖岸の埠頭、誰か思ひを誘はざるものぞ。

大溝を出でゝ約二三里、不圖、わが前一二里を隔てゝ、彫然たる一島の横はれるを認めぬ。

これぞ、竹生島なる。

貝原益軒、曾てこれを記して、『竹生島は周圍六十町許、山の高さ總て十間ばかり、其高さ何處も均しく高下なし。山上は皆常磐木繁れり。下の山根に大なる岩石繞りつゞき、岸高くして屏風を立てたる如し。東の下神社の下に纔かに狹き入江あり。船の着く所なり。神社佛寺に登る處、只一處あり。其餘は皆石崖のみにて登るべき地なく、又船を停むべき所なし。山上の林木、山下の石壁、其形繪に畫きたるやうに鮮かに麗はし。社も寺も皆高き所にあり。民家は一宇もなし。社前より遠く望めば、湖水渺茫として人寰遠く隔り、境地潔淨にして、人里遠く俗塵を離れ、恰も浮世の外に出たる心地して、仙境に入りたるやうに覺え侍る。まことに世に勝れたる靈地にしてあやしき佳境なり』と言へり。此の靈境、今も猶昔の儘なりと聞くを、其地を一歩だに踏まずして過ぎ行くことの遺憾さよ。

乘客の一人、年五十五六ばかりなる中老漢、同じくわれと甲板にありて、この島影を見つありしが、語りて曰く、『私は大溝の者だが、あの竹生島には、若い時にはよく獵に遊びに行つたもの

だ。今でも銃獵禁制地だから、隨分雁や鴨が居るですが、私等のよく出懸けて行つたのは維新の少し前頃、それは居たにも居たにも、實に取り切れぬ位でした。老人などは神樣の地面だから、罰が當ると言つて、私共を留めたですけれど、私等は若い血氣盛で、そんなことは頓着せずに、よく出懸けて行つたことでした。今では、もうそんな暇もないが、若い時は一番面白いですナ。』

物語より述懷に轉ぜし最後の一語、われはこれを聞きつゝ、愈々なつかしき其黑き島影に見入りぬ。船は漸く近く、約一里弱とも覺しきあたりまで來て、急に、舵を東に轉じぬ。此時ゆくりなく眼に映りし一穗の燈光、彼ぞ辨天祠の常燈明なると聞くに、わが胸は愈々波立ちぬ。

少時して、西岸には、黑き人屋、明かき燈火、汽船の舵器の回轉、續きて、ボウィの聲して、『今津！　今津！　今津上りのお客樣は早く甲板に出て下はれ！』

二

一夜寢し今津の港、夏の夜は早く明けて、顏を洗ひにと、湖畔に出れば、夜來の宿霧は未だ晴れず、茫々たる湖上、竹生島の影は夢の如く、沙汀に打寄する漣の微かなる音、旅亭の娘の赤襷したるが、金盥に湖水の水掬び上げて呉るゝなど、まことに詩中の景、畫裡の趣なりや。

今津は若狭路の要衝、俥を雇ひて此街道を走らするに、其家屋、其市街、他に比して稍整へり。町の中央に、北國街道、若狭街道の分岐點ありて、道傍に、『若狭みち』の石標を立てたり。若狭道、今よりぞわれは其國に、其の別天地に。

稍々登り阪なる路を一里ほど西北に入れば、身は全く萬山の中に陷りて、山はさして高峻ならざれども、迂餘曲折、路に從ひて、溪流の奔湍は顯はれ來りぬ。雨餘の水肥えて、憂々として聲ある竹叢の陰、峽谷は峽谷を生じ、溪流は溪流を產み、或は開けて山野の末を見るべく、或は塞りて路の窮せるを思ふべく、炊烟逶迤たる處、數軒の人家、白雲搖曳たるの邊、歷落たる人語馬聲。

村童の草刈籠を負うて谷へと下り行くを見送れば、村孃のあやしげなる髮結ひて、頻りに田草を耘れる鄙歌の一群。見よ、彼處に一條の瀑布、其處に懸崖の危橋、とある村の茶亭、後は溪流、前には此附近に名高しといふ清水溢れて、美しく浸されたる甜瓜の一兩顆、俥を留めて其處を憩ひ、齒に沁するばかりなる冷き旨き味を占め得たりしことをあはれいつの日にか忘れん。

追分より保阪峠へと懸れるころは、空名殘なく晴れて、車上の日影燬くがごとく、滿山唯是れ蟬時雨、保阪の峠の半途、角に一軒の旅亭ありて、これより岐る、路は朽木谷へと下るなりとぞ。朽木谷は吾迹川の峽谷にして、これより比良山の山陰なる葛川谷に連り、山村の數十五六、朽木監物が祖先の地にして、足利義晴將軍の隱匿せる古蹟なりと聞く。をりから懸れる白雲を仰ぎつゝ、種種なる歷史上の想像に心を馳せ、次第に保阪の嶮峻なる峠へと登りぬ。

峠に至れば、三十三間山の餘脈新に起りて、前に絕大なる谷を開く。其谷の緣の路、これを縫ひて走り下れる俥は早く、溪は溪に從ひて生じ、谷は谷に從ひて開け、危橋を渡ること二三、山村を過ぐること一二、遂に熊川の町に入る。

熊川は山間の一小驛、曲折せる街道を清き小溪の水は流れて、翠嵐の相搖曳せる、日光忽ち曇り渡りぬ。此處にて俥を代ゆ。其立場の旅館、名は忘れたれど、古風なる庭ありて、鄙少女の美しき眉を見き。かくて再び程に上りしが、重山複水、境はこれより次第に開けて見るや、漸くに、田の連亙、稻葉の戰ぎ、養蠶を業とせる農家の軒に、日に曝したる雪白の繭の閃耀。北川の流域は次第に廣く、其兩岸に開けたる沖積層には、雜木林を疎らに點綴したる村の白壁、稻田の間をうねくゝとめぐれる幾條の畷道、街道の傍には、電信柱遠く連りて、日笠村附近に至れば、北川の對岸に、褐色長く通ぜる敦賀街道、其處に見ゆる二三の俥、蝙蝠傘。

車夫、わが爲めに指點して語る。この北川の末流、かの山と山との間に、更に遠き一山影の藍碧の色なして聳ゆるを見るならん。小濱港は其前にありて、海は其山と此方の山との間に橫はれるな

り。而してかの大門小門の勝は、前面なる山脈の海中に突出したるその背後にありと。わが胸はこれを思ひて、興更に昂りぬ。

遠敷村に、若狭姫神社あり。神宮寺村に、若狭彦神社あり。共に國中に於ける古祠として著名なり。人家軒をつらねたる遠敷の古邑を過れば、南川の流南より來りて、其處に一長橋を架せり。かくて此橋を渡れば、一道の街路斜に後瀬山の麓を縫ひて、其盡くる處、小濱港の人屋、前に展けられたる青戸灣の晴色。

海に面せる旅亭を選みて、青濱館といへるに投ず。

三

午後一時、われは青井山の眺望臺にありて、獨り靜かに小濱灣の大景に對せり。此處に達するに、われは先づさして繁華ならぬ小濱の街を横り、紘歌の聲する廓の一角を掠め、地の名士雲濱先生の碑に詣で、直ちに其後の岩石嵯峨たる山路へと懸りしなりき。一歩毎に眼界の開け行くこと、この山の如きはあらじ。數歩にして眼に映ずるは、弓弦のごとき灣頭を緣取れる小濱の市街、南、北兩川の互に會湊する流も著るく、國の北部を劃れる諸山には、雲おもしろく靡きて、灣を隔てたる一大巨峰、これこそかの大門小門を始め、外面一帶の奇勝を其背後に藏する久須夜ケ嶽なれと思へば、其の皺皺多き影深き山の姿にわれは愈々憧れ渡りぬ。更に一歩、更に一歩、眼界は漸く北に開け、雙子島の黑き姿、小濱灣の門戸を成せる大岩など、さながら扇をひらくがごとく顯はれ來りぬ。遂に達せしは、其絶頂、其の眺望臺。あゝ誰か快哉を叫ばざるものぞ。西北の灣は唯是れ眼下に、島嶼の碁布、岬角の出沒、をりからの風ぎたる海は、さながら藍を溶きたるが如く、雲の間よりをり〳〵穿漏する日影は、處々に金色の潮を漲らして、低く孕みたる白帆の數々。われは松原の中に踞して、唯々この大景に見入りぬ。

かくてわれは幾時かありけむ、不圖、緩き長き汽笛の灣内の穩かなる波に戦ひわたれるに驚きて頭を擡れば、一雙の小蒸汽は全速力を出して、灣の西部を東へ東へと航しつゝあり。其甲板に立てる新しき麥稈帽子、白洋服なども明かに小さく見えぬ。これ、小濱、和田通ひの汽船なるべし。かくてわれは其汽船の進航するを見てありしに、汽船は次第にわが立てる青井山の麓を弦線を畫きてめぐりつゝ、遂に、小濱港外一里のところに來て、再び汽笛を鳴して停りぬ。此時、岸より出でし一艘の艀、三人の船頭は曳々聲を出して漕ぎ近づきしが、やがて其汽船の舷腹に取附きて、見よ、今、乘客の昇降。

われの山を下りしは、其汽船の更に人を乗せて、大海に向ひて走り去りたる後なりき。再び小濱の街道に出でゝ、國學者の泰斗伴信友先生の墓に詣で、更に小濱の市中を散策す。小濱港は往昔、酒井侯の十二萬石餘の城下たりしのみならず、北國通ひの船舶は皆な此處に纜を繫ぎたるを以て、其の繁華は頗る見るに足るものありしが、今は此處を通ずる鐵道の便なく、交通頗る不便なるを以て、市の繁華頓に衰退し、人口また次第に減じ行くといふ。町は他の奇なしと雖も、衰微せる市街に見るがごとき一種の氣到る處に滿ち渡りて、潮入の乾たる河に、小童の五六人小蟹を捕へて遊ぶさまなどそれとなく眼に入りぬ。南川は町と雲濱村との境を爲し、溶々として、水常に滿てり。此川に、鮒と言ふ小魚あり。其色飴色にして、春季群を成して、此流を泝り、一たび網を打せば、克く數百を得べしといふ。雲濱城趾はこの川の河口に其の廢墟を存し、中に藩祖を祀れる神社あり。われは好奇にも、この廢墟の上に登り、天守閣の敗殘せる樓上に立ちて、海山の美、市街の光景に久しく見入ぬ。

わが宿せる青濱館の一室は、四疊半の狹き間なれど、其軒端に、楊柳の葉の戰げるがありて、頗るわが思を惹けり。夕暮、麥酒一陶に醉ひて、此家の主婢を相手に、土地に流行せる梅田雲濱を咏ぜる歌を聞き、兼ねてこの小濱港のさびしき冬の物語を聞きぬ。十二月以降は、三面を圍める山皆な深雪に鎖され、かの今津に通ずる保坂峠の如きは、深さ五六尺に達し、越前に通ずる街路また三尺有餘に及び、到底人車を遣る能はざる而已ならず、徒歩またこれを越ゆる能はず。まして、海上は北海の波濤高く、船は皆岸に膠し、北風暴るゝ時は、怒濤此の家の高き塀を洗ふことあり、是を以て、住民皆な戸を閉ぢ、業を罷めて、其の荒涼寂寞、實に想像に堪へたるものありとかや。主婢、猶語を續いで曰く、『けどもナ、故郷と言ふものは好いものでナ。どないに寒うても、他郷へは好う行く氣になりまへんがナァ』と。あゝ此の別天地、あはれこの平和をこそ愛づるなれ、この質朴をこそ愛するなれ、終年終日都門に齷齪して、曾て平和の何物たるをも知らざるもの、このさびしき冬の港を想像せよ。

婢また大門小門の勝を語る、われ問うて曰く、明日艤して至るべきか。婢、天候を窺うて曰く、其他絶海の畔にありて、岩嶮しく潮高く、少しにても北風に逢はゞ、門を出でゝ歸るべからず。是を以て、舟夫容易に舟に艤することを肯んぜず、一年の中、梅雨の候、風濤尤も平靜なる時を待ちて遊覽するを例とせり。されど今日の如き好晴ならんには艤して以て至るを得べし、客、意あらば、以て舟夫に談ぜん。われ、卽ちこれを囑す。主婢、少時して歸りて報じて曰く、舟人諾せり、客、乞ふ、明朝五時を以て發せよ。然らずんば、波濤高く、風吹き荒れて、遍ねく其勝を探る能は

ざらん、と。

われ、明日の遊を思うて眠らず。

四

曉、戸外の楊柳に蕭々たる音あり。起ちてこれを見れば、雨なり。生憎なることかな、かくては到底外面の奇景を見ること能はざるべし。われはかく思ひあきらめて再び臥床に就きしに、一時間ほどを經て、主婢來りて、如何に爲し給ふべきと問ふ。此天候にて行き得べきか。主婢の曰く、舟人今來りて語る。此雨は夜明けなば晴れん、南風少しく至ることあるべきも、舟夫三人を以てせば、敢て艤し難からず、一に、客の意に任せん而已と。

われ卽ち決意して遊ぶ。

船に上る頃、雨少しく晴る。主婢は茶器一切と火鉢と毛布とを其中に備へ、別に、風呂數に包める重箱二重をわれに渡しぬ。その何なるかを問へば、笑ひて答へず、大門に行きて開きませとのことなり。我は他に、麥酒二陶を購めつ。

岸を離ること一二町、舟夫は先づ帆を張るに、少しく吹立ちし南風は、斜にそれを孕ませて、船の走ること極めて速かなり。忽ちにして一里、雙子島の翠螺は旣にわれ等の眼前に來りぬ。

顧れば、小濱の街は旣に遠し。

鼠色したる雲は名殘なく大空を蔽ひて、和田山の絕頂ことに深し。灣は大波小波の奎湧、もしや歸られぬやうなことはありはせぬかとの懸念は絕えず胸に上り來れど、舟夫は關せざるものゝ如く、談笑自若たり。

沖に浮べる漁舟の數々、そを掠め過ぐる度毎、

『何處に行くだ。』と問はるゝを。

『外面に行くのサナア。』

と答へつゝ過ぐ。

『此の天氣に、外面行とは御苦勞ぢやなア。』

『やあ。』

『流されないやうに用心さつしやい。』

『大丈夫、金の鞋。』

など笑ひつゝ行き過ぐ。

舟夫等は今、その所謂『流されたる』時のことを語り合ひぬ。かの時は凄じき暴れなりし、其時は高き潮なりし、此身は竟に流されたることなけれど、あの時のみは櫓は最早利かずして如何ともする能はざりし。『それに、可笑しいのは、淸の野郎さ、大流れに流されて、經の岬まで行つた癖にナ、流されたんぢやねえ、態と行つたんだッサ。押の强い、痩我慢な奴ぢやねえ。』など語りぬ。われは心に懸る儘、流されることなどありはせぬかと問へば、『大丈夫、大丈夫、安心なさつせい、此の大男が三人ついて居て、旦那を流させるやうなことは爲ねえわナ。』

との力强き返答。

雙子島より更に一里。若狹灣の門口に至るや、怒濤更に高く、舟の掀翻すること甚し。されど其風景は次第に趣を加へ來りて、岩礁の聳立するもの漸く多く、或は立ち、或は臥し、或は奔馬のごとく、或は踞虎の如く、怒濤これに觸れて花と散り、雪と亂れ、其壯觀容易に狀すべからざるものあり。猶進むこと五六町、漸く外洋に面せるあたりに達すれば、久須夜ヶ嶽の半面は、總てこれ懸崖、總てこれ絕壁、岩は岩と相重りて、先づ造るや傘の瀨の奇景。見よ、絕大なる鉾岩は巨人の嘯くがごとく怒濤の中に聳えて、其の四面の洞窟に打寄する波の美しさ、凄じさ。船は其傍を掠め過ぎて、小岩起伏の間を進み行けば、岸に扁平なる大石横りて、下に隱し水の勝あるを見る。

舟夫、船を洞中に入れ、仰いでこれを掬ばしむ。其の冷かなること氷のごとし。これを出でて五六町、小島と稱する地に出づ。

此岸は更に一層の奇を極めたり。絕壁の高さ五六百丈、其の巉崖は危く頭上を壓して、上に五六の青松を點綴す。舟を巉崖の一角に繫ぎ、岩ヶ根を踏みて攀れば、人の通ひし一筋の跡ありて、そを傳ひ行く彼方、黝黑なる洞窟われに向つて其巨口を開く。

舟夫語りて曰く、これ鑛山の痕なり。昔は多額の量を產し、今も鑛脈絕えざれども、これに從ふもの、多くは路の不便なるが爲めに功を擧ぐること能はず、數年以來、全くこれを廢せり、と。

洞窟に入るに、石の破碎せられたるもの甚だ多く、意を用ゐざれば、躓き倒るるの恐れあり。窟の上部、澗水瀧のごとく落ちて、冷氣肌に徹す。匆卒にして、舟に歸り、更に絕壁をめぐりて、渺茫たる大洋に出づれば、懸崖の小灣は更に一副灣を起して、岩石の奇、殆ど名狀すべからざるを見る。思へ、矗立せるは帆檣の如く、倒懸せるは破甕の如く、起つもの、臥するもの、龜の如き者、獅子の如き者、奔馬、踞虎、飛龍の如き間、深碧料るべかざる深潭は不斷の坌涌、無限の澎湃を漲らして、崖底の洞窟に當つて碎くる怒濤の響は、さながら淥雷の轟くがごとし。船は輕艪徐ろに此間を過ぎて、遶るや、行くや、はた停まるや、かくて、岩石は絕壁と相連りて、綠靑の色美しき懸崖

を更に過れば、天下の奇景これに軼ぎしはあらじと思はるゝ深潭の暗碧、怒濤の掀翻、怪石の起伏、われは思はず快哉を連呼しつ。

紀州の山中、瀞八町の奇勝はわが常に忘る能はざる處、其瀞潭の深碧は、此胸に驚くべき深祕と沈默とを傳へたりしが、髣髴たる其深潭を今此の絶海の畔に見んとは！　われはこの外面一帶の風景に對して、遙かに紀州北山川の峽谷を思ひぬ。

唐船岩の奇怪極れる景を賞し、更に久須夜ケ嶽一帶の絶壁を傳ひて、猶進むこと半里程、低き灌木の間より亂れて落つる小瀑の幾條を仰ぎ、常神の岬に、鼠色の濃き雲の懸れるを見つゝ、遂に達せしは、大門小門。

只見る、松樹稀疎たる懸崖は海中に矗立して、四面より落つる小瀑布の瀑々く、怒濤の高く烈しきを避けつゝ、崖に從ひて右より左に遶れば、一町、二町、三町にして、忽ち相對す、正面に其の自然の門。眞個堅城の追手を開きたるがごとく、其奇構、其の奇景、思はず人をして天工の妙なるに瞠若たらしむ。門、高さ五六十丈、傍にくゞり門とも稱すべき小門を具し、窺へば潮水一泓、明かなること宛然鏡のごとし。舟夫、帆檣を立てゝこれを過ぐ。

門を過れば、其裡ハ潮水の廣さ大凡方五六十間もあるべく、前なる絶崖の小谷よりは一道の大瀑

鏗然として落下し、中途折れて小尖岩に飛散し、嬌態轉た人意を惹くに堪へたり。舟夫、先づ船を其の灣内浪穩かなる處へと漕ぎ、岸邊の尖岩に纜を繫ぎしが、さて靜かに取出すや、船底より酒一壜、肴一包、飯一盒。

『旦那樣、一盃お遣りなされ！』

と五郎八茶碗をわれに差しつ。

われも兼ねて携へたる麥酒を出し、主婢が大門まで開くなと笑つて言ひし風呂敷包の重箱の蓋を明れば、美しや、薄紅色なせる小鯛の鮨！

此鮨の旨かりしこと、此大碗の酒の美なりしこと如何ばかりなりしぞや。舟人語りて曰く、

『實に、外面に來て飲む酒は旨い、いつも足らぬと思つて五合位餘計に持つて來るんだけど、それでも足らぬ！』と。此の好風景あり、誰か酒を過さざらんや。

此一泓の潮水、これ外面に遊ぶもの、最も快を叫ぶところ、晴日には、或は岩石を攀ぢ、或は瀑底に掬び、一竿釣魚の樂や、岸頭採貝の興や、その遊嬉、日を盡しても猶ほ去るに忍びざるものあり といふ。生憎、今日は鼠色の雲低く、南風細雨を送りて、怒濤漸く岸を嚙まんとするの兆あるを以て、一時間の後、遂に割愛して船を回す。

若狭灣の門口に至るまでは、長き絶壁南風を遮りて、さして困難を覺えざりしが、大岩の鼻附近に至れば、海は坌涌澎湃、唯是れ鼎の沸くが如く、波頭の掀翻、潮流の洶湧、殆ど船を遣るに難し。前を見れば、小濱灣は盤の如く、鼠色の濃き雲低く舞ひて、暴れ模樣は一目にてそれと知らるゝ海、山の暗澹。がくても舟を回し得べきや。

小舟に懸けし櫓三挺、舟夫は今を時と阿耶曳々の聲、動搖する舟は唯是れ木葉の如く、少しく心を用ゐざれば顚覆の恐れありと思はるゝばかりなりき。殊に、潮高くして進まざる舟のもどかしかりしことよ。三十分、四十分、猶船は大岩の鼻。

兎角して雙子島に達せし時は、眞に是蘇生の思ひありき。更に、一怒潮、一坌涌、午後一時辛うじて小濱港に戻りぬ。

五

敦賀に向ふべき汽船も、この南風にては寄港すまじとのことに、止むなく俥を雇ひて發す。

日笠村より岐れたる敦賀街道は、一直線に北に向ひて、或は疎なる雜木林の繁茂、或は美しき並木松の排列、三十三間山の山脈には湧くがごとき黑雲 夥しく簇りて、をり〳〵洋傘に催し來る一

霎の雨。名も知らぬ村幾つか過ぎて、白壁多き安賀里の里に入れば、三方まで歸り俥あり。お氣の毒なれど、乘替へて賜はれと車夫は言ふ。餘儀なく俥を代へて進む。これより山漸く深く、搖曳せる翠嵐漸く多し。ことに、沿道、松の並樹の美しきは、此地方の特色とも稱すべく、夕陽の影のほのかに照り渡れる頃、われは三方村近く來りぬ。

三方の四湖は、所謂潟湖の性質を具し、三方村に入らんとする前、われはその髣髴に接し得たり。阪、並木松、稻田、其下に展げられたるは、夕暮の靄に包まれたる銀色の湖水にして、向ひに聳えたる山々の幾連亙、湖の岸には、夕炊の烟に包まれたる平和なる村一つ二つ横りて、低く孕みたる白帆の數點、あはれ美しの景色やと思ふとする間に、俥は坂を下りて雜木林の中に入りぬ。

三方の旅館は湖に近くして、しかも水を見ず 平凡なる田舍道に臨みて、蒸暑さ堪へ難きところなりき。夕餐の膳に上りしは、鯉、鯰、鰻など、皆な湖水の獲物、給仕の女の、言葉の鄙びたるも侘しく、ことに蚊の多く且大なるにはしたゝか怖毛を振ひぬ。

あくる日は、雨蕭々として俥の幌の裡暑く、その絶間より絶々に見て行く田舍の景色の佗しさよ、かくて越前崎の海波の白く見ゆるあたりより、雨は小降になりて漸く俥の帆を外すことを得たれど、一里、二里にして、再び美しき海山を背後に、とある荒涼たる山村を過ぎ盡せば、勾配漸く

急に、面白き並木松の間、草刈娘の籠を背負へる群の行衛遙かに、一株の傘松、透迤たる褐色の路。それぞ若狭、越前兩國の境なる。

峠には美しき冷き清水ありき。

北國街道

一

若狭より越前に入るに、榮螺が岳の峻嶺は左に高く、ふわ〳〵と綿の如き雲杳かに、遙かに廣く展開したる彼方には、黑ふに深碧なる海、澎湃たる怒濤、岸を緣取れる青松の列畫くが如く曳きて、上に漂ひ渡れる五六の白帆。

北國街道を其の翠微の裡に有する橡木峠一帶の山嶺の高さよ、又嶮しさよ。冬の日は積雪百尺、義貞の軍これが爲めに飢ゑ、勝家の兵これが爲めに機を失し、英雄をして遂に悲しき末路を描かしめたるは、此の高く面白き山の姿かと、そゞろに往昔を胸に繰返すとする間に、載せたる若き車夫の脚早く、俥は飛龍の如く一路坦として敦賀に向ひぬ。

敦賀は瓦甍粉壁、海色潮光のたゞずまひ世にすぐれて、岸には松影、港には檣影、かの名高き常宮の祠のあたり、彎入せる海の碧は殊に穩かに、斜に孕みし一帆の渡し船、をりを巨人の嘯きかと人を驚かしむる汽笛の響、見よ、手筒山下の紅樓には紅裙の影郎の船を送りて、影悲しき月の夜の金波銀波、多恨の人ならざるも、誰か腸を斷ぜざらん。あゝこの美しの海、情けの港。

まして美しき歴史の追懷は、いかにこの北陸の一港を詩的ならしめしとするぞ。氣比神宮こそはその最も舊き遺趾、二千餘年の昔、仲哀天皇は此地に都して、神功皇后の征韓の舟師は此處に其の征途を祝したりきとぞ言ふなる。下りて、南朝の一悲劇、港に對して東北に聳ゆる一丘、それこそは悲涙とゞめ難き金ケ崎の宮。想像せよ、新田義貞、敗餘振はざるの兵を帥ゐて、幼き親王を護し奉り、京師に別れて、北に、琵琶の湖畔を海津に來りしは十月の早寒空、氣比神官の一族の爲めに迎へられて、辛くも金ケ崎の城に入りし時は既に四面皚々たる雪。やがて敵の大兵に圍まれたる孤城の饑寒はいかに。杣山の瓜生は雪に阻まれて敗績し、三四月の後、南軍遂に悲しき末路。尊良親王の自刃、恒良皇太子の蕪木浦逃匿、續きて捕虜、續きて毒弑、義貞の忠にしていかでか泣血憤慨せざるべき。宜なり、渠が絶世英雄の資を以て、一雜裨將の如く遂に藤島に戰死するに至りしことや。

今、波靜かに、日かゞやき、丘陵の一角、大なる華表は海山に面して、社務所には衣冠著けたる

禰宜の端座、拜殿の注連縄の白紙風に飜りて、境内修理の土工等、丘陵の土を削りて、頻りにトロコの車を押しぬ。悲劇過ぎ去りし後の永刧の平和、渠等は其の悲劇を知らず、知るも猶これを思ひこれを弔ひ、これを悲むに至らず。われは社頭に立ちて、悲劇と平和とを久しく思ひぬ。

此の社頭の眺望、餘りに明かに、餘りに麗はし。憑弔の恨、追懐の情、幾度か胸に描きて、蜘躊去るに忍びざるものありしが、何時までもかくあるべきにもあらじとて、割愛して去る。

松原公園は名の如く松樹の搖曳、其中なる松原神社は水戸の志士の此濱に露と消えたるを祀るなり、われは跪拜して、更に新しき悲愁の情を繰返しぬ。

海美し、街美し、更に歴史美して此敦賀港。

二

町にありしは、纔かに三時間、風景越前に冠たりとの稱ある常宮をさへ訪ふ暇なくして、直ちに上りしは北上の汽車、敦賀盆地を北より西へと掠めて、かくて木の芽峠連嶺の翠嵐の中へと入りぬ。溪の小流、野碓の獨りさびしくめぐれる彼方、田舍少女の眞白なる手拭に髪を包める、田畠の處々白壁の土藏の日に照りたる、楢の林中の道、丘の上のひとつ松、かくて兩傍の丘陵小嶺は次第に迫りて、褐色の岩石に激せる小溪の流、漸く細く細くなりしが、轟然穿ち入る暗黑々の隧道。

煤烟の音凄じく車燈の影朧氣に人を照して、轉た仙話の洞窟に入りたるがごときを覺えしが、忽ち出で去る光明また光明、見よ何等の好風光、如何にしてかく俄かに、如何にしてかく美しく前に展げられたるかと思はるゝばかりの海、島山、白帆。

わが汽車の駛れるところは山の半腹、これが爲めに、幻影の如き山水圖は皆な眼下に、岸には亂るゝ怒濤の掀飜、山には懸れる白雲の搖曳、長く彎入せる敦賀灣には紺青をもて描きしに似たる島嶼碁布して、海に盡きたる榮螺ケ岳の餘脈より、斜に開くや、縹渺たる日本海萬頃の怒濤。

『好い景色だ！』

『何時通つて見ても、此處ばかりは飽きんね。』

『實に好い。』

乘客の眼は皆偏りぬ。

『常宮は丁度あの近所になつて居るだらうかね。』

と、土地の豪商の子息らしき、赤き襟飾の、アルバカの洋服を着けたるハイカラは、傍なる友らしき男に尋ねぬ。

『左様サ。』と、問れたる男は、前に展げられたる景色を見て、『此處からはよく見えんが、丁度あの岸にくつ着くやうになつて居る島があるだらう。あの少し左になつて居ると思ふね。常宮は好いね！』

『常宮は好い。』

汽車は再び隧道の中。

隧道を出るや、其會話また續きつ。

『春なぞあの近所に行つて網でも打つたり、釣でも爲て居やうものなら、丸で世の中を忘れて了ふやうな氣がする。君は、何時行つた。』

『僕は三年ばかり前の秋！』

『秋も好いだらう。』

『好いね、秋は空もよく晴れるし、眺望もよく利くし、それに紅葉が好い。』

『紅葉が？』

『さう澤山も無いけれど、海邊の紅葉と言ふものは又一寸風情があつて面白いものだ。』

『さうとも……。』

この汽車の開鑿せし道は、岩石なれば、過ぎ行く俥の底の轟音高く、見るから危きばかりなる岩山の一端。隧道ごとに、風景は少しづゝ變り行きて、海中に突出せし冠岩一帶の丘陵、稍々右に偏ると見し頃、汽車の歩みは漸くに緩く、開かれたる斜坂の上に、さびしく一個の停車場。

『すいづ、すいづ（杉津）。』

と車掌は呼びぬ。

此停車場よりの眺望、またわが心をぞ惹きたる。新しき建築と見えし小さき停車場、それより一道の褐色の路はうねゝと、或は豆畑、或は粟畑、或は草藪の間を下に下にと降り行きて、風情ある茅葺屋根の兩三軒、其處は子供の衣、浴衣などの高く竿に干されたるを見しが、猶下れば、風情ある松の林、右の山陰の荒磯深く、濤立ちあがる砂濱には、さびしき漁村蜑戸の群、ことに、冠岩は押潰されしやうに低く蒼波の上に突出して、其上の松樹の繁茂、思ふに、由緒舊き祠。

停車場の名勝標には、此海岸に海水浴場あることを記せり。乘客に問へば、其設備甚だ完たからざれど、風光の明媚なるに憧れて、夏は行いて遊ぶ者多しとなり。かくと聞きし我は愈々心を動かさざること能はざりき。其松原には色殊に美しき撫子の花、山よりは絞れて流るゝ清水の泉、無邪氣なる若き漁師のさまぐゝなる面白き海物語、殊に月の明かなる夜など一人その松原へとあくがれ

渡りて、美しき海の閃耀を見んと、一歩は一歩より高く其の斜坂の上へと登りつ、遂にこのさびしき停車場に來り、一椀の茶をもとめたるを縁に、さまざまの物語に耽ることありたらば、いかに。若き驛長、老いたる驛夫、都を望む心と鄙に埋るゝ心とは、いかに面白き感をこのわが胸に起さしむるならん。話頭は必ず北國の雪物語、其間の此の海山の寂寞、都よりの便とてはをり〳〵聞ゆる汽車の音ばかり、しかも車窓を明けて海山の風景を望む人もなく、倏忽に過ぎ去る幾長蛇。

ぽつねんと雪の中に立てるさびしき停車場のさま、明かに眼に浮びぬ。

此の空想の間に、汽車は猶一二の隧道を過ぎて、其海山は遂に見えず。

三

山と山との間を越えて、次第に開け行く福井平地、鯖波に至りて、瓜生保が孤忠を以て聞えたる杣山城趾を人に問へば、車窓より首を出して、其山こそそれなれと教ゆ。見上れば圓錐形を爲せる一個の獨立山、其上には斜に掠めたる一片の白雲。萬古の恨、遂に消えざるがごとし。

福井に入りしは午前十一時、足羽山に藤島神社の昔を偲び、義貞の北國征略の纔かに此地に及べるのみなるを慨し、猶、市街を逍遙すること二三時、再び停車場に汽車を求めて、直ちに北に向ひたるが、加賀國、大聖寺町に至りて再び汽車を下りぬ。

停車場を出れば、前の廣場の一隅に、小さき屋ありて、矮小なる男、破鐘のごとき大鈴を鳴して頻りに客を呼べり。これ、山中溫泉に通ぜる鐵道馬車の發車の近きを報ぜるなり。山中、山代、片山津は加賀の著名なる溫泉場、ことに山中は風景に富みたりと聞けば、直ちにこれに赴かんとす。山中鐵道馬車會社は、官線北陸線の對面にありて、其處に集れるは、皆な其地への湯治客、旅鞄の大なるを携へたる若夫婦、其地の友人を訪ぬると言ふなる絽の三紋付羽織の紳士、其他、山中漆器を買出しに行くと稱する若者など、その喧しきこと言はん方なし。待つこと稍少時にして、馭者は痩せたる馬を杖にと繫ぎつ。一聲の喇叭を合圖に、これより山中まで二里半の長途、われはいかに腰の痛さを覺えたりけむ、線路の細きが上に、馭者馬を御するに拙なるが爲めか、其動搖實に夥しく、折々車輪に當る大石小石、其度毎に、乘客は皆な手に汗握りて、辛くもこれを堪ゆるなりき。ましてや、馬車の路は一筋に田圃の中に長く、やゝ登り坂に至れば、馬は呼吸絶え〳〵、馭者の鞭烈しく馬の空しき背を打ちて、殆ど血汐の流るゝを見るに至れるをや。

二里半の道程に二時間餘を費して、大聖寺川の流遙かに、一帶の小盆地、樓々相連れる溫泉場に達せしは、午後四時過なりき。先づ扇屋と言へるに着きて、内湯や何處？　と問へば、此處は往昔

のまゝの總湯一つあるのみ、何處の浴舍にもさる設備なしといふ。止むなく浴衣懸けになりて、其處に赴く。

道路の中央、大なる家屋ぞそれ。先づ見るや、扉の内外、若き美しき少女の群、手に手に浴衣を携へて、語るや唄ふや、さながら雀の囀り小鳥の歌。浴衣をそれに渡して、日の光到らぬ小暗き浴槽の裡に入れば、茫と立ち靡ける湯氣の中、浴客はひしと詰りて、或は鼻歌を歌ふ者、或は義太夫を唸る者、或は笑ふ者、或は語る者、或は喚く者、或は怒る者、其喧しきこと言はん方なし。われはこの光景に一方ならず怖毛を振ひたれど、兎に角一浴せばやと、其裡に入れば、溢るゝばかりの湯の漲溢、自然石の古風なる槽底は流石に風情ありて、其儘心地よき湯の香に醉ひぬ。

湯上の身の心地すがゝしう、折から山雲の霎雨を催し來るにも拘らず、地の名勝蟋蟀橋を訪はんものと、其儘石ころ道を上流へと向ひぬ。

村の盡頭、右左桑畑、山には鼠色の雲佗しく懸りて、山中の民と覺しき簑笠の後影を見送れば、番傘に麗々しく旅亭の名を記したる浴客の戻り姿、ちよろちよろと流れ落つる清水に、女郎花、萩、桔梗などを折りて挿したる畫のやうなる小景を路傍に見つゝ、猶幾町をや進みけむ。俄かに高くなれる水聲は碎くるがごとく、杉の暗樹の絶間より早くも見ゆる溪流の奔湍。

思はず脚を早めてこれに赴けば、茶樓一兩軒、溪潭に臨みて、忽ち見る風情ある百尺の危橋、大聖寺川の流は此處に一ところ奇景を幻出し、岩の聳えや、潭の碧や、溪の屈曲や、宛然これ袁家渴記中の光景――われは恍惚として、橋欄干に凭りてこれを見入りぬ。

橋を渡れば、亭あり。其位置、最も溪を觀るに適せり。卽ちこれに上れば、山氣空濛として來りて室に入り、また三伏の炎暑の身にあるを知らず。婢に命ずるに、麥酒を以てし、香魚ありやと問ふに、『唯今取れたのが御座りまする。』とは嬉しき答なり。言ふ勿れ、一人旅は興なし、と。此溪あり、此の亭あり、此の香魚あり、あゝわれいかで醉うて低誦せざるを得むや。

四

微醉の顏を夜風に吹かせて、旅亭に還れば、亭の主人來りて、珍らしきお出……と馴々しき言葉なり。怪みて問へば、わが名を宿帳にて知りぬといふ。且つ語りて曰く、三四年前、大町桂月氏來りて此處に宿し給ひしことあり、雜誌紙上にては常に其健在を知れど……近頃も御健全にや、歸り給はゞよろしく傳へてよなどと言はるゝも何となくなつかしや。

われはかくて主人より此の山中溫泉に就きて種々なることを聞きぬ。かの總湯の扉の内外に集れ

る少女の群の、名を浴衣婢と言ひて、客の浴衣を預からん爲め、態々此村及近郷より驅り集めたるものなること、昔は此風今の比にあらずして、一種湯女とも稱する淫靡なる風俗を成し、其の誦する唄また卑猥淫靡を極め、客の枕席に侍するもの、獅子と稱し、浴客またこれに戯るゝもの多かりしこと、維新以後は其檢束漸く嚴に、今は其風全く廢したること、其他、土地特有の風俗を何彼と詳しく聞きぬ。

翌日は夙に山中を發し、河南にて鐵道馬車を下り、大聖寺川を渡りて、山代溫泉に向ひぬ。山代溫泉は山中溫泉と共に加賀の著名なる溫泉場、其浴室の設備は殆ど完全に近く、來り浴するもの年年數十萬に及ぶと言ふ。されど、地は田圃の間にありて、附近見るべきの景なく、絃聲徒に耳に喧しくて、要するに俗地たるを免かれず。

一浴して去る。

此より片山津溫泉へ二里。此間は渺々たる田圃、樹立繁れる處々の村落には、普通の田舍に見るに異らぬ茅葺屋根、白壁の土藏のみにして、唯とある垣根に合歡の花の咲けるを美しと思ひしのみ。北國街道は北陸線の鐵道と相並びて、動橋驛の停車場を右に、やがて前に展げられたるは、渺茫たる銀色の水の堆積。

『これが柴山潟かね。』

と車夫に問へば、車夫は驅走を少し遲くして、『え、左樣で御座います、まだ此向うに、木場潟、今江潟と言ふのがありまして、鮒や鰻やえらく捕れるですナァ。』

『實盛の墓と言ふのがある相だナ？』

『え、御座いますァ。』

『何う行くんだ？』

『片山津から鹽津と言ふ處を通つて、篠原――その實盛さんの討死さつしやつた篠原でがすァナァ今ぢや、から詰らねえ處で、松原ばかしでがすがナ。昔ァ、何でも今の街道筋が其處等を通つて居つたとかで……。』

『俥で行かれぬか？』

『いんや、何うして、はァ、行かれやすけえ。道も碌々無えだ。』

柴山潟は、一步一步其の美しき風景を展開して、蘆荻蒲葦の面白く緣取れる彼方、薄き靄は銀色の被衣の如く、遠く靡ける松林を隔てゝ、地を撼して來れる日本海の怒濤、見よ、雲間を微かに洩れし火の光、聰しけに覗くや碧空。

實盛の墓はわが思ひを惹けるところ、其面白き歴史は、さらでだに興多きを、とある案内記に小さく描かれたる松原の奥なる其墓、それを見てよりわが好奇の念は更に加はりぬ。まして車夫の興味ある説明、俥至らぬのみか、道さへぞなしと言ふなる。よし、われ訪はん、われ憑弔の意を寄せむ。

片山津に入らんとして、俥の湖畔の一角を過ぐる時、われは不圖白山の秀姿を思ひ出しぬ。越前なる木芽峠の山脈を出でゝより、わが思ひは常に其山、其姿、往古人の仰いで越の白嶺と言ひし其秀容は、いかに山にあくがれ渡れるわが心を動かすべきか、いかに都門の塵に汚れたるわが胸の俗慮を一洗すべきか。かくてわれは過行く道すがら、幾度其山の方角を路人に問ひ、幾度其の山の方角に眼を瞪りたりけむ。されど、生憎、空は昨日も今日も鼠色の雲の蓋、其秀でたる山のみか、其連山の裾だに見えずして、惆悵顧望の情殆ど堪ゆべからざるものありき。今、不圖思ひ出して、これを車夫に問ふに、車夫は言ふ、此地、此一角、殊に白山の眺望に富みて、晴天には、其の玲瓏たる秀容、來りて影を湖水に蘸し、其の風光の絶佳、容易に狀すべからざるものあり、と。かくて車夫はゆくりなく其方向を顧みしが、聲高く、

『見給へ。』と言ふ。

其指點せる方向、雲稍々薄らぎて、碧空の處々、日の光美しく、山の裾らしきもの長く鼠色なして横りぬ。『あの山の裾、あの上に白山があるのですが……。』と車夫は言ひしが、凝視すれば、果して、雲の絶間々々、其鼠色の肩や胸や。

顧望の幾度、湖水の縁をめぐりて猶進めば、やがて片山津溫泉に達しぬ。樓々多くは水に臨みて、雲の影、蘆葦の影、一夜浴せばいかに興多かるべきかを思ひつゝ、しかも過ぎ去らねばならぬわがいそがしの旅。街道には日に曝せる晴傘の數々、總湯のあたりには、手拭を肩に、だらりとしたる蒼白き顔の湯治客、緋縮緬の扱帶しどけなきあやしの女、曲欄干に凭れるなどを見つゝ、驀直に湖水の南岸、町を外るゝより再び見ゆる面白き景色を眺めて、一意に展げられたる松原を志しぬ。

道伴になりしは、近郷の農に肥料を賣るを生業とせる四十男、北國訛の言葉可笑しく、かねて聞きし獨逸語の「a!」さうけいの連續に興を催し、實盛の墓の所在を問へるより始めて、旅の話、土地の話、戰爭の話、講和の話、行く道の泥濘をりゝ靴を沒するばかりなる難場をもいつしか過ぎて、松原續きの丘陵の幾起伏、曲りくねれる草川には、みそ萩、薄、刈萱の亂れ咲美しく、遂にとある村のわかれ道に至りぬ。

男は立留りて、それでは此道を右に眞直に御出なされ、少し行くと、路が二つに岐れて、左に一軒茶屋がありまする。其處の女房は此あたりにても名代の別嬪、其處に行つて、實盛の墓は？と

御訊ねになれば、叮嚀に教へて呉れます。淋しい處で、不常は人も通らぬ路なれど、今は西瓜の時節なれば、安宅あたりからそれ賣りに通るものがいくらもありませう。今江――今江の三湖臺と申して、左程面白き處にてもあらねど、達つてお出とならば、實盛の墓所から、松原を眞直に湖水の緣に出で、それを左にくるりと御廻りなされ。さうすると串と申す處に出ます……。私は此から向うの村に參りまするからと叮嚀に教へて、其儘右の路を枳殼垣へと曲り行きぬ。われは教へられたるまゝ、粟の穗の慚げに垂れたる褐色の畑の間を一町ほど進めば、其の風情ある廣き松原の入口、果して一軒の茶屋。

近鄕に名高き別嬪の主婦の顏も見たく、實盛の墓の所在も訊ねんものと、前に張りたる葦簾を分けて中に入れば、西瓜、甜瓜のごろ〳〵と數限りもなく轉れる店の一隅に、主婦は新しき白手拭を髮に、後向になりて居たりしが、わが足音に振返りて、につと笑みたる其顏の美しさ、其色の白さ！年の頃は二十二三、丸顏の、眉は地藏、口のしまりに此世ならぬ美しさ顯はれ、眼色の好もしさ、襟足の玉の延べたる、この磯濱にこの美しさは　我ながら打守らるゝ。

西瓜割かせて、茶汲ませて、さて、かゝる淋しき濱、さびしき松原、それよりは東京に行く氣はないかと問へば、住馴れの故鄕、何しに東京くだりまで難儀致しに出やうと思ひませう、東京に出た妾の朋輩も隨分澤山御座りますれど、一人とて運の好きものは聞きません。落魄れて故鄕に恥を晒したものも一人や二人ではありませぬ。現に、此間も、妾の幼友達、學校にも一緒に通つて、それは氣性の好い男の子で御座いましたが、親の遺らぬと言ふのを無理に、こんな田舍に埋れて先祖代々の百姓になるのは厭だと申して、五年前に、村の松原、私はこつそりと二里程送つて、出世して歸つて下されとつく〳〵別を惜みましたが、それが何うで御座いませう、ついこの間　着た切りのみすぼらしき姿、ひよつくり歸つて參りまして、親の恥、村の恥、私はまだ逢ひませぬが、皆樣の御話では、もう昔のやうな優しい所はなく、よくまア、恥も知らずにあゝづうぐ〳〵しくして居られるとのことで御座います……との追懷の物語、われはそゞろに心を撲たれて、平和なる此海邊の村のことを思ひぬ。

想ひ見よ、此村、此松原の間の路、これこそ、往昔の北國街道、平家の大軍は倶利迦羅の一戰に敗れ、恐ろしき源氏軍の追擊、この篠原の里を破られてはと、名を惜む面々、踏留りての惡戰苦鬪、入り亂るゝ兩軍の旗の影、槍の光、刀のかゞやき、實盛は此處を先途と戰ひし後の名譽の戰死、其墓は此松原の奥の奥、其入口の茶屋にはかゝる美しき主婦の追懷、好奇なる旅客の詩思、――松の音、濤の聲、あゝ悠々たるかな人生の悲哀。

松原の奥の奥。

茶亭を出でゝ早七八町、海岸の道を眞直に、主婦の教へたるまゝを右に折れしが、行きても行きても墓らしきものも無ければ墓の傍に植ゑられたりといふ古松らしきものもなし。松樹の下は赤き砂路、磯蘭とか言へる葉の厚き緑の繁りたる處々、紅、目も覺むるばかりなる撫子の爛開、冬の烈しき風に吹寄せられたるらしき小丘の幾つとなく連れる間を右に越え左に登りて、或は倒れたる松の木根を踏み、或は荆棘の亂れたるおどろしきを分け、猶ほ行く程に、迚る程に、不圖丘と丘、松影と松影との重り合ひたる狹谷に一泓の池水を認めぬ。

五

さなり——鐵色なせる池水！

松影は蔽ふがごとく其上に重りて、簪なせる枯葉の浮べる彼方、痩せたる蘆葦の亂れ淋し。わが足音に驚きて、二つ三つ飛込みし蛙に、靜かなりし池の面は破れて、其處に作るや輪の幾輪。

わが好寄、われは實盛の墓を訪ふことをも忘れて、其儘、其傍なる草の上に腰を息めて心をすましつ。松の葉の絶間より落つる雲の彩ある影に俯し、それとなく耳を欹つれば、限りなき松の聲、

限りなき怒濤の音、——あゝ誰れか胸動かざる。

松を隔てゝ、日本海の怒濤、浦潮須德克の潮は朝に夕に此岸に漲りて、北國の淋しき海岸は延長百有餘里、海鳥亂れ叫ぶ無人の岩、燈臺の光は夜毎寂寞を極めたる海波を射て、港遠き舟人のわづらひ、あるは、さる年に難破して溺れ死せし遠き國の舟人の墓、昨日も今日も歸らぬ舟を天末に待ち佗びてさびしく暮るゝ漁村の夕、あるは潮滿ち、獲物溢れて、漁村の家毎、燈火の光赤く、磯際に歌ふ若き漁師の聲、あるは小さき港に風待つ百石積の船幾艘、夜毎紅樓の火は海波に落ちて、絃聲絶ゆることなき海嘴の一角。——ふと空想より離るれば、下なる池には水馬一つ二つ、微かに照る日の光、雲の影、頭上には同じき松風の遠笛

かくてわれは幾時かありし。不圖われに歸りて、其儘に歩み出したれど、今は迷ひてそこと所在を知らぬ身の、先づ元の路にこそと思ひ決めつ。同じ松影、同じ松原、同じ丘陵を越えて、五六町、不圖、耳に入りしは、人の語り合ふ聲。

急ぎて彼方に志せば、松原の中の茅葺屋根一軒、桔槔の高く揚れる傍には、二畝三畝ばかりの菜の畠豆の畠、今の聲は此家よりかと耳を欹つる時、再び姿は見えずして聲のみ高き二三人の群の氣勢、路は此家の彼方をぞ通ぜるなる。

家の笠を飛越えて行く譯にもゆかねば、大廻りに其路に出でて、十五六間ほど行過ぎし聲の群を見れば、何れも春擔ぎし海女の素足、一人は年若く、一人は年老い、今一人は十一二の小童、松風の波濤の音より聞えぬこのさびしき路を、誰憚るものもなく、思ふまゝを大聲に語れるなりき。

驅寄りて、實盛の墓を問へば、驚きて振返り、わが洋服姿を見て更に驚きし體、まこと新しき縞セルの服にオリーブ色の襟飾、佛蘭西皮の赤靴は、この荒磯には釣合はぬ限りなるべく、海女のじろ〳〵とわれを見詰めて、とみには答へぬも理なるべし。

『實盛さんの墓見に來たんけえ？』

と若き海女。

『實盛さんの墓ッて、何の御堂であるでねえし、詰んねえ處だのに、態々こんな處に入つて來たんけえ、えれ〳〵。』

とさも都の人は解らぬことを爲ると言はぬばかりに、吾顏を見る。

小童も亦われを穴のあく程。

まア後に跟いて來よとのことに、われは其儘松原を通ぜる路を眞直に傳ひぬ。冬の海の潮風に捻られたる松は面白き濃淡の竪縞を織りて、梢には何とも知れぬ小鳥の玲瓏たる宛囀、地を撼して來る怒濤の響、地には松の枯葉の堆積、草叢にをり〳〵交る撫子の花、そを一つ折りて、これを帽廂に挿むを、あやし業するとて海女は見守りつ。かくてわれ等は二三町進みしが、前に見ゆる半農半漁の家二三軒、低き白壁の土藏の前に立留りて、其處より折れたる細徑の奥、かしこに低く地を這ひたる傘松あらむ。其處こそ實盛さんの墓なれと老いたるは敎へぬ。

まこと其墓の荒涼、地に這ひたる傘松に相對して、小高き丘に一基の小さき墓、字は磨滅して讀むに難く、年既にあまりに久しうして、詣づる人の香花もたえたり。われは帽廂の撫子の花を手向けつ。

されどこの荒涼こそなか〳〵にわが興をぞ促がすなれ。殿堂巍々として香烟日夜絶えざらんよりは、いかばかり深く淋しくわが胸に沁み渡りしぞ、この墓の上の微かなる松の音、濤の聲。

光陰の過ぎ去る、隙駒。されど人の世に生れては、月日の過ぎ難きを愁ひ、刹那の移り易からざるを嘆くことまた多し。此苦、此愁、いつの時にか免れ得む、此煩悶、此惑溺、いつの時にか拭ひ得む。短き人生五十年と言へるに對して、われ等は平凡單調なる月日の竟に終らざるを悲しみしこと幾度ぞや。

あゝ墓畔、あゝ墓石。

風雨幾百年。
限なき悲愁はわれを襲ひぬ。

六

海女の群に追ひ付きしは、實盛の墓を出で、久しく走りたる後なりき。さびしき松原、一度此中に迷ひ入らんには容易に路を見出さんこと覺束なしと思ひたれば、われはかの海女の群によりて、今江に達するの道を得んと思ひ決めたるなり。傍、海女に問ひ、傍、手にせる陸地測量部の地圖を檢するに、われ等の歩める路は覺束なき點線にして、直ちに安宅に達せるものなることは明けし、否、海女の群も亦其地に志せるもの、かれ等は此朝西瓜を擔ひて橋立と言へる海岸の村に赴き、そを賣り終りて、其家路にと向ひつゝあるなり。安宅とは有名なる勸進帳の地、さぞな其古蹟に詳しからめと、いろ〳〵に問ひ試みたれど、海女は更にさるものを知らじといふ。其村に住みて、知らぬといふことはあるまじ、義經の舊蹟、牛若丸の遺趾、富樫の關所と、其物語すら語り聞かすれど、猶更に知らじといふ。無邪氣なる彼等、愚かなるかれ等——されど其村の舊蹟をすら知らぬかれ等は幸ありや。

篠原を去りて濱佐美の村、今江に赴くには其處まで行きては廻り路なれど、さりとて不知案内の身の、松原を横斷する勇氣も出でねば、其儘海女の群に從ひて其村へと志しつゝ行く。

松原の途絶えたる處、豆畠、菜畠、西瓜畠、海濱に近く五六軒の屋根の見ゆるは鹽燒小屋なりと言ふ。此あたりの冬はいかに、雪深く積るならんと問へば、積るにも積るにもそれは御話にも何もなりはしませぬ。丸で路も何にも無くなつて了ひますとのこと。其寂寥たる中の松原、鹽燒小屋、日本海の怒濤。

わが胸にそのさびしきさま浮びぬ。

濱佐美は、半農半漁の村、われ等の歩める路は其風情ある村の中央を横ぎりて、松影と松影の重り合へる處、美しき白堊の土藏、桔槔、物干竿、稍々展開せる丘の邊には、漁網高く日に曝して、うね〳〵と其傍を海への砂路。

時は既に午、飢ゆること甚し。物したゝむる店ありやと、彼方此方を探したれど無し。止むなくとある家に憩ひて、強ひて請ひて甜瓜二箇を割きしが、あの其味の旨かりしことよ。都にありては甜瓜など手に取りしことも無かりしものを、かくて今江に赴くべき路を問ふに、路と言ふべき路もなく、唯々松原の中を穿ちて行くなりといふ。われはしたゝか困りたるに、これを見兼ねたる家

の老婦、さらば、妾、案内して參らせむ、此松原だに出づれば、路は明かなるべくに……と結束してわが前に立ちぬ。

同じく松の影深き砂路を左右、或は丘を越へ、或は濱川を渉り、或は畠を横り、或は荆棘を穿ちて、かくて歩みしこと凡一里ばかり、最後の松原はとある長き丘陵の一角、蜿蜒たる路を潤々と向うに出づれば、あゝ何等の大景！

われは恍惚として唯見入りぬ。

見よ、松原を盡れたる路は低く眼下に、畠、田、村落の彼方、美しき柴山潟の全景は銀色の靜波をたゝへて、其上に高く聳えたるは群山を卧ゐたる偉麗なる白山の秀姿。わが連日憧れ渡りてしかも見ること能はざりし其山は、今し搖曳せる彩ある雲の衣を粧ひて、千古の雪美しく日に輝き渡れるにあらずや。

『御山がよう晴れた！』と、老婦は言ひしが、われに向ひて、『それでは、此の路を湖水についてぐるりと御廻りやれ、今江はあの森ぢや。』と　右に低く黑く　横はれるを指し、『それでは、達者で行きなされ。』とて去りぬ。

疲勞をも忘れ、飢餓をも忘れて、われは久しく其松林の一角。

奈良雨中記

一

處は奈良の古都、時は春初の風寒く、鼠色の雲は空に滿ちて、昨日燒きしといふなる若草山の肩薄黑く、旅情の佗しさ轉た堪へ難き折から、後の唐紙をそと開きて、婢は麥酒一陶を齎し來りぬ。

旅館は今小路、森閑としたる十五疊の奥座敷、常ならば吾等窮指大に、貸すまじき立派なる室なれど、遊覽の客乏しき今は、只西の角に一室、小商人らしき客のがさこそと音するばかり、冬の名殘の寒氣と寂寥とはあたりを蔽ひて、二階も下階も皆戸締めの闇。われはこの大なる室に唯一人、赤銅緣の古風なる火鉢に向ひて、いかにさまゞなる空想に耽りたりけん。手帳に書きつけし歌の一二首、殊更に調の新派らしきを愛でゝ、低聲に二度三度打誦したりしが、それにもいつか倦みて、起ちて障子を引明れば、冬青、ゆづり葉などの常磐樹のさびしき彼方、抵き白壁の塀は土佐派の畫にも見るらんやうに家屋を取り卷きて、其の崩塢の間に白く淸き梅花の滿開。

婢は肴を二種三種、お寂しう御座りませうとて、其前に坐りぬ。頰紅に、眉淸く、年の頃、二十三四とも見ゆる十人並のやさ姿、言葉は誰が聞きても著るき京訛。

わが京都より來りしことを語りしに、

『京？　お懐かしうおますわナ。私、行きまほと思つても、暇が無うて行かれやしまへんがナ。』

『京都は寒いね。』

『山には仰山雪がありますさかい、何うしたかつて寒うおすえナ。』

『それでも此處よりは好いかね。』

『それァ貴郎はん、どれほど好いかつて、それは仰山面白いことがおますえ。』

『何時から此方に來てるの？』

『もう二年になりますがナ。』

『幾度も歸つた事はあるんだらう。』

『唯、一遍歸つたことがおした。』

『京は何處？』

『吉田だすが？』

いかに彩なき對話ぞや。この寂しき日ならずば、この寒き日ならずば、更に面白き興も湧き出づべきものを。かくてわれは唯麥酒を啜り、婢は久しき間を默してぞ坐れる。

稍醉へる身を机に凭せて、思ふともなく思へる胸に、ゆくりなく、歌。『一人してさびしき酒は醉を成さず垣根の梅の唯白くして』續きて成りしは『さびしさの旅よ夕よかくて世は千とせ百とせ束の間にして』の一首。

此歌と共に烈しく胸を衝きて起れるは、奈良の古都に對するわが思ひなりき。千二百餘年、その悠久なる時の力に埋れて、再び蘇生せし此の奈良の都の意味深さよ。其寺、其青銅像、其壁畫、其堂塔、――よし、われ、今より遊ばむ。

かくて車は命ぜられつ。

二

俥來りし時、細雨。

幌懸けんと言ふを强ひてとゞめて、われは横しぶきの雨に衣の濡るゝをも厭はず、雲低う垂れたる街を往昔の三條大路に下りぬ。顧れば春日山の翠微に竪縞の雨白く、興福寺の塔は半ば雲に包まれて、山城、河内の連山の山際のみ稍明るく見え渡りぬ。下り坂の路を行く車は滑かに、時の間に停車場を過ぎ盡せば、忽ち前に開かれたる平城都の遺趾。

遺趾と言へども、田のみ、村のみ、橋のみ、小流のみ。曾て聞きぬ、明治の初、佛寺の銅像、皆荒廢に委したりし時、かの藥師寺たる光明皇后の歌を彫刻したる石碑は、實に佐保川の石橋たりきと。又聞く、諸寺の佛像は四肢壞敗して、人の拾ひ去るに任せたりしも、しかも敢てこれを拾ひ去らんとするものなかりきと。銀鞍白馬の公子既に去りて、帝王の氣北に移り、荒廢また荒廢、かくて過ぎ去りしや、頃刻、千二百年の月日。

田野遠く開けて、横しぶきに頰に當る雨いと冷たし。一條、二條と流れたる小流、その上にはさざれ波綾を織りて、石橋を輾る車の音高く、鼠色の雲の絶間に、或は其肩、其頭、其脚を其手を顯はしたる山々の連亙。都跡村の人家は黑く明かに、さながらレリーフを見たるに似たり。

都跡村に入る頃、雨は稍止みて、其微かなること烟のごとし。春の初とて、風さすがに寒く、外套の襟を立てゝも、猶胴震を禁ずること能はざりき。都跡村を過ぎて、左へと折れつ。

先づ訪ふや、唐招提寺。

兩側は田、ところ〴〵にたゝへたる池水は碧く濁りて、畔には早くも萠え出でし若菜の數々。不圖、わが車のがたゞ〴〵と進む前に、風情ある松林靡きて、奥に見ゆるは、白堊の低き塀、梅花の一株二株白う爛咲せる、坐ろにおのが心を惹きぬ。

此處は唐招提寺の裏門なれば、こゝより音信れ給へ、車は表門の方へ廻し置き候はむにとて、車夫は空車を田圃の路へと曳き行きぬ。われは靜かに其の松林、梢を渡る風の微かなる音を聞くより、わが心はあやしうなりぬ。

踏むは千二百餘年の古き土、殘れるは千二百餘年の殿堂。此の長き間には、幾許の人は生れ且死し、幾許の事業は起り且亡び、幾許の驕奢、幾許の荒廢、歷史は數百の大册を重ねて猶その外形を傳ふるに過ぎざるに、この靜寂なる境内、この沈默せる殿堂は、世にさる幾多の事變、幾多の悲劇ありたりとは夢にも知らぬものゝ如くに、獨りさびしく今日に殘りて立つ。

沈默――さなり、音も香もなきこの沈默の中に、百年、千年、萬年はいつしか陷落し去りて、沈默は遂に依然たる沈默、寂寞は遂に依然たる寂寞、朽ちざるは唯其影、蒼白きさびしき其影のみ。

前の千餘年、歷史を辿らんには、容易に盡きず、後の千餘年、想像を馳するも、猶餘りあり。されどわがかく一人立てる一刹那、この刹那の影の裏には、千年、二千年、忽ちにして沒し去る。

頭腦に流るゝ思想の怒潮、寂寞の影の永劫の悲愁を齎らし來るに誘はれて、われは頭を低れつつ、低き白堊の塀に添ひて、ぐるりと繞れば、三面僧房の殘れるは唯是れのみと言へる舍利殿、禮殿の長き古き建物は先づ目に入りて、斜に掠むる糸のごとき細雨。入口とも覺しき大障子の紙は黑

みて、中央にしかと下されたる大なる鍵金、近寄りて音信へど、答なく、障子を開くに由なし。

われは少時立盡しつ。

されどかくしてあらんも詮なければ、猶ほ彼方此方の扉を叩き、其處此處の障子を音信ひ、遂に講堂の前に至りたれば、如何にせん境内一人の影だに無し。

金堂の前に、講堂を後に、あゝ何等壯嚴たる光景ぞや。圓柱、組廂、仰げば瓦甍は千年の風雨に濕ひて、兩端に高く揭げたる鴟尾の影。われは今は案内請はんの念も失せ果てゝ、講堂の前に佇立みつゝ、獨り今古銷沈のことを思ひぬ。

兩端の鴟尾の影、これやがて蒼白き寂寞の影、永劫に過ぎ行きたる沈默の影の象徴にあらずや。其上には、松籟、其上には細雨、否月影白銀のごとく其影を照し、闇には影なきの影瓦甍に落ち

思、低徊、寂寞や。
甍は闇に影落し
山鳩塒に歸り來る

永劫、さびしさの寺の領。

行くなる影や、亂れ糸の
雨の白きを隙とめて、
怒潮、其音、其きほひ、
遂には淋し、はた悲し。

行くなる影や、松の音の
綠葉細き月の影。
落ちし簪をそと拾ふ
少女の額の蒼白めて。

行くなる影や、勾欄の
あゝ組廂、圓柱、

戀に亂れし奈良朝の
あつき涙の一滴。

行くなる影や、帝王の
陵はいつしか苔の花。
驕奢、たかぶり、はた煩悶、
はげし、狂亂、笛、皷。

銀鞍白馬、行く影の
蒼きを知らに、いにしへの
塵の香も消え去りし
古き都の夢の跡。

あゝ行く影や、行く影や、
棟にあけし寂寞の
鴟尾の影さへ地に消えて、
猶ほ行く影や、行く影や。

時はかゝる間にも過行くなる。かくてわれは、暫時其處に佇立みしが、不圖、彼方より歩み來れる一人の若僧。

淺黄の僧衣に、大黒笠を抱きて、靜かに此方に歩み來りしが、われを唯、遊覽者とのみや思ひけむ、其儘、わが前なる路を右なる松原に入らんとしぬ。

われは走りて呼留めつ。

僧と思ひしは、若き尼なりしよ。呼留められて、さと染めたる顔の紅潮、胸なる乳の高きにもそれと著るく、わが問に答ふるも匆々に恥しげに急ぎて彼方に去りぬ。わが胸動かざること能はざりき。この古寺、この松原、この細雨、この若き美しき尼。

三

問ひ得て知りし寺の庫裡、刺を通じて遊覽のことを請へば、茶色の僧衣を著けたる中老僧、大なる鍵を携へ、跛足を曳き、念珠をつまさぐりつゝ、わが前へと立ちぬ。

跛足を曳きたる僧、我は愈々この胸の動くを覺えぬ。其顏には人生の辛酸を嘗め盡したる如き暗き影名殘なく顯はれて、唯打守りてだに、涙自づから溢れ出づべきに、まして一歩毎に曳き去る跛足、この間には一篇悲痛なる小說のあるべきを思ひつゝわれは其後に從ひぬ。

金堂の扉を明けて、さて入らんとするに、先づ鼻を撲ちしは、塵埃の香。これぞ千二百年來の塵の香と思へば、胸は更に深く震ひぬ。中に入れば、がらんとしたる土間、壇には、同じく久しき年月を閱みしたる佛像を据ゑて、晝も小暗き光線の波動。仰げば、修理したる天井に往昔の彫刻の鑿の香殘りて、僧の語る聲低けれど高く堂内に震ひ渡りぬ。あはれ沈默や、寂寞や、悲哀や。

僧は佛像の前に立つ毎に念珠をつまさぐりて、長き祈禱。

時の力の加はりたるが爲めか、佛の力のかくまでわれを動かしたることは未だ曾てあらざりき。われはこの僧の一歩毎に跛足曳きつゝ歩み行く後に從ひて、無限の崇高の情と無限の崇拜の念との潮のごとく簇り來るを禁め得ざりき。あらゆる世の羈絆を脫し、あらゆる悲喜の情を捨てゝ、この僧のごとく一人此寺に遁れたらば、如何。この今し胸に震へる高く淸く美しき情を保ちて、精進潔

齋なる身となれたらば、如何。世にあらば五慾の焰、富貴に憧れ、功名に鬪えて、利那も猶この思ひを起すこと能はざるを、今、皆是を捨てゝ此寺に遁れたらば、如何。

されど今の我、如何にして遁れ得む。

かく心中に叫びし我は、無限の悲涙の溢るゝばかり胸に漲り渡るを覺えぬ。

羨ましや、僧、羨ましや、跛足の僧。

伯耳義の若き詩人の群は、今、歐洲大陸に於ける詩の高調を歌へり。其一人、ジョルジ、ロオデンバハは、伯耳義の廢郡ブルージの詩人として聲名あり。其著 "Bruges la Morte" は形は小說なれど、想は全く詩なり。其廢都の古の香氣にあくがれたる一人の空想家は其主人公なり。渠、其愛妻を喪ひて、追慕哀憐の情に堪へず、世を捨て功名を捨てゝ、其の廢都の中に遁れしが、居常其亡妻を思ふの餘、其空想は漸く誇張せられ、人間としての存在に一の異彩を具ふるに至れり。亡妻を追慕する空想家と千餘年來の廢都のかをりと、何ぞその映對の妙なるや、何ぞ其の詩調の斬新にして象徵の美に富めるや。かくて渠はゆくりなく其廢都の市街に、其亡妻の面影を見たり。其髮、其顏、其姿、一つとして亡妻に髣髴たらざるなし。されど哀哉、そは其形のみ似て其心は全く異れる若き女優なりき。しかもこの形に憧れし渠は、いかで其心を尋ぬるの暇を有すべきぞ、忽

ちにして戀の深淵に投ぜられたり。されど其女優はこのあはれむべき空想家にいかなる悲劇を與へたりしぞ。一度身を任せて、遂に彼女は渠に精神上の死を命ぜり。ロオデンバハの詩才は此の以後を敍するに於て、實に其の高調に達せり。曰く精神上の死、これ何者ぞ。渠は此時より全く廢都の土の香と相伴ふことを得るに至りぬ、と。

われ、今、この物語をこの奈良の古都の一寺觀の裡に想ひ出しぬ。こは、餘りに空想なりや。されどこは、事實なり、絶東の孤客の胸憶に響きし意味深き事實なり。

僧はわが胸にかくさまぐ〳〵の思ひの往來するを夢にも知らず、寂として、われを彼方此方と伴ひめぐりぬ。講堂、舍利殿、禮殿、一としてわが思ひを繫がざるなし。

三十分の後、われは遂に僧に別れて、唐招提寺を去りぬ。

寺門の前に、わが俥、車夫はわが遊覽のあまりに長きに倦んじて、俥に凭りつゝ、頻りに講談の書を讀み居たりき。かくて俥は藥師寺にと向ひぬ。

雨は小降になりたれど、猶歇まず、打向う山には、鼠色灰色の雲幕のごとく蔽ひかゝりて、風の一雲ごとに、晴れてはかゝり、かゝりては晴るゝさまいと面白し。一道の直なる路、ところどころ疎らに點綴せられたる茅葺の人家、蕭條たる籬落の間を少時がほど行けば、前には杉樹の森疎らに

天を攢して、其間より見ゆる三層の塔。

これ卽ち藥師寺の塔なり。

藥師寺の塔は、奈良古建築の最も群を拔きたるものにして、其形の奇なる、其組物の複雜を極めたる、他に多く其比を見ずとぞ言ふなる。ことに、其水烟に、天人飛揚の圖を刻したる、當時のすぐれたる工藝を窺ふに足るとかや。其古塔、今わが前に、わが駛れる車の前に、空は灰色、杉樹は暗黑色、五輪の尖端はその上に聳えて、見よ、其處には、鳩の群。

先づ、事務所に行きて、遊覽案内のことを托す。直ちにわが前に立ちしは、年の頃十八九と覺しき眉目秀麗なる美僧、手にしたる番傘には、西の京藥師寺の字を書せり。細雨蕭々たる間をたどりて、直ちに寺に達し、先づ金堂を見る。

藥師寺は天武天皇の八年、皇后の病を祈らんが爲めに建設せられ、素と高市郡にありしを、元明遷都の時、卽ち養老二年を以て今の地位に移されたるもの、其堂は數回舞馬の災に逢ひて全く當年の面影を傳へざれども、金堂に安置せられたる藥師三尊の像は、天智式の有名なる銅像にして、歐洲の有名なる古都に於ても、未だかくの如くすぐれたるものを有せずと言へり。見ずや、金堂を入りて正面、光線の薄く透りたる暗色の中に、更に黑く澤かにかゞやきわたりたる千二百年來の古

佛像。

僧は語りぬ。

『此像は持統天皇の十一年に開眼供養あらせられましたもの、今日まで千二百何年と申す長い月日を、火災にも五度ほど御逢になつた、それにも拘らずこのつやゝかさ、――殊に、今日は御艶が宜しい。』

色の澤かなる所以を問ひしに、

『雨の降り來たる時は、いつもお艶が宜しいので、平日では、とてもかういふ色を御覽になることは出來ません。』

まこと美しき銅像の光澤、殆ど露の滴り落つるかとばかり、かくては雨も嬉しからずや。

像の高さ九尺、須彌壇の上に立ち、今まさに法を說かんとするの形、右は袒ぎ、肩頭僅かに衣を纏ひ、肩背各々圓光を有し、更に全身を掩へる光焰背を備ふ。臺座は長三丈三尺、廣一尺六寸、高一尺八寸、大理石にして、養老年間百濟より貢獻したるところと稱す。ことに注意して見るべきは、この臺座の周圍に鏤刻せる醜惡人形にして、其傳來起源に關しては、學者間に未だ定說なしと雖も、其奇拔なる意匠にはよく新時代の煩悶苦痛をやどしたるを覺ゆ。此像、創立當時にありては、全身鍍金せられて、金銅佛なること諸記錄に明かなれど、年久しく經たるが爲め、鍍金は殆ど全く剝落して、漆の如き見事なる黑色を呈せるぞ更に嬉しき。且、鑄法の殊絕なるは殆ど他に見るべからざる精妙の域に達し、端麗宏壯なる佛容は、眞に間然すべきもの無きを見る。

脇士日光月光の立像また鏤刻の妙を極めたり。

嘆賞多時、去つて東院堂に趣く。中に、聖觀音立像一基あり。此像は閻浮檀金と稱すれども、實は鍍金銅像にして、蓮華臺の上に立ち、臺を合せて長七尺養老年間百濟國より貢獻せりと傳ふれども、恐らくは天平中期の製作ならんと言へり。寶珠の莊嚴、衣文の優麗、纖穠に流れず、粗硬に陷らず、豐肌圓滿、體相具に備れり。美術家はいふ、これ、天平期彫刻の最高潮を標示せる者、と。

堂を出づれば、東塔高く前に聳え、轉た人をして當年寺觀の盛なるを追想せしむ。塔は三層にして、裳階を有し、其形頗る古雅、水烟の尖頭、折から一帶の雲の低く舞ふを見たり。

四

これより俥を旋す。

都跡村を過ぎて、地稍高き田圃の間を行くに、暗雲低く春日、高圓の諸山を蔽ひ、興福寺の塔影

は半ば其裡に掩はれんとしつ。奈良の市街は往昔の平城都趾なる廣濶なる田圃を隔てゝ、瓦甍白堊、描くがごとく、雨は濃淡の竪縞織り出して、顧れば山城河内の連山は既に全く雲霧の海。

時計を見るに、早四時、西大寺、秋篠寺を歴訪せんには、既に遅し。止むなく、平城宮趾を訪ひて、直ちに旅亭に歸らんと決しぬ。

一條大路の横貫するところ、蕭疎たる茅茨、炊烟の迷離たるを見る。路、窮りて三叉を爲し、一は左して西大寺に至り、一は斜に左して秋篠寺に至る。他は卽ち一條大路なり。

車夫、大極殿趾の何處なるを知らず、又何なるを知らず。止むなく、幌を斜にして、里人に問へば、曰く、此路を驀直に行きませ、二三町にして、一木標の路傍に立てるを見るならん、と。これに從ひて行くに、果して一箇の木標あり。

大極殿趾は是よりと指の徵號。

前は一面の田畠、右に偏りて、楢の空林あり。蕭疎たる落葉は折からの風に亂れて、荒涼たる風景、また比すべきものあらず。路細くして、俥を遣るべからざるに、止むなく徒歩にしてこれに赴く。

田徑の間を辿ること、一二町、前に、一大木柱の立てるを認む。これに赴かんとするに路なし。

右支左吾、或は田の畔を渡り、或は麥の芽青き畠を越え、或は凹みたる草叢を分け、或は荆棘深き間を拔けて、漸くに達せしは、稍小高き隆起地。

門柱には記して曰く、大極殿趾。

見よ、何等廣濶たる風景ぞや。南は遠く郡山に至り、東は奈良市一帶の地に接し、西は山城河内の山脈に連り、方二里餘の地は、これ所謂往昔の平城都にして、わが今立てる地こそ卽ち歴代の帝王が南面して國政を聞きしところ、其左右には小殿堂の跡列を爲して相接し、龍尾道の一路逶蛇として、今猶これを指點することを得るにあらずや。

わが心また動きぬ。

例の空想に心を奪はれて、かくてわれは幾時をか此處に立盡しけむ。不圖見れば、四山の雲は既に舞ひて、都跡村あたりは恰も夢中に見たるがごとき景。雨は強く烈しく、わがかざせる蝙蝠傘よりも點滴絶間なく落つるに心付き、車夫は？と街道を打見やれば、往來の人絶えし蕭條たる田舍道に、幌を張りてさびしげに置かれたる車一輛。

雨と泥濘とを犯しつゝ、辛うじて街道に戻れば、車夫は何處に行きしか、影だに見えず。聲を擧げて呼べども答なし。われは困じ果てゝ、少時路傍に佇立みたれど、雨は愈々烈しくなりて、到底

かくてあるべきにあらねば、詮なく、幌の中に入りて、車夫の歸り來るを待ちぬ。

車夫は十分程經て歸り來りぬ。

如何にせし？　と問へば、『旦那が餘り長く立つて居らしつて、容易に御歸りにもなり相でありませんでしたから、鳥渡、近所に行つて、一服やつて來ました。』といふ。『僕も、先程戻つて來て、呼んでも呼んでも來ぬので、閉口して居たところだ。』と言へば、それは何うもお氣の毒でしたと、俥を曳き出しぬ。

法華寺は一條大路を少しく右に入りたるところにあり。其國寶十一面觀音像は、天平期彫刻の最高潮を表示したるものとして、優に一覽に値せり。海龍王寺には、西大寺五層塔の模型あり、又、弘仁期の建築を代表せるもの〻一として稱せらる。

かくて旅館に歸りしは、薄暮なりき。

* * *

夜、刺を通じたるものあり。座にこれを延くに、年齢六十餘、顏丸く、體肥えて、質朴なる田舍漢のさまは、名殘なく其の熊度の上に見えぬ。

渠は言ふ、僕は是れ此地の農にして、もと植木を業とせるもの、目に一丁字を解せずと雖も、

頃日、大極殿趾の全く荒廢に委せるを慨き、數年の後を期して、以て清洒なる記念物を建てんと發起せる者、請ふ、君、これを贊せよ、と。

渠は又語りて曰く、『大極殿趾の今日まで依然たる光景を存したるは、實に天佑と稱すべきものあり。維新前は、其地は單に大國の芝として傳へられ、里人の無學なる、素より故都の趾、大極殿の趾なりしなどとは夢にも知るものなく、一時は馬捨場として、不淨なるもの〻限りを捨てたることさへあり。否、其芝地を開掘せんとせしものも尠からざりしと雖も、或は夢の告示あり、或は大地堅牢にして鋤を入る〻こと能はざる等、種々なる不可思議なること多くして、以て今日に其遺趾を傳ふることを得たり。今、この聖代に逢ふ、其の遺趾を猶ほ湮沒の下に置くは、僕のつねに遺憾とせる處、これ、僕が身の卑賤なるをも顧みず、この擧を敢てせし所以。請ふ、君、これを諒せよ。』

一時間にして其人は去りぬ。雨は愈々烈しく、風またこれに加はりて、緣頭より落つる點滴瀧のごとし。窓を押せば、夜黑く、風寒うして、寂寞は更に一層の寂寞を增せり。かくてわれは一人奈良の古都を夢みつ〻、いつかさびしき睡りに入りぬ。

山づたひ

一

碧濃かなる空は連亙せる山の起伏を印して、谷毎に村あり、村毎に白堊の土藏あり、溪流は山の峽より出でゝ、流るゝ末は谷に棚引きわたれる白雲の幾重の彼方か。

峰の紅葉は、今を韓紅、夕日を帶びたる谷に逢へば、其眺は殊に美しく、をり〳〵其谷際を薪こる翁ぞさびしげに過ぎ行く。あゝこの丘陵の幾重を越えて、峠、峠の茶屋、荒れたる古驛、さびたる村落、幾度か思ひはかの自然の彩ある姿にあくがれて人の世に遂にとゞまらぬを嘆きたりけんよ。あるはまたさびしき旅館の一室に、眠られぬ夜を幾度か枕擡げて、遠く微かに山巓を渡り行く木枯の音に耳を傾けたりけむよ。かくて三河の山奥に彷徨の旅幾日、遂に志しつる山間の町は近づきぬ。

其山間の町は、人口も少く、家業も衰へたれど、唯聞ゆるは、處にもすぐれて大なる醫師の館、其主人は曾て都に出でゝすぐれたる學の道をも究め、田舍に埋るゝは惜しゝと人にも言はれたるを、美しき故郷人の情忘じ難しとて、歸りて此處に病院の主、其鄙に稀れなるペンキ塗の西洋造は、そぞろ田舍に住める民の目を駭かしたれど、今はそれも年月と共に古りて、彩あるにほひも消え、なにがしの醫院と檜の大板に記されたる字も、幾年の風雨に微けく、あるじの君も早く數莖の霜を其頭に戴き給ひぬ。

その愛娘、名を妙と呼びて、今年二十の美しの姿、當世流の廂髪はふくやかに、眉の黛、眼のかがやき、緊りたる口付可愛ゆく、態度品ありて操行正しきに、東京は第一の女子大學、其の寮の中にもすぐれて名高き美しき光なりしを、いかなる神に妬まれけむ、すぐる年の秋より紅なる頰の色漸く褪せて、吐く長息の數繁く、夕暮悲しの雲の色、かくて肺やめる人らしう、病を故郷の山に養ふの身となりしこそあはれなれ。

身は故ありて少女を識りぬ。この旅の途すがら、かくてぞそのつれ〴〵を慰めばやとて、遙々と此の山傳ひ——時雨や、紅葉や、木枯や、はた溪流や。

二

日の薄暮、身は其町の見ゆると言ふなるとある山の絶壁に立ちぬ。しかも其町に達せんには、曲りくねれる九十曲折、猶一時間も歩まねばならじとなり。前なる大なる長き谷は早暮れて、連る山際にのみ明るき夕日の光、見よや、かの山陰の白堊の暮れ殘りたる彼方小高き丘の上に一棟の大な

る洋館こそあれ、其二階の縁は長く、今し洋燈手にせる看護婦の一歩一歩歩み行く影も見ゆると案内したる男は指しぬ。なつかしや其家、其處にはわが病める少女さびしく住みて、別離の記念にとて取らせしかの國の小説をや繙ける、あるは暖かき父母の膝下、靜かに編物の針をや運ばせたる。思ひ出づれば、先つ年の春、英語習うとてわが家に日毎に來りしことありたりき。われは、憧憬の思ひに堪へ得で、かの國の詩の物語いくつか聞かせしを、幼き心にもあはれがりて、其のかゞやける眼には眞珠に似たる涙をこそ綴りたりしか……かく思ふ間に、日は落ちて、丘の上の病院には房毎に洋燈の光照り渡りぬ。

山は皆暮れぬ。

三

少女は如何に喜びけむ。

われは多くを語らざりき。慰めんと思ひし言葉も其半ば出でざりき。父母の暖かき膝下にありて何一つ不足なるはなけれど、病は愈々肺と定りたりとなり。この美しき姿、このやさしき胸は、世の中とは永久に相觸れず、さながら天使の時ありて、其衣の裾を塵の世に示したるが如く、忽ち來りてまた忽ち去らんとはせるなり。

されど少女は無邪氣なりき。かれは、八丈の島の此病を養ふに適へりと聞きて、來ん春はいかにもして其地に渡らんと思へるなり。其島には椿の樹多しと聞く。其花の美しきこそ見まほしけれ。また其島には男女珍らしき風俗ありて、他所より赴けるもの、目には此世ならぬ心地し侍るとか、其さまはいかならん。其おもしろさは如何ならんなどと少女はわれに囁くなり。少女よ其島には波風常に荒れて、語るに友なく、慰むるに人なきを知らざるか。萬里の烟波、くれわたる海を父戀ひし母戀ひしと鳴き渡るかなしき鳥の聲さながら腸を斷つを知らざるか。希臘の若き小説家の筆に成りし一篇の小説、伊太利の海岸、ナポリの港、船の甲板に見し金髪の少女、病める肺を此の南方暖かき地に養ひしに、一夜の航路海荒れて、其船未だベニスに達するに及ばずして果敢くなりし物語を、われ御身に語りたるに、御身は頭を低れて、涙の膝に落つるを知らざりしことありしを忘れたるか。とても治らぬものならば、慈愛ある故郷の母の膝に、もし母世を早うして村の墓地の一隅にあらば其傍にこそ葬られめと思ひて急に歸國の途に就きしならんに……とは其若き作者の想像。

少女よ、御身はそれを思はざるか。

母の慈愛ある膝、故郷の祖先の墓！

われは胸塞りぬ。

四

悲しかりしよ、別離。

三河より遠江に出づるに、波濤のごとき小嶺は谷より谷へと通じて、登りは短く下りは長き丘陵の幾起伏、紅葉の明るき谷を過ぎ、白堊の土藏多き村を經て、其山中に一夜の宿。あくる日も流に沿ひて猶下るに、山嶺丘陵いつしか盡きて、溪流は漸やく平野に落ち、遠き彼方、遠州灘の限りなき波濤の堆積、顧ればわが連日越え來りし山嶺は深紫に染まりて、或は白く、或は鼠色なせる夕雲は漸く其襞多き谷々に蔽ひかゝりぬ。われは此處に立ちて悲しくもまた其少女を思ひぬ。山にありて海を戀へる病める少女を。

香山遊記

一

單調なる汽車の二時間、幌熱せる鐵道馬車の三時間、澁川の驛に著きし時は、加ふるに午餐後れの身の飢、佐鳥屋とか言へる旅亭の田舍料理もそゞろに待たれて、二階の意地惡き三絃も腹にひゞきぬ。

水蔭兄はこの驛に近きし時、四面の山河のすぐれたるを見て、常に想像せしより美しき所、寒水はよき故郷に生れたりなど言ひしが、われ等は都より遙々と來りて、其山口寒水の墓を訪はんとせるなりき。寒水、年二十三四、其文才は刀寧の水のごとく清く、其思想は榛名の山の如く高かりしものを、一朝病の襲ふ所となりて、遂に此の故郷の土と化し去る、悲しからずや。

同行せる高崎前橋の諸文士は、手向くべき花をとて出で行きしが、携へ歸りしは、をりからの菖蒲の紫白、束ねたる線香の紙の赤く青きも眼につくぞ無常なる。案内に立ちし人の後より行くに、澁川の田舍町、吳服屋、荒物屋、足袋屋などの、勾配やゝ高まれる廣き大路の兩側に並びて、行き過ふ人々皆なわれ等一行の姿を見送る。中途より町を横ぎり、裏町淺き路を田圃へと出でゝ、登るや小石多き斜坂の三歩四歩。顧れば風情ある澁川の町は唯是れ眼下、赤城の大裾は東西に曳きて、其麓を北より南へと下る刀寧の一水。遠きは雲、森、丘陵、山、翠嵐、近きは町、こけら葺、半鐘臺、――ふと、咿唔の聲の聞こゆるに心付きて、其方を見れば、麥畑の赤く色づける中に、赤茶色のペンキ塗の二階建の洋館、これぞ故人が幼きより通ひし小學校と聞くに、先づ胸騷ぎぬ。

故人の家はそれより次第に登り行く田圃の彼方、山と山との嶮に當りて、二三、日に榮ゆる白堊の光、墓は其の右なる黑き森こそそれ！　と聞くにつけて、わが思ひ愈々亂れつ。かれが年稚く、この坂路を同じ小兒等と戯れつゝ、小學校に通ひしさまなども鮮かに眼に映るを覺えぬ。

猶登るや細徑の幾うねり。暑き日に、手向の菖蒲の葉は垂れ、花はやつれて、われ等も唯喘ぎ〳〵村に著けば、家毎の軒、桑の空枝高く積まれて、清き流に臨みつゝ、養蠶の後の筵洗ふ若き老いたる女の幾群。それを過ぎ盡して遂に達せしは、故人の家、廂高く、檐長く、農家の庭には美しき草花もなくて、徒に白き栗の花、馬小屋、物置小屋、納屋――故人の住めりきといふ室には、古き天神机置れて、床の間には、故人の肖像にことゞしき漢文を添へたる懸軸、田舍の畫師の技拙くて、更に似ぬ其肖像のうら悲しきや。

兄なる人は三十五六の短軀、田舍人の情篤く、坐蒲團に砂糖水、古びたる團扇を添へて、少時は憩ひ給へと言ひたれど、われ等は先づ墓へと、故人の眠れる墓こそは最もしたはしきわれ等が休憩所。

家を出で、垣に添ひて、ひろ〳〵と打渡す榛名の連峰。朝に夕に、此の翠微を仰ぎ、この奇峰に對し、思を馳せ想を遣りたるらんと思へば、今更に故人の面影偲ばれて、胸には萬斛の暗涙ぞ溢れたる。

二

小笹垣、麥畑、裏には墓地の暗樹の繁茂、その奥なる小家を指して、こゝこそ寒水が最期の呼吸を引取りたるところと人々語りぬ。入りて見るに、藁、秣などの亂れ散たる傍に稍々清き四疊半の一室。廂低くして月影の到らぬを嘆く勿れ、故郷に父あり、母あり、兄あり、またこの平和なる家屋あり、此處に穩かに眠り得し渠は幸ならずや。

人は語る、『私の來るのを待つて居て、私が來ると、非常に喜んで、もう死んでも遺憾が無いと言つた。長い間の病氣でしたから、顏も身體も瘦れて、もう見る影が無かつたですが、それでも莞爾と笑つて、私の手を取つたです。其夜遂々臨終、母樣が非常に力を落して、これも百日ほど經つて歿くなつたですが。』

『母樣も……。』

水蔭兄は甚しく胸を撲たれたる如し。

『實に其落膽と言つたら、見るに忍びんでしたからナ。』

と其人は語りぬ。

われ等の胸には、今暗き悲哀、暗き死の影、詳しく問はむ力もなくて、唯默してぞ歩み行く。

墓は唯一二歩。垣に添ひし路は少し下りて曲りつ。斜坂の一角、小高き十五六坪の地、古杉樹畫も小暗く茂りて、永久に乾かぬ墓の露。それに隣れるは、疎なる楢林、其の隙間を透して、明かなる野の光流るゝごとく漲り來るに、こゝは是れとはの闇、とはの愁、とはの悲哀。

生年二十三歳と記したる一箇の墓標、其前に線香を點し、花を手向け、あたりを清く掃ひたるが、水蔭兄は遙々携へ來りし一箇の繪畫——故人の友山中古洞が描けるを——其前に展げ、さながら生ける人にもの云ふがごとく、『それ、これは山中君が君を喜ばせやうと思つて描いて呉れたのだ。見えるだらう、嬉しいだらう……。』と、二度三度これを振り動かし、

『よく見なさい。』

われ等は其前に、其後に、或は其附近に直立して、沈默して居たりしが、この一場の烈しき感情に接するや、いづれも胸の迫りたるは、其態度に著るく、一種狀すべからざる壯厳の情は、今しもこの狹き一帶の地に充ちぬ。われは暗涙を嚥み下して下唇を嚙みつ。

流星のごとく胸に上り來れるは、ツルゲネーフの大作『新生』其主人公ネズタノフのことは直ちに思ひに浮びぬ。寒水、若しネズタノフの如くならば如何、アイデアリストの勇將にして、其思ひは火、其情は熱、胸には滿し難き希望と理想とを抱きて、しかも其理想、其戀、其希望、——一度實際に觸るゝや氷の如く解け、水の如く流れ、遂に敗れて故郷に死したるならば、如何。其墓をめぐりて立てる友は皆な當年のアイデアリストにして、且つ同じく敗れつゝ生存せるものならば、如何。あゝこれ眞に『アイデアリストの敗北』の最後の一章たるにかなはずや。

父、兄、——母は死せり——は、態々東京、高崎より其子の墓參に來れる親しき友を款待さんと自から臥席二三枚、折詰五六箇を運び來り、麥湯を勸めて、以て絶々に其の故人のことを語りぬ。

われは老いたる父の顏を見て胸また塞がりぬ。

記念の爲めに、何か樹を植ゑばやとて、われ等は林の中をあさりしが、不圖、かやの樹の長二尺ほどのものを認めて、これを其墓畔に植うることゝなしぬ。彼一掘、我一掘、あゝ何ぞ其情の篤きや。

はるゝ訪ひて、
思ふどち植ゑし、かやの樹。

まだ二葉、幹低けれど、
蔭深く、しげらん其日。

人はゆき、世は移り去り、
戰、平和、
幾度か變り行くらん。

さいへ、此野、
鳥歌ひ、日また照りて、
やはらぎは、唯つひの世。

思ふ、君、
年若うて、
眉清く、頰くれなゐ、

幾度か墓の細道、

さなり、墓の細道、
林より日の光る、
野べへと出でて、
聲高く歌やうたひし。

あるは、石、
夕日の石に、
思ひ添ひ、愁ひ渡りて、
彩深き雲、絶々に、
暮れ渡る日影をとひし。

あゝ前の日千年、

後の日千年
事多しや、此世。
只靜か、この山、此水、
とはなる君がおくつき所。

三

墓にわかれて、早二時間。夕日に向へる暑き路を、一歩一歩伊香保へとのぼり行きしが、御蔭の松の茶亭、湧き出づる冷たき清水を掬びて、われ等はほつと呼吸を吐きぬ。四近既に皆な山、風の聲、鳥の聲、水の聲、一として都の塵にけがれし思ひを慰めぬものはなきに、山蔭の里、はやかげりて、むさゝびの鳴くも聞ゆる淋しさ、誰か旅情を催さざらむ。

伊香保は榛名山の中腹、東北に開けし眺望は、登るに連れて次第に濶く、赤城の裾を帶のごとく取巻ける刀寧の流、吾妻の一水は西より來りて、赭色なせる長き絶壁は兩水の會湊點なりと、人々語りぬ。正面は小野子、子持の兩翠微、かの雲深き萬山の裡を穿ち、四萬、澤渡、草津にあくがれし昔を思へば、そゞろに其時の偲ばれて、一面に蔽へる鼠色の雲もなつかしや。

御蔭の茶屋に、二人挽の新しき俥一輛、中高帽に洋服姿、こは伊香保に名高き某代議士が滿韓視察を畢へて、其故郷なる青山白水の裡へと歸れるなるが、慌てゝ迎へし茶亭の主人に、何彼と語れる言葉の一語二語、『何うも、一度山に歸つて來ぬ中は、氣が落付かなくつて爲方が無いから、東京は一晩泊つた切りでした。實に、旅と言つても、山の中を出たこともない人間が、今度は俄かに五六千里も遠走りを爲たですからな。』と語る中には、その故郷の山水に向ひての喜悅の情は、其眉目の間に鮮かに顯れ渡りき。夕暮をぐらく、晩鴉の塒に歸るがごと、かの一軒茶亭の立てるあたりまで行けば、里より迎ひに出でたる人の群、後よりこれを望むに、其の高き帽、白き洋服は多き里人の群に取圍まれて、靜かに後より行く空俥、其情景の面白きにかれはそゞろに思ひを撲れぬ。まして其群の中には、われ等の一行を迎ふる青年の群もありて、其篤き情轉た都の人のごとくならざるをや。羨ましや、美しき故郷もてる人、平和なる故郷人に迎へらるゝ人、この白雲青山の裡にのどけき朝夕を送る人——。

伊香保は香雲館、其二階の一室よりは開けたる大景を唯一目。浴みせし後の咽喉の渴を麥酒に醫し、それとなく危欄の一角、傍に据ゑられたる椅子に凭れば、夕暮の谷は白雲に蔽はれて、さながらに海のごとく、吾妻の峯巒は絶海の一島嶼かとばかり、と見る中に、はやき雲の脚は忽ち其山の

影をも隱して、遠く聞ゆる水聲は、そも何處の瀑、何處の溪。見よ、雲は今、わが一室に。

四

翌朝、奥座敷を通り懸れば、黑檀の机に、男蝶雌蝶の美しき銚子、聞けばこの旅館の若主人、今日嫁の君を娶るとて、其準備に忙しきよし。昨夜、來りし袴著けたる若者はそれぞなどゝ言ふ中、改めて今日の結婚のことを告げ、祝の歌俳諧書きて給はれとて、色紙短册など多く持ち出しぬ。書きしは何、歌ひしは何、祝ひしは何？

あゝ友の墳墓、歸山の旅客、若者の結婚、意味多しやこの旅、この生。

觀戰記

北大崗寨附近に於て久しく鋭氣を養ひつゝありしわが大軍の次第に北進を始めたる光景を想像し給へ。一たび動き始むれば、野も山も唯それ一押、敵兵いかに嶮を扼するとも、いかに堅壘に據るとも、鋭刀の相觸るゝがごとく、疾風の枯葉を捲くがごとく、忽ち一掃し盡し去るに於て何等の手數をも要することなし。蓋し軍容の盛なる、千古これに比すべきものあるを見ざるべし。

聞く所に據れば、二十一日わが軍熊岳城占領の後、敵は熊岳城以北一二里の處を前哨線と爲し沙崗臺より蓋平、蓋平よりその背後なる重要なる高地に據りて以てわれを拒がんとするものゝごとく、其兵力は充分に明かならざれども得利寺の敗兵に二三萬を加へたりとの說、最も信に近きを覺ゆ。わが軍の陣形は得利寺以來、唯新に加はりし第六師團を、中央なる第三師團と左翼なる第四師團との間に加へたるのみにて、全形に於ては更に少しも變ずることなし。猶ほ地形を概說すれば、海岸に添へる一路、それに相添ひて鐵道と前後左右せる蓋平街道、其東には連山波濤のごとく、中に纔かに一間道の通ずるものあり。而して此等の三道は皆わが兵の因つて以て前進するところにして、司令部はこれ等三道の大軍を指揮しつゝ、以てその中央道路より少しく右に偏したる山間の路を傳へり。北大崗寨を發せしは七月五日の午前五時。やゝ曇りたる空には、朝の風涼しく衣を襲ひて、細き溪流を幾度となく徒涉しつゝ進み行く心地、實に譬ふべくもあらず。

われ等遼島の地を跋涉する、既に四五十里。其間常に山に兀山多く、野に樹蔭乏しく、村舍に荒村のみなるを苦みしが、得利寺附近より山水次第に特色に發揮し來り、柳の繁れるところ、溪流の流るゝところ、奇山怪巖の鱗れるところ、座ろに陣中無聊の情を慰藉すること多し。今、縫ひつつ進み行く山間、あゝ何ぞ其の詩趣に富める。

楊柳の幾簇は楊柳の幾簇と相連りて、其絶えたる處に細き溪流の銀蛇を爲して流るゝを見、その銀蛇の蟠れるところ、更に一嶺は一嶺を開き、一村は一村を加へつゝ、次第に北へ北へと進み行けるなり。而して村毎に、わが砲車、彈藥車は相重りて、をり〳〵其間を縫ひて、野戰隊の列を正して進行せるを見る。かくてわれ等は幾度山を繞り溪を渉りたりけむ。路は漸く兩山の相開けたる處に出でゝ、前に幅四五十間ばかりの溪流の、南より北へ、東より北へと流るゝを認め、更に其流に添ひて、東清鐵道の線路の蜿蜒として北を指せるを見たり。駱駝嶺に至りて、左方の山は既に全く盡き、右方の山脈また稍々遠く、前には熊岳城一帶の平野を展開し得たり。此間、われ等は線路に於て、敵の遺棄せるトロコ一臺を得、これに荷物を滿載し、自からも亦其上に乘りて清國苦力三名をしてこれを推さしむ。鐵路滑かにして車の進むこと早く、一時間餘にして三里餘を駛り、忽ち達子營の停車場に達す。停車場に入れば、破壞至らざる處なく、周圍の土塀には敵の據りて以てわれに對せし跡明かに殘れり。

達子營の村に入れば、土人清水を汲み來りてわれ等を犒ひ迎ふ。言ふ、昨、熊岳城北方に於て日本兵と俄兵との戰鬪あり。日本兵始めに退き、次いでまた俄兵を逐へりと得々として語る。蓋し、騎兵の斥候戰なるべし。

これより正白旗に至るの路を東北へ傳へば、正午の日影は赫々として、東方の山脈には夏の晴れたる日ならでは見るも得ぬ美しき深紫の色かゞやきて、上に羊毛のごとき純白の雲の靡きわたれる、まことに新派の畫ける洋畫に髣髴たるを覺ゆ。

自然の示せるこの美しき色彩を賞しつゝ、漸く熊岳河の流るゝ赤く燒けたる砂原へと下り行きしが、ふと其河原に二三の小屋の建てられたるを認め、何心なく行きて見れば、何等の愉快！　其處には玲瓏として玉の如き溫泉溢るゝばかり流れ出でたり。

この炎天にこの溫泉！

われ等は衣を脫して直にこれに浴しぬ。上陸以來！上陸以來！の語は忽ち一室に滿ち渡りぬ。この上陸以來の一語はわれ等の面白きもの見、旨き物食ひ、面白きこと聞ける時常に發するを例とせるものなるが、しかも入浴に就いて發せしは實にこれを以て嚆矢と爲すなり。金洲の臭き湯は、いかにわれ等をして不快を感ぜしめたりけむ。青泥窪にて浴せしは、やゝ清潔に似たりしかど、猶その湯の少きとあたりの不潔なるとはわれ等に充分なる快味を覺えしめざりき。然るにこの清潔なる浴場、この玲瓏たる自然の靈泉。われらが久しくこれに浴して、敢て去らんともせざりしも、理なきにあらざるべし。

河を渡れば、正白旗の村落あり。

夜、再び河を渡りて、溫泉に行きぬ。夜の河原の光景はまた頗る趣に富めり。暗黑なる夜を透して、處々に焚ける篝火の影盛に、兵士の語り合ふ聲河に響きて凄じく高く聞ゆ。河を渡る者、或は裸蠟燭を携へ、或は民舍徵發の支那提燈を提げ、或は闇に相圖の聲を擧ぐる等その雜踏せること一方ならず、而してこれ等は皆な明日は去らねばならぬかの溫泉の浴を試みんとせるなり。

溫泉室内は雜踏更に雜踏を加へたり。

翌六日、午前五時出發す。

今曉こそはわが前衞必ず敵と衝突するならんと想像せしに、行けども行けども砲聲は聞えず、午前七時といふに、全山岩石を以て成れる歪子山の麓に至りぬ。瞳を凝せば、右方連山の麓より左方海岸に至るまで、わが大軍は陸續として相接し、處々に集れる銃劍の光は美しく日に映じて閃めき渡れり。而してわが司令部は八河岸南方の高地に馬を繫ぎて以て前方の形勢を聞く。

傳騎の走ること櫛の齒を挽くがごとし。

午後二時に至りて前進の命下る。

前安平といへるにとゞまる。

かくて愈々蓋平攻擊の命令の下りたるは、七日、其の拂曉午前一時、司令部は村落の北端なる河原に整列して以て出發すべしといふに、われ等も其の數には洩れじと、携帶行糧などの準備に夜を徹し、其の時刻の少し前に、いざとて其河原へ赴きぬ。見れば其處には盛なる篝火夜の暗黑なる空に照りて、其附近に集れる憲兵の馬、副馬、馬卒などの黑き影は闇を透して微かに見ゆ。空には星斗燦爛として豫め今日の我軍の勝利を語るものゝごとく、冷なる夜氣そゞろに衣を襲いて、一種の快感は強くわが胸に簇り渡りぬ。此時、ふと傍なる闇の路を衝きて靴の音陸續として起りぬ。

これ、軍の掩護隊の進めるなり。

少時して篝火の焰の明かに空を焦せる邊に、馬上の人の影陸續として相連り進める微かなる光景を見しが、やがて騎兵、馬、副馬等はこれに續きて、わが軍は遂に遂に蓋平攻擊の途に上りぬ。砂原を行くこと一二町、顧れば捨てし篝火の影猶獨り燃えて、其あたりのみ柳の葉の明かに見え渡りたる、面白し。されどこれも時の間に消えて、軍は夜山の動くがごとく、暗黑なる闇夜を北へ北へと進み行けり。

夜の進軍の光景ばかり勇しく盛なるものはあらざるべし。歩兵は歩兵と相接し、馬は馬と相嘶き、其間を前へ出でんとする砲車、彈藥の列、其度毎にわれ等は路傍に佇立みて、以てこれの過ぎ行く

を待たざるべからず。而して全軍皆枚を啣み、靴の音馬蹄の響の他、寂として一語無し。

今、少しくこゝに地形を記せんに、蓋平に通ずる三路は前既にこれを言ひぬ。而してわれ等の過ぎ行く路は最も嶮峻なる山間にありて、左右皆山嶺、前後皆丘陵。一里にして後安平、猶一里にして、北嶺、而して老爺廟の一村落は直ちに蓋平の平野へと臨めるなり。かくてわれ等は兵と前後して或は進み、或は止りつゝ、二里の間を行くに殆ど三時間餘を費したりしが、北嶺の山脈漸く迫り、蓋州河の一支流の蜿蜒として溪間を縫へるあたりに至りて、ゆくりなく見れば、二十五日の殘月は淋しく前なる山頭に昇りて、その絶々なる光は斜めにわが軍の行進を照し、その光景の面白き、實に名狀すべからざるものあるを覺えぬ。

猶行く里許。

想像し給へ、われ等の行く山峽は愈々迫りて、下には一道の溪流白く、路は溪谷の上數十尺の絶壁を渡り、逶蛇屈曲、重山複水、更に窮まるところを知らざるがごとし。而してこの峽路に當れるわが大軍は、路と言はず溪と言はず、絶壁と言はず、只平押に進み行きて、現に其の一部は山の半腹を縫ひつゝ前進せるをわれは薄明き月の光に見たり。之に加ふるに、この山峽を半にして、黎明の光は早くも東の山隈に靡き渡り、暗紫色なる山の彼方にはオレンジ色の空美しく、

さながら一名畫を展げたる如き趣を爲せるをや。

山峽稍々開けて、夜は全く明けぬ。

『もう始まり相なものだな。』

『もう遣るだらう。』

などの聲處々に聞ゆ。

『何うしたらう、敵は遁げて了つたか知らん。もう始めん譯は無いがナア。』

『遁げたかも知れんよ。左樣でなくつてさへ、得利寺でもう恐氣が附いて居るのに、この大軍が押寄せるのだからナ。』

『それにしても餘り意氣地が無いぢやあないか。二三萬の兵を控へて居て、一發も打たずに退却するは、餘り酷い。』

『丸きり遣らんことは無からう。』

前には、楊柳の村。東の山際は次第にオレンジ色より紅色へと變り行きぬ。空は流るゝごとく深碧にして、山峽のところ〴〵には薄く白き靄さながら沈むがごとく靡き渡りぬ。

不意に砲聲一發！

續きて二發！　三發！

『そら始めた！』

全軍皆な振ひぬ。時に五時二十分。

砲聲陸續として聞ゆる間に俄かに活動し始めたるわが軍の光景はいかに勇ましかりしぞや。歩兵の一箇中隊、二箇中隊は俄に疾走し、彈藥を曳ける馬の列も亦これに續きて走り、前なる村に屯せる兵士の俄かに出發準備を爲せる、木も草も皆北へ北へと向うがごときを覺えぬ。前を見れば、山に添へる路を、わが軍司令部の一行は意氣揚々として進み行けり。

右に二百米の高山あり、それに連りて百米の一支脈を起し、それと相對して、左に二百米ばかりの山聳え立てり。而して老爺廣の一村落は、簇生せる楊樹と三四軒の村家とを以て其間に散在し、路はこれより右方小山の麓を縫ひて、直ちに前に展開せられたる蓋平の平野へと通ぜり。

其右方高地の一角こそわれ等の觀戰地なれ。

その高地の最高地にわれ等の馳登りしは、それより三十分程後の事なりき。見よ、何等の光景の眼には映りたる。下には楊柳と人家とを以て成立てる廣き平野横りて、蓋平城の城壁はこれを掌に指すがごとく、其後には西雙頂山、尖山等の高峯屏障のごとく聳立し、今しも放てる敵の砲

は平野の間に向ひて頻りに破裂せるを認めたり。されど平野一帶の地には朝靄名殘なく沈みわたりて、只ところ〴〵に蓋州河の髣髴、村舍楊柳の幾簇を見るばかり、雙眼鏡を以てしても猶わが歩兵の所在、わが砲兵陣地の所在を認むること能はざりき。されど敵は主力を蓋平背後の諸山に置きたるものゝ如く、その連山の處々に閃めける光は實にその砲の少なからざるを證して餘りあり。此時中央に向ひしわが第六師團は既に蓋平を占領したりと覺しく、其前面に當りて、更に一齊射擊の烈しき音、及びこれに對せる敵の機關砲の凄まじき響を聞けり。

海山方面に向ひしわが左翼はいかにと其方を見渡せば、其方面にも多少の小銃聲は聞えたれど、未だ大に砲戰を交ゆるに至らず。海には海軍もや……と遠く見渡せど、それらしきものは見えず。

十分二十分、砲聲、互に烈しく交換せられたるが、三十分餘にして全く止み、更に小銃の音の盛なるを聞けり。

一時間餘にして平野に沈みし朝靄は次第に消え、高粱畑を越えつゝわが兵の前進せるさま漸く明らかに見え渡りぬ。更に瞳を凝らせば山下左方の村の盡頭とも覺しきあたりに、わが砲兵が三四十門の砲門を敷きつゝ、頻りに敵の據れる山を砲擊し始めたるを認む。否、河の右岸にも亦わが砲兵陣地あるを認め得たり。

かくて各方面より又一しきり打出せる砲は凄じく蓋平の平野に轟き渡り、ことにわが砲はよく敵の據れる山腹に命中破裂し、其度毎に砂烟凄じく高く颺れり。蓋し、敵はその高地に據りて、機關砲を以てわが歩兵の突撃を拒げるなるべし。

されど砲聲の盛なりしは、僅かに二時間餘、七時頃より其響次第に微弱となりて、果ては山隈に簇れる砲烟一つをも留めずなりぬ。而してわが兵は前進また前進、九時頃には既にわが砲兵の蓋州河を徒渉して以て敵の據れる山に迫れるを見たり。

十時頃左翼の砲聲稍々盛なりしも、これもまた約三十分にして罷みたり。

蓋平の敵はわれ等の豫想せるに反し、あまりに頑強なる抵抗を爲さずして、及ぶ限り、其の味方の損傷を被らざることを勉めつゝ、漸次北方に退却せるもの、如し。

午後一時過、曩に河を徒渉せし砲兵旅團の中央部隊は急ぎ蓋平城の右側を通過しつゝ、敵の據れる山を距ること千米突餘の處に達し、激烈なる射撃を開始せり、敵は此時まで猶山上の陣地を捨てず、わが砲兵の陣地を敷かんとする處に向つて、機關砲を擧げて（約十二門）これに猛射し、其勢殆ど面をも向くべからざりしも、一度陣を敷き終りて射撃を始むるや、忽ちその久しく保ちたる西雙頂山の陣地を撤回し、直ちに石門方面に向ひて退却せり。

後に聞く所によれば、此方面に向ひしは熊本兵にして、敵も初は頑強なる抵抗を試み、機關砲のつるべ打には少なからず躊躇したりといふ。されど死傷者は思の外多からず。此方面にても第二十四旅團長の腿部に貫通銃劍の輕傷を被られたる外死傷六十餘名を生じたるのみ。

われ等の觀戰地より前進せしは、午後三時。砲聲既に全く罷んで、西雙頂山方面にも既に敵の隻影を留めざりき。わが兵の先鋒は既に西雙頂山を越えて、海山寨石門等の諸村落を壓し、敵は鐵路に添うて青石嶺舗より大石橋に潰走し去れり。

觀戰地より蓋平に到る一里十六町、其間は廣濶たる平野にして、敵も初は頑強なる抵抗を試み、機關砲りなる高粱畑の間には瞿子畑あり、麻畑あり、而してところ〴〵其葉その莖の靡き伏したるは、此朝、霧に乘じてわが兵の前進せし痕なること明かなり。到る處の村落には、土民の眼を刮してわが軍の進行を觀る者夥しく、其間を一里程行けば、蓋平城の城壁は直ちに眼前に聳えて、蓋州河の流は帶のごとく其の東南部を縈りたり。淺所を三四町の下流にもとめ、徒渉してこれを過ぐ。深きは腰に及び、淺きも猶膝邊を超ゆ。蓋し上陸以來河の最も大なるものなるべし。

河を渉れば、蓋平の南門は既に數町の中にあり。土人の蟻のごとく相集れる不潔なる城外の巷路を經て、路南門の下に至れば第六師團の兵は既に陸續として其間を往來し、砂糖、鷄卵、煙草など

を携へて頻りにこれを賣らんとする土人また踵を接せり。あはれこの附近の不潔さよ。城壁の前、巷の路には汚き埃山のごとく堆を爲し、そをめぐれる溝には黴菌などのさも多かるべしと思はるゝ黑く濁りたる水潴留して、到る處一種異樣の惡臭を放ち、行人をして思はず鼻を掩うて走らしむ。況んや炎日はこれに照りて蒼蠅路頭に遍ねく、土人の臭き臭氣を過ぐる毎に紛々として衣を襲ふに於てをや。

南門外より東大門に至るの間、城壁の上には淸民老を扶け、幼を携へ、陸續として相集り、皆なわが大軍の行進を見たり。

雜踏、雜踏。

否、東門外に至るに及びて、其雜踏は更に加はりぬ。さらぬだに狹き巷にはわが軍隊雲の如く集り、其間を淸民喧しく走り合ひ罵り合ひて、その騷がしき限りなきさへあるに、此雜踏せる彼方には、第六師團野戰病院の設ありて、前方よりこの雜踏を分けつゝ擔ひ來れる擔架の上には今日の戰に傷きたる將校及び兵士の繃帶せるまゝ運び去らるゝを見る。中に、頭部の全く血にまみれたる一名の敵兵、苦しげなる悲鳴を擧げつゝわが擔架に擔がれ行きたるあり。

眞に是れ一幅の活畫。

午後二時、東門外の宿營に就く。

あはれ今日の戰のかく容易くかく早く終らんとは夢にも思ひ懸けざりき。敵は蓋平城の北山に據り、壘を築き、壕を穿ち、頻りに防禦工事を施し、遼陽より、援兵また至り、クロパトキン將軍も南下せりと傳へられたれば、今度こそは少くとも大決戰を見るに至るならんと誰も想像せざるもの無かりしものを。さりとはあまりの脆さ、あまりの弱さ！

言ふ勿れ、通信何ぞ龍頭蛇尾なると。今日の戰も亦是れ龍頭蛇尾。

淹留記

淹留十餘日、事の記すべきなし。今、われ等の生活を語る爲めに、陣中日記の一日を語り來るも亦興なきにあらざるべし。

七月一日、晴。

今日は此地に來りてより、既に十日目なり。此間、われ等は多く雨に降こめられて、一歩も戸外に出づること能はざりき。遼東の雨！　內地にありてはこの雨のいかに佗しく、いかに淋しく、またいかに不潔なるかを想像する能はざるべし。家の周圍には汚き豚小屋、其前にはあらゆる汚れた

るものを投げ棄てたる肥料溜などありて、馬、牛の糞の雨の爲めに家の中庭に溢れ出でたる、その臭氣と濕氣とはまことに堪へ得べしとも思はれず。ことに、清人の家屋は不完全なる土煉瓦を積みて、窓には破れたる紙障子の他、雨を拒ぐべき扉とてもなければ、風を帶びたる雨は容赦なく室内に降り込みて、窓際に置きたる新聞雜誌、寫眞の種板などは皆ひた濡れに濡れ果てつ。曉に見れば、被ぎて寢たる毛布の裾さへ濡れて、窓の紙の大方は破れ果てたるなど、佗しとも佗しき限りなり。住める土民は皆な純たる農夫の、履物被り物などには頓着せず、裸足のまゝ、頭髮のぬるゝまま、この雨を衝きて、野、村へと出て行くなり。前には泥濘の路を隔てゝ食ふべき野菜物の悉く徵發せられたる畑ありて、枯木の枝を手にしたるさゝげ豆、胡瓜、茄子の早、花も咲くべく生長したるものなども交れり。其向うには、俄かに丈高くなりし玉蜀黍の畑青く連りて、その盡きたるところに數株の楊樹、雨は終日烟るがごとく其上に降り懸りぬ。

されど此村は四面皆な美しき翠微に圍まれて、微かながら溪流の行衞も白く、上陸後われ等の宿りし村の中にて最もすぐれたるものゝ一つなり。わが軍晉蘭店を過ぎ、瓦房店を過ぎて、漸く復州附近の地に入るや、地味次第に豐饒に、耕されたる畑、茂りたる林もありて、村落またおのづから趣を爲し、得利寺戰後に一週間ほど滯留せし尖山子の村なども亦頗るわれ等の心を惹きたりき。

されどそれよりも猶すぐれたるは、此村の景なり。われ等の來るや、右に鋸の齒を立てたる如き紫色したる岩山の連山を仰ぎつゝ、丘陵を踰え、溪流を涉り、或は楊柳の綠蔭を穿ち、或は田舍籬落の間を過ぎ、遂に達せしは南大崗寨の邑、夕陽を帶びたる赤き路は騎兵の走りたる後に砂塵を殘しつゝ、丘陵と丘陵との間より、溪流の帶のごとくなる川原砂原を縫ひ、次第に北大崗寨の邑へと達し行けるなり。南大崗寨には、素燒の陶器を燒ける家一二軒、高粱殼は幾ところとなく堆を爲して、家の前には土もて築きたる大いなる竈あり。窺へば、中には火盛に燃えて、清民二三、頻りに瓶類の陶器を燒けるを見たり。

北大崗寨はそれより五六町、人家はをりからの夕陽を帶びて、珍らしからぬ楊柳も、四面の山あるが爲めに、一種狀すべからざるの趣を生じたるを見き。而して、その下には鞍置きたる馬、簇れる馬卒……。

然るに、翌日よりは、雨、雨。

われは降頻る風雨の中より、幾度前に連れる山脈に雲の懸りては晴れ、晴ては懸るさまを望みたりけむ。晴れたらば、其處等の山をも逍遙せむ。近きあたりの本部に行きて、得利寺の戰況をも聞かむなど思ひながら、汚き清民の室内にいかに佗しき長き日を送るたりけむ。佗しかりしよ。其

雨。淋しかりしよ、その晴れざる連日の雨！

ことに、其雨に濡れて立てる哨兵の姿。更に同情すべきは、この雨を衝きて、全身泥濘にまみれつゝ、牛車騾車を鞭ちて、強ひて進ましむる糧食輸送の列。

其の長き雨の晴れしは、昨日。

見よ、われ等の家の四面よりは水蒸氣盛にのぼりて連日濕ひし土の乾くことの早さよ。されど肥料溜の臭氣の一層烈しく人を襲へるには殆ど閉口せざるを得ず。庭にはわれ等が連日の濕氣を乾かさん爲めの毛布、外套、洋服など長く引きたる細引の地につかんほど重り合ひて、肥料溜の前には、門の扉を横へたる上に二三の素燒の甕を並べて、積日の汚れを洗ふ爲めの行水をわれ等は爲すなり。

戸内に入れば、清民特有の大鍋に、湯は盛に沸きて、薄青き烟は暗き四壁へたなびき渡りぬ。この大鍋はわれ等が常に飯煮き、鷄料理するところにして、其の炊事の光景また頗る異彩に富めり。先づ、眼に入るは、水を滿せる大甕にして、其傍には菜をつけたる甕、物を洗ふ爲めの甕など二つ三つ連り合へるを認むべし。卓の上には、支那燒の安茶碗、明けて久しき月日を經たる麥酒の罎、牛肉、福神漬の罐、内地より購め來りしアルミニユウムの椀、鍋等名殘なく置かれて、後の暗黑たる壁には、ナイフ、小刀、水筒等、順序もなく懸けつらねられたり。ことに、人は其上に紫色の瀨戸引の洗面器ありて、其上に白木綿の半は茶色に穢れたるものを覆ひたるを見るべし。これ、われ等が自から炊ぎ、自から煮ける一日の食なり。

所謂御馳走のつくらるゝは、多くは午後にして、四時頃に至れば、或は鷄の毛を拶る者、或は茶を沸かすもの、或は刀を振ひて鷄肉を料理するもの、或は水を汲むもの、或は鼎を折りくべるもの等、其の混雜一方ならざるを見るべし。而して御馳走は、鷄と葱との汁、ささげ、甘藷、馬鈴薯と豚、豚のフライ、さゝげの精進揚等なるが、最も成功したるは、親子飯、鹽鯖の鮨にして、最も不成功なりしは、道明寺干飯と支那アヅキもて作りたるほた餅なりき。

昨日は薄き雲猶山を掩ひて、夕暮の空に星の影いとも稀なりしが、今日は拭ふがごとく晴れて、一點の雲霧をだに留めず、野も山も皆美しき綠の色にかゞやきて、林の中の兵士のテントにも晴れがましき氣は名殘なく滿ち渡りぬ。

正午少し前、なにがし曹長來る。こは今回隊附を命ぜられ、翌朝を以て第一聯隊に赴くが爲め、その別れを告げんとてなり。渠曰く、戰鬪線に出でんことはわが唯一の目的なり。國を出づる時、既に生還を期せず、わが戰死せるを聞かば、必ず一廉の働きを爲して斃れたるを知り給へ、と。其

辭甚だ勇敢にして、中に無限の涙を含めり。われ等は八幡丸船中より共に親しく語り合ひし身、この勇しき門出に一杯の別なからずやとて、麥酒の空罎に昨日買はせ置きたる黄酒を把り、かれが爲め、萬歳を唱ふ。

午後四時——人あり來りて新聞紙縱覽所出來たりと告ぐ。われ等の新聞に渇するや、實に飯よりも甚し。一日の中、新聞の到著を待たざる時なく、内地の事情、わが軍の近況を知らんと欲せば、十日乃至十五日後れる新聞によるの外、他に道あることなし。新しきものありやと問へば、十七日の東京日々新聞ありといふ。十七日！　われ等は十日以後の新聞を見たることなき身の、急ぎ晝寢の眼をこすりつゝ、これに赴く。

新聞縱覽所は野戰郵便局の前にテントを張りて、中に一個の卓を据ゑ、上に諸種の新聞雜誌を載せたり。新聞は二六、中央、日本、都、東京日々等にして、雜誌は六月八日發行の寫眞畫報と五月下旬發行の戰時畫報との二部なり。新聞はいづれも十日十一日にして、只東京日々の綴込の中に十七日十四日の二葉を交へたるのみ。テントの中には兵士陸續として相集り、一葉の新聞を見るにも一方ならざる勞力を要す。

十七日の新聞に由りて漸く明かにしたる運送船沈沒の一伍十什。同じ紙上に、得利寺戰捷の公報あるを見たり。

この一憂一喜の報を得たる東京市内の光景、號外賣の喧しき聲などを想像しつゝ、其の新聞縱覽所を出でしは、それより一時間程後のことなりき。司令部の彼方に連れる石壁を添ひて坂を下れば、前にはおのづから足を停めしむるばかりなる天然の大景横りぬ。何たる色彩ぞ。わが前に當れる大空には、夏ならでは見るを得られぬ簇々たる白き雲靡き渡りて、其の影は尖鋭なる岩山の處處に搖曳し、日の當れる處は白鼠色、影を帶べるあたりは薄黑き暗綠の色を呈し、その色彩の變化に富める實に名狀すべからざるものあるを覺ゆ。否それのみならず　それに連りて低き山壁のごとく聳え、それより平らかなる斜坂を起し、直ちにわが眼下なる綠色の野に及びぬ。

而して其間に兵士の白きテント、糧食運送の騾車牛車、夏服着て立てる哨兵、戰地ならでは見られぬ天然の風景なるべし。

夕暮——

前に三百米突の山あり。それに倚て一大高山聳ゆ。その上よりは海見ゆといふ。海、わがこがれたる海！　その髣髴たる光だに得ばやと思ひて、二三の人を伴ひて登る。柳の下を流るゝ水に馬をあしらひたる畫のごとき村を過ぎて、高粱の二尺以上に及べる畑を横り、急峻削るがごとくなる傾

斜をたどり行く。一歩毎に、われ等のやどれる村は眼下に盡きて、先日來の雨に漲りたる川は山神の解きて流したる帶のごとく、右より左へと柳を穿ち村を貫きて長く流れぬ。三百米突の前山に登れば、四面の山皆な畫くがごとく、夕日の連れる山に閃き渡れる、何の言葉を以てこれを狀せん。かくて前なる高山に至るには、更に下りて一溪を横り、猶それより三四百米突を昇らざるべからず。しかもわれ等は勇を鼓して、遂にその絶巓に上りぬ。

海！

と先に到著せる一人は叫びぬ。

走りて絶巓に至れば、果して！　山嶺波濤の如く相連れる彼方に、大なる赤き日は落ちんとして、ひろ〻と展け渡されたる彼方の平野の末に、深碧染むるばかりなる海！

山にのみ馴れたる我、いかでかこの大海の髣髴に對して心動かざるを得べき。

『蓋平は何方の方角に當つてるやら！』

と一人は不意に問ひぬ。

他の一人は彼方を指して、『丁度あの山の向うあたりになつて居るでせう。敵は熊岳城から二三里の處に居る相ですが、もう追付け始まるでせうナ。』

『もう始まるでせう。』

『それにしても。』と他の一人は言葉を改めて、『蓋平には何時入れるでせうねぇ。』

『さう、もう直きだらう。』

蓋平に入るは何時？　この一語はわれ等一行のみならず、熊岳城を中心として四方七八里の間に集まり居れるわが貔貅數萬の胸に滿ちわたれる大なる希望なり。

かくてわれ等は日影と共に山を下りぬ。

旅より旅

▲信飛奥羽の山の崇高雄大を極めて居るのに引替へ、近畿、中國、北陸あたりの低さ、小さき、あはれさ、何だかかう山に向つて居るやうな心地がせぬ。萬山峡谷の間を辛うじて過ぎて、溪流の磐は早脚底千尋、ゆくりなく汽車の窓から首を出して仰ぐと、谷を壓し、汽車を壓し、人を壓して、巍然たる千古の姿、實に何とも言へない幽遠な感に觸れずには居られぬ。であるのに、近畿中國地方を旅行しては、こんな感を惹き起す處は一つも無い、京都詩人の誇りとする比叡山は高さが八百三十三米、比良峯がそれより少し高くつて、千二百三十米、金剛山が千二百四米、信、飛、

甲の諸高山から比べると、殆ど言ふに足らぬ。

▲從つて、其溪谷と言ひ、其の溪流と言ひ、其の蜿蜒たる連亙のさまと言ひ、あゝ是は！　と立留つて快を叫ぶやうな處は無い。谷といふ谷は開かれ、地といふ地は耕され、煤烟に俗化された市街、塵埃に包まれた山河、自分のやうな山水狂には更に何等の興をも惹かぬ。

▲稍々深邃なのは、大和の南部から懸けて紀伊の中央地方である。熊野川沿岸、北山川沿岸、頗る人意を強うするに足るの險路峻坂もあり、深山でなくては見得られぬ珍奇なる植物、複雜にして色彩の變化に富める雲影などをも見ることが出來るが、それでも信濃、飛驒あたりの山から比べると、其廣袤と雄大との點に於て甚しく劣る。それに、住民も中々よく發達して居る。

▲紀伊と言へば、暖かいところで、實に冬の無い國と言つて宜しい。それは暖流が丁度其の南海岸數里の處を横ぎつて流れるからで、日本國中、榕樹の發生する地方は、此處を除いては他に求むることが出來まいといふ。自分はそんなことくは知らず、紀州は山國、嘸ぞ寒いであらうと、三月の下旬に、伊勢から十分なる準備を爲て行つた處が、新宮に入ると、まだ伊勢地方では夢にも知らなかつた櫻が咲いて居る、夏蜜柑が黄く熟して居る、殊に、初蛙が樂しさうに、啼いて居るには驚いた。けれど、この暖流の影響から、雨が非常に多く、其量は本邦中優位を

占むるところである。

▲紀伊の萬山の裡を越えて、大和の吉野郡、宇陀郡、此附近には、歴史上の面白味が非常にある。神武天皇が浪速に上陸して、しかも大和に入る能はず、更に引返して、大迂回に、紀伊の熊野から、伊勢大和の境に進入したことを考へると頗る興味がある。ことに、宇陀郡には、種々の古蹟があつて、遊人の興を惹く處が多い。

▲近畿遊覽者は、京都、奈良。そこにのみ眼を注ぐ。成程、京都、奈良は歴史の中心、美術の中心、觀るべきものが多いに相違ない。けれど、この宇陀郡なども閑暇が有つたなら、行つて見るが宜しい。三輪、初瀬、多武峯、そこまでは、行く人があるが、其の長谷川に添うた一道の伊賀街道を辿つた者は極めて稀である。其處を進むと、二里ばかりで、榛原と言ふ田舍町がある、これが神武天皇の弟猾兄猾などを征服した遺蹟で、かの有名なる祝歌なども、皆此附近で咏ぜられたのである。其他、その附近に、其當時の遺蹟が澤山に殘つて居る。天皇が登臨して國見をせられたといふ高峯も、缺けず崩れず、依然として、朝雲暮靄の中に聳えて居る。それから、猶二三里ほど進むと、段々山が深くなつて、右の一つ峠を越した擂鉢のやうな小盆地に、天平時代の遺趾、室生寺の巨刹がある。此寺は、往昔は非常に隆盛を極めたもので、盆地に下り來る四方の峠には、皆な一つ

づゝ門番の寺があつたものだ。今日でも、伊賀街道に面した峠の上には、其遺趾が残つて居る筈。其盆地の光景を想像して御覽なさい、杉樹、檜樹、松樹、――此界隈は例の大和大官林の區劃であるから、其林相の美しいことは非常、晝も小暗き林の中に、淋しい梟の啼聲がして、しんとした天地に、何處を流れて居るのか鳥渡解らぬ溪流の音が遠く聞える。不圖、路は坂に懸つて、林の疎らな處に、二三の人家、そこの腰掛に腰を息めて、前後を見返ると、林の連つた梢の上に、高い五重塔、寺、瓦甍。何うです、これが千二百年來の古建築で、その附近は、わが皇祖の遠征軍の宿營地、悠久な感を起さずに居られやうか。

▲この街道を猶蟇直に、伊賀に入ると、かの往昔の那婆裡（名張）川が流れて、名張町はもう程無い。

▲河内の金剛山、楠木正成の孤忠の爲めに非常に著名になつたのは、三尺の兒童も猶これを諳んじて居るが、此山は葛城山脈の中の主峯を爲して居るばかりでなく、前と後とが平野に臨んで居るが爲め、鳥渡眼に附き易く、隨分遠くから指點することが出來る、自分が其山を千早から吉野に越えたのは、明治三十一年の四月十三日と記憶して居るが、其後、近畿を往來して、其のなつかしい山の姿を望む毎に、其絶巓に棲んで居る一非凡神官を憶ひ出さずには居られぬ。其山巓の葛城神社、

當時はそれがもうすつかり大破して、神官の住んで居る處は、丸で繩かに雨露を凌ぐに足れる小屋であつた。それより以前、友人江見水蔭兄が、葛城山といふ短篇を書いて、其中にも、多少其附近の古神社の大破せる實景を描いて居つたので、其山巓に、さる神官が住んで居るのを朧ろげながら自分は知つて居つたて自分は千早で食ふ豫算の午餐が得られなかつたので、空腹を抱へて、二十五町の險坂を登つたが、其神官の家に飛込むや否や、何うか何が無くとも好いから、午餐を食はして呉れ給へと、達つて賴んだ。其の小屋の光景――今でもよく覺えて居るが、狹い低い天井は年月に黑ずんで、八疊か十疊の一室には、一面の書籍、前の棚には神體らしいものが置かれてあつて机の前には熊の皮を布いて坐つた四十何歳の神官。其の顏は一目見た自分は既に其の凡人でないのを悟つたが、段々話をして見ると、愈々俗でない。愈々非凡である。この一名山の山巓にかゝる大破せる神社と共に生活するのも尤もだと思はれたので、自分は午飯を恵んで貰つたお禮に、『くだり行く世のありさまを厭ひてやひとり高根に君は住むらん』と紙に書いて出すと、神官は非常に喜んで、知己だと言つて、それから互に名乘合をして、この神官の葛城眞純氏であることを知つた。氏も其當時、臥床を負ひ、草鞋を穿ち、雨風に打たれたしよぼたれの一青年旅行家を記憶して居られるであらう。其後、氏には逢つたことは無いが、氏の噂は種々の人からも聞き、新聞紙上などにも折々

見た。氏が葛木神社の經營に熱心せられた結果、世人の誤解を受け、或は奇人視せられ、或は山師視せられ、甚しきに至つては、狂人視するものさへあるといふことをも聞いた。

▲けれど、自分の最初の印象は未だに去らず、今日猶其人の性質と其人の一生とを考へて、遙かに金剛山の翠微を思ふことがある。それに一層自分の胸に忘れられぬのは、氏には令孃が二人あつて、共に東京に出て、苦學して居られたが、ある日父の紹介狀を携へて、自分の家を訪ねて來た。其折、姉妹から其の金剛山上に生立ちたる幼き頃の追憶のいろ〳〵を聞いて、自分は何んなに詩興を惹いたであらうか。名山の絕巔に、この非凡なる神官、此の二少女、小說的の自分の胸の動いたのも無理ではあるまい。けれど今は其大破せる神社も修築せられたのであらう。

▲金剛山を越えて、河内の平野、其向うの丘陵を横ると、和泉の國、茅渟の海、泉南郡の日根野は、昔、允恭天皇が一代の佳人衣通姫を圍つて置いた處で、遊獵に事寄せて、よく其處に出懸けて行つた事や、愛戀の意の滿ちた國風を咏じたことなども、皆な歷史に記されてある。此の日根野の西二里の處を、今はかの南海線の鐵道は通じて居つた、其彼方は平滑なる砂濱、穩雅典麗を極めたる青松の列、四國の山は淡として、月夜美しき金波銀波。

▲神戸の沿革は鳥渡面白い、新開港場の雜遝また雜遝、人氣は惡く、物價は高く、汽笛の響、烟突の影、更に興を惹くものとては無いが、一度攝津名所圖會を繙くと、忘れ難い感を起さずには居られぬ。生田神社の圖、楠公祠の圖、――これを見た丈けで、如何に其地が荒涼たる海邊に僻在してあつたかゞすぐ想像される。生田の杜の社前からは、長く並木松が兩列になつて連つて、其周圍前後は皆田畑、並木松の盡頭は、海岸。そこに一基の華表が海に臨んで立つて居た。賽者は多く海を渡つて來たもので、其の並木松の處々、櫻樹が交じへて植ゑられてあるので、春はそれが爛漫と咲いて、海山の美しい風景と相掩映し、頗る俗塵を離れて居つたので、大阪或は兵庫から、態々瓢を携へ、莚を携へ、好奇者は三絃などをすら携へて來て、一日をおもしろく其並木松の中に遊び暮すのを例として居た相だ。兵庫は既に往昔から開けて、曾に西國街道の一驛たるのみならず、港としても充分なる發達を遂げて居たが、其兵庫を出て、今の湊川の堤防の上に來ると、西國街道はよぢ〳〵と其處から下つて、海岸には二三の漁村、漁網の高く夕日に曝されたのが畫のやうに見えて、今の埠頭附近には、百石二百石積の和船が、或は帆を揚げ、或は帆を下して集つて居る。其海岸の漁村には、古風な料理店が三四軒、あやしげな三絃の音がして、所謂走り鐘なるものが、にこにこと白粉をつけて沙濱を歩いて居るといふ光景。今でも、志摩とか、能登とか、中國筋とかのさびしい不便な海岸へ行くと、よくさういふところに邂逅することがある。そして、此の街道を通る旅

客は必ず路傍の人家、或は野に働ける農夫に、立留つて、楠公祠の所在を聞くのが例。と、農夫は鋤の手を留めて、田畝道のうね〳〵と曲り勝なのを叮嚀に教へて呉れる。今、雑踏を極めて居る楠公祠は、其頃田畝の唯中に了然として立つて居つたので、二三株の赤松、其下にかの忠臣楠子之墓の碑が立てられてあつたのである。頼山陽が『月暗楠公墓畔村』と吟じた當時のさまも思ひ出される。

▲丹波は山國で、大江山と言へば、曾ては鬼が往んだと言はれる處、それにも拘らず、餘りに高い山が無い。唯だ是れ丘陵の相起伏するばかりで、輕氣球にでも乘つて見下したならば、極めて低い山の連亙、卽ち地理學上で、山地と言ふ字に該當する。從つて山と山、丘と丘との間に、村があり、林があり、溪流があり、田舍町があつて、道路は其間をうね〳〵と或は昇り或は降りつゝ縫ふやうに駛つて居る。其山、其丘の稍々開けた處に出ると、四面翠微を帶びた標式的盆地、其處には必ず白堊粉壁、水の清い、少女の美しい、詩的な町が見渡される。そして此盆地は曾て谷湖であつたことはすぐ想像される。龜岡、篠山、福知山など皆なそれである。

▲丹波山地には、栗、楢などの雜木が多い。丹波栗の名は幼稚い時から聞いて知つて居るが、其粒の大なる種は、國から國へと傳へられて、いかに遠い僻境の子供を喜ばせたことであらうか。それから竹の林が多い。街道を傳つて行くと、何町と連つた竹の林の陰に、機杼の音が微かに聞えて、

鄙乙女の歌を唄ふ聲も手に取るやうに耳に入る。竹の林を外れると、田舍の五六軒の茅葺屋根、今の機杼の音は其處から來たので、好奇に窓に立寄る旅客の一群、若い同志の一語二語に花が咲いて別れて後も、深く其の面影、其歌曲を忘れぬ情も籠るであらう。

▲往昔、京都の人は、丹波の山地を、極めて開けない野蠻な恐ろしい地として居つたけれど、しかし都會の榮華、名利に愛憎を盡した隱者――卽ち社會の落武者は、多くは比叡、愛宕の山脈を越えてこの山中に遯れたらしい。今日でも、其村々は、藤原家や平家の歴々の子孫が隨分殘つて居るとのことである。

▲丹波から丹後に出ると、地形が餘程變つて、河流も大きく、山も山地と言ふよりは寧ろ山塊の趣を爲して居て、高距は左程大ではないけれど、各々特立して居る。福知川の下流、由良川の河口から三里ばかり、溶々たる流を爲して居るのは、奇觀だ。宮津に行くと、例の天の橋立。

▲丹波から若狹、越前に至る間の海岸は、中々風景に富んで居る、西は但馬に入ると、平滑なる沙濱、東北は越前杉津を越えると、同じく單調なる沙濱、この間の海岸が所謂一種の特相を爲して居るので、絶壁直ちに海岸より聳立し、日本海の怒濤はこれに觸れ、これに激し、無限の壯觀を呈するのみならず、其四時不斷の力は、十分なる侵蝕作用を逞うして、或は若狹の海岸に於ける大門小